

# 甲南英文学

NO.12 泰 1997

甲南英文学会



## 編集委員

(五十音順, \*印は編集委員長)

青山義孝, 小寺里砂, \*西條隆雄, 高橋勝忠, 中島信夫, 前田禮子

## 目次

<i>Rosinson Crusoe</i> における父と子—原罪を巡って……………	山口 徳一	1
Performing Pedagogy: Authority and Male Identity in Charlotte Brontë's <i>The Professor</i> ……………	Anna Ford	13
“Elaine, the Lily Maid” に託されたメッセージ —Malory と Tennyson の相違点をふまえて—……………	堂村由香里	29
<i>The Rainbow</i> における幻想と幻滅……………	横山 三鶴	45
“Vacillation”に見られるイエイツの詩の原理について……………	藤本さおり	57
“Red Leaves” 考 —二つの世界の間で—……………	沖野 泰子	71
不毛な世界—“Mr. and Mrs. Elliot”……………	鷲尾 順子	83
A Derivational Approach to Multiple Specifier Constructions: The Case of Scrambling……………	Minoru Fukuda	95
日本語における数量詞作用域に関する一考察……………	南條健助・中野景介	113



# *Robinson Crusoe* における父と子 ——原罪を巡って——

山口 徳 一

## SYNOPSIS

In *Robinson Crusoe*, Daniel Defoe's real life as the son of a Puritan family and as a journalist is reflected. In a sense, an allegorical point of view coexists with a realistic one, but it is not clear which is the superior.

If we consider the comment made by Crusoe about original sin as envisaged by the Old Testament, when he refers to “. . . the excellent advice of my father, the opposition to which was, I may call it, my original sin . . .,” then we might be justified in concluding that Crusoe, and Defoe himself, are captured by Puritanism.

However, when we consider Crusoe's relationship with his putative son, Friday, which is generally seen as a revival of aspects of his lost relationship with his father, not as a father-son relationship of the Old Testament, but as a king-subject one, then it could be concluded that his original sin, the important motivation behind the story, should be a way of expressing his irony as a journalist.

## はじめに

In the Elizabethan time the relations between parents and children seem on the whole to have been more kindly. The fathers and the sons are for the most part friends in Shakespeare . . . .<sup>1</sup>

ヴィクトリア朝の父親像破壊者として知られるかの Samuel Butler が、悔恨めいて振り返っているように、エリザベス朝を境に父子間の関係は大きく変化する。例えば、亡父の偉大さを賛美してやまない、ある種 ‘father complex’ 的な Hamlet に見られるような親密な父子関係は、それ以後姿を消してしまう。そしてその最大の要因こそピューリタニズムの影響にほかならない。

エリザベス時代は一般に、いわゆる「若気のいたり」が有益なものであると認められた時代であった。若者が人生を見聞しておくことが良しとされた。つ

まり大人と子どもが親しく交わり、早くから世間というものに慣れておくことが、後々の人生に役立つとされ、そのために父親と息子の関係は全般的に「穏和」なものであった。しかしながら、子どもが父親と親しく交わるということは、一方で、幼くして世間的な悪習慣を身につけるということでもあり、そのために不敬な言葉をはいたり、酒を飲んだりする子どももまま見られたという。ピューリタンたちが異議を唱え、革命を起こすべく立ち上がった一因には、そうした道徳的墮落、そして親の無責任さというものがあつた。

ピューリタニズムの最も特徴的な教義とされるのが、1647年のウエストミンスターにおける宗教会議で、カルヴィニズムがその教義とした「恩恵による選別の教説」、いわゆる「予定説」である。そこにはっきりと謳われているのが、「人間は皆原罪を背負って生まれ、従って人間が神によって救われるか否かはすでに前もって定められてしまっていることであり、個々人がどうすることも出来ない」という思想である。<sup>2</sup> そしてそのような「原罪」の教義のために親は子どもの生まれ持った性質に対して不信感を抱くのである。あのピューリタン作家として知られる John Bunyan でさえ、「子どもは呪われた生き物であることを忘れてはならない」と語る。<sup>3</sup> ピューリタンたちが異常なまでの厳しさで、鞭を惜しむことなく子どもの躰にあたるようになるのも、ひとえにそうした教義が彼等の態度の根底に潜むからである。加えて忘れてならないのが、ピューリタン達のもつ、「父の意思は神の意思である」という観念。ピューリタニズムが旧訳聖書に大きく依存しているということは、神学上の定説であるが、<sup>4</sup> そうした旧訳の伝統から (Exod. 20:12, Deut. 27:16)、父=神という考えがピューリタンにとっては当然のこととなっていた。生まれながらにして罪を背負った子ども達、そして父は神。このような考えから、親密な父子関係は失われていったのである。

### Crusoe as a Puritan

17世紀の時点ですでにピューリタンという言葉は、今日のように、エリザベス時代よりもより厳格な生活態度を目指す人々に対して広く用いられるようになり、Daniel Defoe の時代には、もはや Bunyan の時代に見られたような、世界を作り直すという政治的思想は全くなかったと言える。しかしながら、そのような中でも本来のピューリタニズムに忠実であろうとする「派」が存在した。それが Presbyterian、いわゆる「長老派」と呼ばれる、ピューリタンの中でも、とりわけカルヴィニズムをあらゆる点で厳密に固守した一派である。Daniel

Defoe の両親こそはその熱心な信徒であった。(彼の父親は Defoe を聖職に就けようとして考えていた)。そうした事実により、熱心なピューリタンの父と Defoe の間には、いわばピューリタンの父子関係が、少なからず存在したであろうと推測するのは可能である。

無論、Defoe は Crusoe であり、Crusoe の父は Defoe の父であると一刀両断に断定してしまうことは不可能であろう。<sup>5</sup> 確かに *Robinson Crusoe* の序章において、彼は “a just history of fact” と語り、<sup>6</sup> 数年後に書かれた *Serious Reflections* においても、かの作品は自分自身の人生のアレゴリーであると語っている。<sup>7</sup> それは、しかしピューリタンとしての言い訳であって、つまり嘘をつくことが許されない、想像力を禁止された彼等にとっての一種の逃げ口上であると捕えるのが妥当であろう。Plymouth Brethren というこれまた厳しいピューリタン一家に育った Edmund Gosse の父親が、小説を読むことを子どもに許さなかったように、<sup>8</sup> 物語＝嘘＝罪というのが、ピューリタン達の考え方であったのだから。しかしながら、実際の Defoe の人生を振り替えてみると、忘れてはならない出来事がある。それは、先にも述べたように、自分自身が、父の望むように、長老派教会の牧師にならなかったということ、資本家、投資家として彼は二度まで破産したこと、そして債権者監獄に投獄されたことである。父の家からの出奔、難破船からの多大な物資という資本の島生活への投資 (“the biggest magazine of all kinds . . . that was ever laid up for one man” [74]), そして誰もいない島での孤独な生活 (Crusoe は常に島のことを「牢獄」と表現している)。こうした事柄を考慮すれば、Crusoe = Defoe とは言えないまでも、少なくとも Defoe の実人生が作品に反映されていることは、否めない。

一方、そうしたヒストリーの要素に加えて忘れてならないのは、物語の宗教的な意味でのアレゴリー、あるいはタイポロジーという要素である。神に背いて原罪を犯し、楽園を追われたアダム (Gen. 3)、神の命に逆らい、難破したヨナ (Jon.)、そしてまた父の下を去って身をもちくずした放蕩息子 (Luke 15:11-32)。こうした要素がすべて、*Robinson Crusoe* からは読み取れる。ゆえにピューリタンの説教師たちが、ちょうど Bunyan の *The Pilgrim's Progress* のように、教訓的、宗教道徳的意図を物語に託したように、Defoe もまたそうした moral lesson を伝えるということ、物語の大前提としていることが伺える。そして、そのような自身の実人生の反映と宗教的教訓の訴えを最大限に暗示しているのが、この Crusoe の語る原罪感であろう。

... the excellent advice of my father, the opposition to which was, as I may call it, my original sin . . . (198)

さらにこれが、同時に物語における最大の motivation であり、この反抗によって物語が始まり、それに対する後悔によって物語が展開されることを考えれば (Ian Watt によれば、この原罪感<sup>9)</sup>は資本主義の原動力でもある) Crusoe の嘆くこの原罪感こそは、Defoe の最も意図するところのものであろうということは、想像に難くない。

父の忠告を無視し、家を飛び出すという原罪を犯した Crusoe は、「日々の糧を求めて、額に汗して働かねばならなくなった」(Gen. 3:19) といういわばアダム的な意味では、楽園を追われ、生きるために苦しまねばならなくなった訳である。しかし Max Weber のいうように、やがて資本主義の発達につながる、脱世間的な修道院ではない、世俗内の生活における孤独を求めることによってピューリタンたちが究極的に意図したもの、それが精神的に神と交わるということであったということを考えれば、Crusoe の難破は、一般の生活においては容易に得られるはずのない、神との交わりのための孤独というものを寓意的に意味することになる。

... His presence and the communications of His grace to my soul, supporting, comforting, and encouraging me to depend upon His providence here, and hope for His eternal presence hereafter. (125)

そうなれば Watt の言う、Defoe は孤独状態における人間の心理を無視しているという批評は、<sup>10</sup> たとえそれが真実であるとしても、あまり意味のないことであって、宗教的な寓意という思いが、Defoe に現実をあえて無視させたと考えればよい。世俗的生活における精神的孤独こそは、彼等ピューリタンたちが、神との精神的な対話のために、最も求めていたものであるのだから、精神的だけでなく、実際の生活においても孤独を得ることが出来たということは、宗教的にはこの上なく恵まれた境遇といえる。

... I was remov'd from all the Wickedness of the World here. I had neither the lust of flesh, the lust of the eye, or the pride of life. I had nothing to covet . . . (139)

Crusoe はそうした肉体的・精神的な孤独の中で、神との対話を享受するようになり、Bunyan の Christian 同様、神への不信そして後悔を繰り返し、やがて改悛へと到達する。



Thus I lived mighty comfortably, my mind being entirely composed by resigning to the will of God, and throwing myself wholly upon the disposal of his Providence. This made my life better than sociable, for when I began to regret the want of conversation, I would ask my self whether thus conversing mutually with my own thoughts, and, as I hope I may say, with even God himself by ejaculations, was not better than the utmost enjoyment of human society in the world. (146)

これこそは彼の悔い改めの心境であり、したがって宗教的な意味では、この物語のクライマックスと言わねばならない。

しかしながら、実際にはこのような宗教的クライマックスはこれ一つではないのである。つまり、彼のそのようないわば悟りの境地が長続きすることは決してないのであって、悔い改めたと思えばまたもや振出しに戻る彼は、言うなれば Christian のように、シオンへ行き着くことは決してない人物なのである。

### Defoe as a journalist

当時、大航海時代の17・8世紀に人々に大いにもてはやされていたのは、‘travel book’あるいは‘adventure story’と呼ばれる、いわゆる旅行記である。異国の民族や動物に対する素晴らしい発見が、年代順に、均等に、あるいは劇的に描写されたそのような読み物を、Defoe が source にしていることは疑いない。Crusoe のモデルである、孤島に置き去りにされた Alexander Selkirk に関する記事は当時の人々の関心を大いに集めてもいた (Defoe もまた実際そうした記事を読んでいたらしい<sup>11</sup>)。ジャーナリストとして大いに政治、宗教論戦で成功を収めた彼だからこそ、大衆の心をひく術を心得ていたわけであり、彼が *Robinson Crusoe* を当時流行のそのような読み物をベースにして書いたのもうなずける。彼の芸術が "idea" よりも事実に基づかれている<sup>12</sup>というのは、そのようにジャーナリストとしての視点で、物語を語っているからであろう。物語中の非常に細かい、何の感情も交えることのない落ち着いた客観的な描写に、それがよくあらわれている。

I never saw them afterwards, or any sign of them, except three of their hats, one cap, and two shoes that were not fellows. (66)

... and the next day I ordered him to go and bury the dead bodies of the savages,

which lay open to the sun, and would presently be offensive . . . (241)

一方そうした realistic な描写に加えて、さらにジャーナリストとしての面目躍如は、物語の随所に見られる irony である。よく引き合いに出されるのが 難破船で金貨を発見する場面である。

I smiled to my self at the sight of this money. 'O drug!' said I aloud, 'what art thou good for? Thou art not worth to me, no, not the taking off of the ground; one of those knives is worth all this heap; I have no manner of use for thee, e'en remain where thou art, and go to the bottom as a creature whose life is not worth saving.' However, upon second thoughts, I took it away, and wrapping all this in a piece of canvas, I began to think of making another raft . . . (75)

この irony が Watt, Bonamy Dobree 等が言うように偶然の所産か、あるいは S. T. Coleridge, William H. Halewood 等が認めるように、Shakespeare にも匹敵するものであるのか否かということはここでは問わない。<sup>13</sup> しかし、ここに見られるような irony が物語中いたるところに存在し、この後 Jonathan Swift 等に引き継がれていく、irony による物語の先駆をなしたというのは明らかであって、このような面においても、この物語のジャーナリズム性というものがはっきりと伺えるのではないだろうか。

したがって、*Robinson Crusoe* という物語には、先に述べた教訓的で宗教的な視点に加え、そうした現実的で journalistic な視点が、混在していると言えるのである。

### Crusoe as a realist

Edwin B. Benjamin はカヌーによるあわやの難破を、Crusoe の時期尚早な島からの脱け出しに対する神の警告とみなす。<sup>14</sup> その時彼は一応は後悔し、救かったことに対して、心から神に祈る。

When I was on shore I fell on my knees and gave God thanks for my deliverance, resolving to lay aside all thoughts of my deliverance by my boat . . . (151)

しかしそんな彼は、決して失敗に懲りることはなく、その後もまた脱出のため

のカヌー造りに取りかかるのである (226-30)。ちょうど、幾多の失敗を繰り返しながらもテーブル、土器などの生活必需品を手に入れて行くあの過程と同様に。そこには、失敗を冷静に受け止め、細かく反省し対処してゆく、現実を冷静に見つめる目がある。Virginia Woolf も言うように、<sup>15</sup> 常に現実を見つめる客観的な視点が *Robinson Crusoe* には「支配的に」認められるのである。神を信頼する安寧な日々を送っていた彼は、砂浜に人の足跡を発見したとたんに、神を敬う心を無くし (162-64)、「ヨーロッパへ帰るやいなや、古い外套のように、宗教心を脱ぎ捨ててしまう」<sup>16</sup> といわれるように、彼の宗教的熱意は決して長続きすることはない。しかしそれは、結局、彼が現実から目を背けることがないからではないか。イギリス種の大麦と同じ麦が、地面から数本生えているのを見た彼は、これぞ神の加護と感動し、涙さえ見せるのだが、彼の宗教的熱意は、すぐに現実的で、客観的な、ジャーナリストの目によって打ち消されてしまう。

... at last it occur'd to my thoughts, that I had shook a bag of chickens' meat out in that place, and then the wonder began to cease; and I must confess, my religious thankfulness to God's providence began to abate too, upon the discovering that all this was nothing but what was common . . . . (95)

不遇な無人島での処世術として、彼は悪い面は見ないようにすることを学ぶのであるが (I learned to look more upon the bright side of my condition, and less upon the dark side . . . [140-41]), 結局、“bright side” と “dark side” を分類できるのは、どちらの面も認識しているからできるわけであり、かくしてリアリストとしての視点が彼から離れて行くことは決してないのである。

第一部の終りで語っているように (298)、彼はまたもや航海へと出かけて行く。いみじくも彼の言う “that propension of nature” (27) そして “the general plague of mankind” (198) という、彼に原罪を犯させることとなった、いわば性悪的な自身の性質に従うことを決してやめることはない。それはちょうど、彼のジャーナリストとしての性質が、あらゆるものを客観的に、偏見なく捕えているのと同様である。つまり、そうした本能に対しても、悪というピューリタンの先入観を交えることなく見ているのである。ただそうしたいからする。ゆえにまたそれが善であるとも捕えていない。確かに彼は父の忠告を無視し、自身の本能に従うことによって、結局父よりもより大きな財産を得たとは語っているけれども (297)、彼の兄は二人とも、そのような Crusoe と同じ放浪癖のために死亡、あるいは行方知れずになっているのだから。絶海の孤島という

大自然の真っただ中で、自然に無理に逆らうことなくうまく融合して生活してきたように、人の「自然な」本能に対しても、彼は結局逆らうことはない。いみじくも“... let be what would be” (203) という彼の言葉が示すように。

### Crusoe and Friday

家を飛び出し、父との関係を断ち切った Crusoe だが、原住民 Friday との関係において、失われた父子関係を復活させると解釈するのが一般的である。それは“his very affections were ty'd to me, like those of a child to a father...” (211-2) という言葉からも明らかであり、Friday とその実の父との再会の場面を目のあたりにして、Crusoe が大いに感銘している場面からは (237-8)、精神的な意味における、父との和解であると解釈することもまた可能であろう。しかしここで注意しなければならないのは、子どもとしての Friday の態度は Crusoe 自身の父への態度とはよほどかけ離れているということである。

... he made all the signs to me of subjection, servitude, and submission imaginable, to let me know, how he would serve me as long as liv'd. (209)

そのように、いわゆる ‘man Friday’ と呼ばれる彼の Crusoe への態度は、絶対的な服従のそれである。一体、Crusoe、そして Defoe は、神の如くに絶対的に従わなければならない父親に背いてしまったことに対する後悔の念、それゆえに、新たに再現された子どもを、父親に対して非常に従順な、父の命令に絶対背くことのない子どもに仕立てることによって、過去の自分自身の原罪を償おうとしているのだろうか。

Manuel Schonhorn は Friday に対する Crusoe は、父らしい存在であって、父ではないと言う。<sup>17</sup> つまり Crusoe の Friday に対する絶対支配的な力とは“political”なものであって、父としての力ではない。彼によれば Defoe は当時の政治学者、Tyrell, Sidney, Locke らに従い、<sup>18</sup> 父親というものは、“generation”によるものではなく、「教育における、骨折り、世話という高貴な義務を果たして得られる」ものであるから、国家の始まり（支配権）は、Filmer の言うような、一族的なものから生じたのではないとみなしていたということである。彼の論でゆくと、父としての Crusoe の役割は Friday に言葉を教え、食人をしないように戒める、まさしく教育という点においてのみ果たされており、ここに父と子の関係が見い出されるということになる。一方、Crusoe への Friday の

絶対服従の関係は、国王と家臣の関係ということになろう。彼の言う「父らしい存在であって、父ではない」というのは、まさにそこにあるが、ここで我々はピューリタンたちが、旧訳聖書に大いに依存していたということを考えてみなければならない。つまり旧訳聖書における父と子の関係は、“biological”な意味における父と子の関係である。そして大きくは族長と子孫たちという関係である。自分の子ども、イサクを神の生贄に捧げようとしたアブラハム (Gen. 22)、神に忠実なヨナダブの子孫には繁栄の絶えることはない (Jer. 35)、という具合に、父が神として絶対の支配を子どもに下すのは、実際の血の繋がりを持つ子どもに対してなのである (その意味では Schönhorn が言うように、Friday がイギリス人どころかまったくの異民族であるという設定はある重要な意味を帯びる)。しかるに Defoe が旧訳の“biological”な父子関係から、神的支配権が生じたのではないと考えていたとすれば、つまり、父と神を同一視していたのではないとすれば、物語においてCrusoe が後悔して止まない原罪の観念の暗示する父=神という思いは一体何なのだろうか。

## 結び

この物語は非常に綿密に構成されていると評される。たとえば、物語の最後にピレネーを超えるエピソード一つにしても、決して余分なものではなく、島に到着するまでの彼の捕虜生活と対照されている。あるいは物語は事件が完全に解決するまえに、次の事件が導入され、読者のサスペンスをたもつ等々。<sup>19</sup> Watt が *Robinson Crusoe* をもって、小説の嚆矢とするのもうなづける。<sup>20</sup> しかしこの物語の最大の特色と言え、かの irony であろう。無意味な山羊の囲い (156)、一人で運べないボート (137-39)、キリスト教徒の行った殺戮の正当化 (178) 等、数え上げればきりが無い。そしてその中でも最大の irony が、恐らく、Crusoe の “... the excellent advice of my father, the opposition to which was ... my original sin ...” (198) という原罪観ではないだろうか。この物語の最大の motivation ともいえる原罪観、すなわち父=神が、実は何の意味を持たないものであると考えられるならば、これ以上の irony はないのだから。

ピューリタニズムの影響のもと、エリザベス朝以降、父の子どもに対する厳しい態度は、Rousseau やそれを受け継いだロマン派の詩人たちの子どもの発見を受けながらも、風紀紊乱のジョージ朝の反動を受けた道徳重視の厳しいヴィクトリア朝で、さらなる洗礼を受ける。やがて Freud が精神分析的に子どもは善でもなければ悪でもないということを、科学的に証明するまでそれはつづ

いて行く。<sup>21</sup> そうした中であって、Defoe は18世紀初頭、*Robinson Crusoe* を書いた時点で既に、父の神性化、子どもの原罪というものの無意味さを感じ取っていたのではないか。小説がリアリズムに始まるとすれば、まさしくそのリアリズム故に小説とされるこの作品が、そのような宗教的・社会的偏見を乗り越えていたとしても不思議はない。

## 注

- 1 Samuel Butler, *The Way of All Flesh*, ed. James Cochrane (London: Penguin Books, 1986) 52.
- 2 Max Weber, *The Protestant Ethic And The Spirit of Capitalism*, trans. Talcott Parsons (London: George Allen & Unwin Ltd., 1930) 99-100.  
 “Chapter IX (of Free Will), No. 3. Man, by his fall into a state of sin, hath wholly lost all ability of will to any spiritual good accompanying salvation. So that a natural man, being altogether averse from that Good, and dead in sin, is not able, by his own strength, to convert himself, or to prepare himself thereunto.  
 “Chapter III (of God’s Eternal Decree), No. 3. By the decree of God, for the manifestation of His glory, some men and angels are predestinated unto everlasting life, and others foreordained to everlasting death.”
- 3 “Puritanism.” *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, 1908.
- 4 G. A. Starr, *Defoe and Spiritual Autobiography* (Princeton: Princeton University Press, 1965) 78.
- 5 John Robert Moore は、Defoe は長老派の一員としての自らの経歴を *Crusoe* に与えているとみなすが (“Robinson Crusoe,” *Twentieth Century Interpretations of Robinson Crusoe*, ed. Frank H. Ellis [Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1969] 58.), 同時代の Charles Gildon は、Defoe の本心なぞ到底わからないと語り (“The Life and Surprizing Adventures of Mr. D-De F-.” *Daniel Defoe Robinson Crusoe*, ed. Michael Shinagel [New York: W. W. Norton and Company, 1994] 257), William H. Halewood も *Crusoe* の宗教熱は Defoe のそれではないと述べている (“Religion and Invention in *Robinson Crusoe*.” Ellis, 79)。
- 6 Daniel Defoe, *The Life and Adventures of Robinson Crusoe*, ed. Angus Ros (London: Penguin Books, 1985) preface. (以下テキストからの引用は、本文中の括弧内に頁番号のみを記す。)
- 7 *Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of Robinson Crusoe*, ed. George W. Aitken (London: J. M. Dent & Sons, Ltd., 1899) 101.  
 Defoe が自身の作品をアレゴリーと呼んだ理由を Frank H. Ellis は以下のように述べている。  
 “We do know . . . that when Charles Gildon called it [*Robinson Crusoe*] ‘nothing but a Romance,’ Defoe seems to have been very resentful . . . . Since all the effects of *Robinson Crusoe* depend upon its lifelikeness, it is easy to imagine why Defoe wished to dissociate his work from this genre.  
 “On the other hand, ‘romance’ also implied that what Defoe had written was not true. ‘Fictions and Lies’ was what Charles Gildon called it, and without any tradition of realistic fiction to appeal to, Defoe was helpless. His only recourse was to insist that his work was not literally but allegorically true.” Ellis, introduction 8.
- 8 Edmund Gosse, *Father and Son* (London: Penguin Books, 1949) 160.
- 9 Ian Watt, “*Robinson Crusoe*, Individualism and the Novel.” Ellis, 41.
- 10 Watt, 50.
- 11 Ellis, 4.

- 12 J. Paul Hunter, "[The Un-sources of *Robinson Crusoe* ]." Ellis, 107.
- 13 Halewood, 86-7. Maximillian E. Novak, "Economic Meaning of *Robinson Crusoe*." Ellis, 100-1.
- 14 Edwin B. Benjamin, "Symbolic Elements in *Robinson Crusoe*." Ellis, 37-38.
- 15 Virginia Woolf, "*Robinson Crusoe*." Ellis, 22.
- 16 Benjamin, 36.
- 17 Manuel Schonhorn, *Defoe's Politics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) 160-1.
- 18 Locke は『人間悟性論』において、人間の心は「タブラ・ラーザ」のようなものであり、そこには生まれつきの観念などなく、経験によってのみ観念が生じるという経験論を提示するのであるから、ピューリタンの子どもたちの原罪感を認めていないことになる。ゆえに Defoe が彼に傾倒していたという事実は、大きな意味を持つと思われる。
- 19 E. M. Tillyard, "Defoe." Ellis, 63-69.
- 20 Watt, 54.
- 21 Peter Coveney, *The Image of Childhood* (Penguin Books, 1967)





# Performing Pedagogy: Authority and Male Identity in Charlotte Brontë's *The Professor*

Anna Ford

## SYNOPSIS

Here Charlotte Brontë's *The Professor* is examined with regard to the formation of male identity through the role of the classroom teacher. This paper looks at the novel from a sociological viewpoint, examining the way in which the narrator-protagonist removes the stigma of an identity that is feminized, powerless and penniless through the work of teaching. The affect of shame that permeates the novel is made use of by the Professor as a teaching method: feeling shame, he attributes it to others, especially the young women students who are in his care, and in causing humiliation, shame and mortification, he rehabilitates his spoiled identity. Pedagogy is examined here as a particular form of the many different means of performance that underly the construction of gender, and will be considered with particular emphasis on the nature of the Victorian gendered classroom.

In her first novel, *The Professor*, Charlotte Brontë stages the development of a male orphan from badly-paid clerk in his brother's firm to independent headmaster. If the beloved Victorian disciplines of self-control and self-reliance enable William Crimsworth to navigate his path to success, the outcome is his achievement of mastery both at work and at home. The original working title of the novel, *The Master*, indicates Brontë's intention to describe the rise of her penniless orphan in terms that centrally involve the issues of mastery and control. Though he embarks on his career as a teacher with no experience, William quickly identifies the keys to success and is able to gain the favor of his pupils and the directress of the school where he teaches. In mounting the stage of the classroom, William also enacts his social ascension, whereby he abandons his marginal position as clerk to play out a role that more closely conforms to the ideals of Victorian masculinity. The only mature novel to be written by Charlotte Brontë from the male perspective, this narrative stance allows the author to explore a certain kind of male logic from within, and ultimately to undertake a critique of certain values prominent in the construction of masculine identity.

This novel, written prior to *Jane Eyre* in 1846, proved extremely difficult to publish. Even after the success of the latter tale, publishers were reluctant to take up a story that its author termed plain and homely. Charlotte Brontë stated her intention to write a story in which the hero “should work his way through life as I had seen real living men work theirs—that he should never get a shilling he had not earned—that no sudden turns should lift him in a moment to wealth and high station; that whatever small competency he might gain, should be won by the sweat of his brow; that, before he could find so much as an arbour to sit down in, he should master at least half the ascent of ‘the Hill of Difficulty’; that he should not even marry a beautiful girl or a lady of rank”.<sup>1</sup> She went on to elaborate the universal nature of her protagonist's fate: “As Adam's son he should share Adam's doom, and drain throughout life a mixed and moderate cup of enjoyment.” The multiple negations prominent in this description announce the nature of the work, and probably give some suggestion of what more than one critic has found lacking in the novel.

For Brontë's biographer, Winifred Gérin, among other critics, the use of a male narrator is an intrinsic demerit in the work.<sup>2</sup> For more recent critics such as Shuttleworth and Glen, who interpret *The Professor* in the light of Foucauldian theory, the male narrator is used “not as a ‘disguise’ but as a means of exploring the logic and the limitations of a particular kind of contemporary masculine stance” (Glen, 12). I take this standpoint as a departure for the following examination of Crimsworth's use of the position of professor, including his observations and application of the desired methods to achieve mastery in the classroom and over his colleagues.

\*

master n.

owner, head, chief, leader, chieftain, commander, lord, governor, director, controller, employer, manager, overseer, supervisor, superintendent, taskmaster, slave-driver, principal, sovereign, monarch, ruler, Colloq lord high muck-a-muck, Pooh-Bah, kingpin, big fish, boss, skipper, Brit gaffer, US king-fish, the man, big fish, big boss, bossman; Slang US big cheese, big wheel, Mr Big, chief or head honcho:

expert, authority, genius, craftsman, adept, maestro, mastermind, past master, old hand, virtuoso, ace, professional, Colloq pro, wizard, Chiefly Brit dab hand, US crackerjack; Slang US maven or mavin:

teacher, tutor, instructor, guide, leader, guru, swami:

*Concise Oxford Dictionary*

The original title of the novel underlines Charlotte's ambivalence to certain aspects of Crimsworth's success in becoming "the master." The rhetoric of tyranny and slavery, domination and bondage, that reverberates through *Jane Eyre*, and through much of her subsequent work, also has resonance here. Though on one level, the term "the master" simply refers to the position of schoolteacher, on another, it belongs to the language of power and powerlessness that pervades much of her writing. Her letters to her old schoolteacher, M. Heger, are a case in point. To quote from letters that date from the time of composing *The Professor*, she writes

Je me suis efforcée à ne pas pleurer, à ne pas me plaindre—Mais quand on se plaint pas et qu'on veut *se dominer* en *tyran*—les facultées se révoltent—et on paie le calme extérieur par une lutte intérieure presque insupportable. (Jan. 8, 1845)

...c'est humiliant cela—ne pas savoir *maîtriser* ses propres pensées, être *esclave* à un regret, un souvenir, esclave à une idée *dominante* et fixe qui *tyrannise* son esprit. (Nov. 18, 1845) [emphasis mine; see notes for Eng. translation]<sup>3</sup>

Thus, composed during a period of emotional tumult and amid feelings of powerlessness and rejection, *The Professor* translates Brontë's internal upheaval into a work that contains an interrogation of the roles that obtain between master and student, a relationship that forms for Brontë a paradigm of the relationship between men and women in the social world.<sup>4</sup> The mastery sought by Brontë over her wayward emotional life is achieved by Crimsworth in the novel, who employs self-discipline and control to achieve success. At the same time, the affect described by Brontë as 'humiliating' ("c'est humiliant cela") underwrites his subsequent success and forms a subtext that determines his management of others. If, as this reading of the novel will illustrate, Crimsworth never forgets the shame and humiliation that characterize his position at the outset of the novel, he is a master of detecting and inflicting such feelings on others through his teaching. Thus, the success he achieves in the world is undercut by the author's perception of how he achieves that success and at what price to his humanity. It is probably this aspect of the novel that contributes to what more than one critic has termed its 'unpleasantness.' What, then, for Charlotte Brontë is involved in becoming a man (and why is it perceived as so unpleasant)?

If the affect of shame associated with subservience permeates descriptions of

Crimsworth's emergent identity, it also becomes part of his arsenal in his battle to achieve dominance in a world that favors both physical and social superiority. Also encoded in the novel are precise physical descriptions of body language and gesture that emphasize strategies for achieving dominance. Crimsworth's use of language—peremptory and demanding—as well as his use of space, gesture and positioning help to establish his mastery in the classroom. In addition to establishing himself as a credible professor, William must also negotiate the difficulties presented by his relationship with one of his employers, who, as a woman in a position of power, has her own covert ways of achieving mastery, and one of his female students, who is at the same time a colleague of his. An examination of the communication situations that arise out of each setting, with their various participants and forms of interaction, provides insight into the workings of the masculine identity as depicted here and will be analyzed closely.

### Stigma

At the outset of his story William makes a claim to universality in his experiences as a teacher. He writes, “My narrative is not exciting, and above all, not marvellous; but it may interest some individuals, who, having toiled in the same vocation as myself, will find in my experience frequent reflections of their own” (47). William's ideal reader is thus characterized as a teacher like himself, someone who can appreciate the difficulties of his success story. In writing about this book to her publisher, Brontë describes it as giving “a new view of a grade, an occupation, and a class of characters—all very insignificant in themselves . . .” (Glen, 8) The classroom, in contrast to the subaltern position in the office where he had worked for his brother, enables the narrator to forge a new identity that confers authority. William had embarked on his career in trade when challenged about his future by his aristocratic uncles: he was given two choices of career, in the church or through a good marriage. His attempt to repudiate the aristocratic heritage on his mother's side leads him to align himself with the world of his father. He puts his realization of his dependence upon his relatives this way: “Then did I conceive shame of the dependence in which I had lived “(42). Though acknowledging internally that neither his taste nor his ambition incline him to a business career, William sees his only access to the patriarchy in following his father's footsteps into the world of trade. As an orphan and powerless in the world, William's

position is marginal and feminized. He portrays his exclusion from society in terms that liken him to "some desolate tutor or governess" (56).<sup>5</sup> The Brontëan unsociability that characterized the author is but one of the feminine aspects of Crimsworth's personality to be overcome in achieving full manhood.

As a clerk with a relationship of slave to his brother's tyrant, Crimsworth describes his "presentation of self" in the following terms: "A dependant amongst wealthy strangers, meeting disdain with a hard front, conscious of an unsocial and unattractive exterior, refusing to sue for notice which I was sure would be withheld, declining to evince an admiration which I knew would be scorned as worthless" (230-1). Despite receiving humiliation daily from his brother, he is compliant: he does not fully perceive how degrading his position is until taunted by the agitator Hunsden, who brings about his being fired. This recognition of inferiority is singled out by Samuel Smiles, the Victorian author best known for the manual *Self-Help*, as the prerequisite for advancement: "This, however, is one of the necessary conditions of human progress. If a man be degraded, he must be dissatisfied—discontented, if you will, with that condition of degradation—before he can make the necessary effort to rise out of it."<sup>6</sup> What Goffman has termed 'stigma' and written about in terms of "management of spoiled identity" is germane here. The humiliation or shame constitutes the affect related to a stigmatized identity not only provides the impetus for economic and social advancement, but provides a key to the management that will be an antidote to this condition. Thwarted in his desire to "follow in his father's footsteps," he must find a new avenue for achieving a position in the world. The novel is permeated with economic terms that mirror moral states, as in Crimsworth's search for a 'competency' or 'independence.' (see Glen, 23) This desire for independence resonates on many levels, reflecting his psychic needs just as fully as material ones. Hunsden's taunt that he will make nothing by trade, "[his] only chance of getting a competency lies in marrying a rich widow or running away with an heiress" serves to goad him into action. However, as noted above, the path to wealth through marriage has been foreclosed in advance by the author's intention to portray a self-made man. The above charge is followed with the observation that William is not bold or venturesome enough for the one, nor handsome and fascinating enough for the other. He is advised to carry his "intellect and refinement to market" to find what price is bid for them. In accordance with the vigorous capitalism of the period, a man's worth is thus shown to be explicitly linked to his earning power. Before becoming a teacher William has effectively cut himself off from both worlds inherited from his parents: the worlds of

the aristocrat and the tradesman are repudiated equally. In becoming a teacher, he is thus a self-made man.

The chance to determine a new identity is given him when he seeks work in Brussels and is offered a teaching position. William voices some misgivings about taking on the prestigious role of 'professor', protesting to his benefactor, "I am not a professor." "Oh, professor, here in Belgium, simply means a teacher, that is all" (91). Crimsworth's task to prove himself worthy of the designation of professor will be effected by his modeling himself upon the successful teachers he observes. Being a professor enables William to analyse the components of an authoritative manner and put them to use in the forging of a masculine personality. He begins this process by mimicking the performance of the head of the school.

The teacher he models himself on is the French director of the school, M. Pelet. He observes that the schoolmaster is of medium stature and rather emaciated—this description is diametrically opposed to the representation of his brother, who is large, muscular and athletic. William is struck by "the utter absence of all the ordinary characteristics of his profession and almost feared he could not be stern and resolute enough for a schoolmaster" (93). What William in fact *fears* is that he himself, physically resembling the schoolmaster and who like him presents "an absolute contrast to his late master, Edward Crimsworth," will be inadequate to the task of managing the classroom. Observing how the students respond to his employer, he makes the surprised observation that despite a mild manner and relatively small physique, M. Pelet is able to maintain an atmosphere of quiet and discipline. He observed that "if by chance a murmur or a whisper arose, one glance from the pensive eye of this most gentle pedagogue stilled it instantly" (93). This then is the model he attempts to emulate when he is asked to improvise his first lesson.

### Impersonating a Teacher

In his presentation of self in the role of teacher, he is largely concerned with what has been termed by sociologists 'impression management'. Though utterly unprepared to teach on the day that he is ostensibly being shown the classrooms, he realizes that hesitation would imperil his future relationship with the director and his pupils. He takes the podium with energy—he simulates those qualities that his friend Hunsden has identified as signally lacking in his make-up. His first lesson given to Belgian boys in

the school of M. Pelet is a model of careful management of effects. Since his French is inadequate for the task of controlling the classroom, he judiciously limits his utterances to the brief commands he can manage with authority: as he states, "My accent and idiom would be too open to the criticisms of the young gentlemen before me, relative to whom I felt it would be necessary at once to take up an advantageous position . . ." (94). He directs his pupils to read aloud one after the other and allows them to feel false confidence when he allows twelve students to read without offering any correction or criticism. He then pauses meaningfully, during which he encounters each eye with a "steady and somewhat stern gaze." He continues to stare at them in silence until they exhibit signs of embarrassment, then slowly joined "his hands, and pronounced in a deep *voix de poitrine* 'Comme c'est affreux!'" (95). William employs here a judicious use of silence, gaze, gesture, intonation and pitch to achieve an impressive effect. Note that he alters his voice in an effort to convey authority: here, the so-called "voice of authority" is a willed physical effect. He records the effect thus: "They were not pleased, I saw, but they were impressed, and in the way I wished them to be." The strategy employed here is to reduce the boys to feeling embarrassment: he has succeeded when he notes that some of the faces "were beginning to look sullen, and others ashamed" (95). This methodology consists primarily in making the students aware of their inadequacies and to feel shame: as such, it dovetails with the behavior noted by Silvan Tompkins in his description of the phenomenology of this affect:

Shame effaces itself, shame points and projects; shame turns itself inside outside; shame and pride; shame and dignity; shame and self-display; shame and exhibitionism are different interlinings of the same glove: shame, it might be said, transformational shame, *is performance*.<sup>7</sup>

Thus Crimsworth's means of overcoming his own shame is to inflict a fellow-feeling on others. through the rhetorical equivalent of the locution "Shame on you!" he converts his own embarrassment into a projected shame that is conferred upon others. In her discussion of the intimate relations of shame and performativity, Eva Kosofsky Sedgwick takes note of the missing first person here— "There is a 'you' but there is no 'I.' . . . The absence of an explicit verb from 'Shame on you' records the place in which an I, in conferring shame, has effaced itself and its own agency. Of course the desire for self-effacement is the defining trait of— what else?— shame" (210).

The first strategy of lowering their self-confidence having succeeded, he then

proceeds to the more difficult task of imposing a masterful version of himself upon them. He directs them to listen "and I endeavored to throw into my accents the compassionate tone of a superior being, who touched by the extremity of the helplessness, which at first only excited his scorn, deigns at length to bestow aid." William, though having himself very recently completed school at Eton, and burdened with the physical disadvantage of a slight build and the demerit of youth, overcomes these disadvantages through a performance which he himself is quite conscious of putting on. He completes the class by reading aloud for twenty pages, making an allowance for their poor language skills by reading in a slow, distinct voice. Presumably, the students will improve their English skills through exposure to his mastery of the language. This methodology is based on his own learning through imitation in being a teacher. He thus asks his students to imitate his own imitation. The director is pleased by his performance and compliments him upon his manner: as the director comments "dans l'instruction, l'adresse fait autant que le savoir." William is fortunate in this, for though lacking in any knowledge of teaching but what he has seen as a student, he has the valuable ability to present himself as worthy of his position, even projecting more self-confidence than he in fact possesses.

William speculates about the nature of the girls at play in the "unseen paradise" of the lycee next door (97); he is fascinated by the unseen female students whom at first he imagines as angels, paragons of purity and delight. That the construction of femininity in the Victorian era is far more complex than William's initial representation of it in his imaginings will be seen in his encounter with the young women in the setting of the classroom.

### Master and Mistress

The various discourses of sexual politics, class and power intersect in William's encounters with his employer, Mlle Reuters, the directress [sic] of the school. Since she is not in fact the "stiff old maid" he had imagined her to be, he feels obliged to counter her claim to authority by virtue of her position as director of the school (termed 'directress' in the novel) with his own claim to greater superiority as a man within the Victorian ideology of separate spheres. Though once again surprised that one so physically inferior could be successful as a teacher, he admires her authority in the classroom; however, her authority over him must be denied and subtly repelled because



he cannot be a man unless she plays a submissive role. Terry Eagleton makes the following comments on the construction of the male identity:

Woman is the opposite, the 'other' of man: she is non-man, defective man, assigned a chiefly negative value in relation to the male first principle. But equally man is what he is only by virtue of ceaselessly shutting out this other or opposite, defining himself in antithesis to it, and his whole identity is therefore caught up and put at risk in the very gesture by which he seeks to assert his unique, autonomous existence. Woman is not just an other in the sense of something beyond his ken, but an other intimately related to him as the image of what he is not, and therefore an essential reminder of what he is. (pp.132-33)

In constructing a solid masculine identity, William's work in the novel will consist of repelling and repressing those feminine aspects of himself and defining himself by contrast to the feminine subjects around him. The gesture of repudiation of the feminine, and most particularly with regard to female sexuality, will be seen in his response to the young women of the classroom.<sup>8</sup> That encounters with women put his identity at risk will be seen in the strategies and maneuvers he employs in his defense.

Crimsworth's first meeting with Mlle Reuters, like the others that follow, is a staged battle. She begins the business of their meeting by commenting that parents might object to a professor as young as himself for their daughters, but asserts her right to make the judgment without recourse to any other opinions. When he returns that he is incapable of betraying a position of trust, she remarks that in any case he will be closely watched: she exerts her authority by alluding to the close surveillance he will be under, thus rendering his assertion of trustworthiness quite irrelevant. When it comes to arriving at terms, he refuses to name a sum, so she makes suggestions using "fluent yet quiet circumlocution of speech" and "at last nailed [me] down to 500 hundred francs per year" (109). He acceded to this proposal despite his realization that he is not being offered much. William brings the meeting to a close by getting to his feet, taking a position of dominance physically. Finally, he ends the meeting with a handshake, deliberately flouting Belgian conventions in an effort to assert himself: "I held out my hand on purpose, though I knew it was contrary to the etiquette of foreign habits" (109). He adds the flirtatious claim, "It is the privilege of my country, mademoiselle ...and remember, I shall always claim it." The non-verbal expressions of William's attempts to assert himself are inscribed in the narrative discourse of the text

in the form of four types of power signal: touching, invading space, standing over, and pointing. In a recent study Henley notes that these types of non-verbal power signals are often in use in male-female conversation, with more of these gestures leading to greater dominance effects. (see Henley, 45)

Mlle Reuters gets back the upper hand the next day when she escorts him to the class for his first lesson. She gives him advice on how to conduct the class, telling him to use reading or dictation in his class to begin with “for those are the easiest forms of communicating instruction in a foreign language; and at first monsieur naturally feels a little unsettled” (112). What might be construed as merely practical advice goes further to imply that William lacks experience and is feeling nervous. The distinct difference from the way in which he asserts his authority at the boys' school attests to the importance of the function of gender in the Victorian classroom. When he dares to raise his eyes he encounters some twenty young women from ages fourteen to sixteen: as he reports, “I did not bear the first view like a stoic; I was dazzled, my eyes fell, and in a voice somewhat low I murmured — ‘Prenez vos cahiers de dictées, mesdemoiselles’” (113). His manner of speaking, a murmur as opposed to his habitual raised voice at the boys' school, combined with his inability to meet the collective gaze of the class, results in tittering and whispers that comment on his manner and evident inexperience. His refusal to look up, his low voice, his hesitant manner—all these communicate an attitude. As Sedgwick points out, “like a stigma, shame is itself a form of communication” (211).

*“Honi soit qui mal y pense”*

The interested gaze of the students toward their new teacher is construed by William as being vastly improper, suggestive of boldness and impudent freedom. He selects three girls as the most influential and powerful and then proceeds to deal with them: “In less than three minutes they had thus revealed to me their characters, and in less than five minutes I had buckled on a breastplate of steely indifference, and let down a visor of impassable austerity” (115). As noted by Shuttleworth, the notion of surveillance is central to Crimsworth's struggle for mastery and control: “Social control resides with the figure who possesses the power to read the inner state of the other, whilst maintaining the illegibility of the self” (125). William gains mastery over the girls in the class, but his original vision of them as angels has vanished leaving

feelings of sexual disgust. These feelings are projected upon the students when he delivers the judgement "c'est honteux" : that is, "it's shameful." It is significant that whereas his criticisms of his male students focus on their intellectual properties and communicative abilities, his assessment of his female students focus on the physical person. He catalogues details of face, body, clothing and comportment exhaustively. Likewise his assessments of the compositions written by his students are viewed in terms of their moral virtue rather than as reflections of their minds. The students arouse complex associations arising from their gender, nationality and Catholicism—all of which are perceived by William in terms not merely of difference, but inferiority. His struggle for selfhood is thus constructed by opposition to his Belgian students, and to his young woman students in particular.

The fall from grace of his students from angels to slatterns is replicated by William's attitude toward his employer. From the first combative and marked by William's evident desire to play out the masculine role to her submissive one, their relationship is fraught with difficulty. He records their interaction in the following terms: "I watched her as keenly as she watched me; I perceived soon that she was feeling after my real character; she was searching for salient points, and weak points, and eccentric points ...no amorous influence she wished to gain—at that time it was only the power of the politician to which she aspired, searching for some chink, some niche, where she could put in her little foot and stand upon my neck—mistress of my nature." (118) The will to power of the female director of the school is thus doomed to failure: for where William attempts to gain 'mastery,' in his female counterpart, power can lead only to becoming a so-called 'mistress.' It must be recognized that William's inability to conceive of feminine power as otherwise than sexual is partly brought about by the language itself. The English language is characterized by what has been termed 'gendered semantic assymetry' whereby words that are male attributes are powerful and positive and the corresponding lexis applied to women are either powerless or explicitly sexual.<sup>9</sup> The language William uses reflects the social reality of power denied to women. In a like way, his interpretation of her gestures and body language construes them not as dominant behaviors, as they would were she a man, but as sexual overtures. Henley notes in a recent study the widespread tendency for dominant body language to become sexualized when a woman uses it.<sup>10</sup> This is a classic double-bind situation: where Mlle Reuters displays stereotypically feminine behavior she will not receive the respect due her as the school director; however, if she displays dominant behavior, she will be stigmatized for behavior considered inappropriate for a woman. When it appears

that she is attracted to him, she in effect unmans him by taking the initiative. He cannot exercise mastery over a dominant partner: he cannot be a man unless she plays the part of submissive woman.

### A Classroom Seduction

William meets his future wife in his classroom. Mlle Henri forms a natural counterpart to the ambitious and dominant self on display in the classroom as she is shy and retiring. Since she is half-English, she is exempt from the disgusting sexuality that he perceives in the other students. Unlike William, she is utterly ineffectual in the classroom and is unable to impose herself upon the students. For, as William defines his profession, teaching consists in entering "into conflict with this foreign will, to endeavour to bend it into subjection to one's own" (159). Accordingly, the fact that Mlle Henri is poor at teaching entails her suitability in the private sphere. When she joins his class as a student to improve her English, William uses a number of tactics designed to humiliate her: as a fellow teacher in the school she evidently poses a potential threat to his authority. Thus, he dismisses her from his first class because she is late; in a subsequent lesson he continues dictating faster and faster until he perceived that "her face clouded with embarrassment, but she was still writing on most diligently; I paused a few seconds; ...shame and discomfiture were apparent in her countenance" (152). By creating a combative relationship as master teacher to her demure miss, stopping only when he sees that she is "mortified," he sets the stage for what typically constitutes romance for Brontë.

Language becomes a site for struggle in their skirmishes for intimacy—William insists on correcting her in their private conversations and requires that she use English at all times, despite the fact that he understands French. Mlle Henri resembles him in many ways—she is physically small and unimposing, like himself she is poor, orphaned and a stranger in a strange land—however, William needs to regard her as the mysterious Other in the construction of his masculine self. The self-control and discipline that he has exercised in becoming successful is regarded quite otherwise when applied to "the weaker sex." He reflects on the fate of the unmarried woman in this way before proposing to her:

Look at the rigid and formal race of old maids—the race whom all despise; they

have fed themselves, from youth upwards, on maxims of resignation and endurance. Many of them get ossified with their dry diet; self-control is so continually their thought, so perpetually their object, that at last it absorbs the softer and more agreeable qualities of their nature; and they die mere models of austerity, fashioned out of a little parchment and much bone. (242)

William's adherence to the precepts of Self-Help are viewed as appropriate only for the self-made man; when women apply them they become dry, rigid—they absorb and internalize the masculine attributes gained from self-control.

Even after their marriage, the pedagogic relationship is favored over the domestic one. Or perhaps it would be more accurate to say that their relationship as husband and wife is carried out within the original paradigm of student and teacher. As he relates, though his wife manages the school and is the actual director, she makes opportunities to have him speak to the students as head. She listens as attentively as any of the students. He reports, "It was her pleasure, her joy to make me master in all things" (273). This relationship represents a kind of pantomime that constructs mutual relations of mastery and compliance.

Though the autobiographical origins of this novel are clear, the emphasis on the male character rather than on the impoverished female student provides a means for Brontë to examine the past from another viewpoint; that is, from the podium rather than from behind the desk in the classroom. This exploration of the masculine stance from within goes behind the authoritative mask to reveal what is involved in the making of a professor. What begins as a clever impersonation involving a manner and postures that convey mastery becomes an integral part of Crimsworth's personality, as he continues the charade at home with his wife. The title 'The Professor' refers to much more than a job and a means of support; for William, it becomes his means of acting out the role proper to Victorian masculinity: as such he extends its function into his private life, and is consequently never "off the job."

The shame experienced by Charlotte Brontë when as a student in Belgium she was reprimanded by the headmaster's wife because of her too evident attachment to her teacher is worked out and rehabilitated in this novel, as the author works through a male persona to investigate professorial stances and attitudes towards the female student. The novel also provided a means to work out the humiliation suffered at the hands of the eminent poet Robert Southey in his advice to her at the outset of her literary career. It bears repeating here: "Literature cannot be the business of a woman's life, and it ought

not to be. The more she is engaged in her proper duties, the less leisure she will have for it, even as an accomplishment and a recreation."<sup>11</sup> Humiliation at the hands of her favorite professor's wife, humiliation felt most profoundly when letter after letter to her professor receives no reply, shame evinced when engaged in the activity that should not, ought not, displace one's attention to "the business of a woman's life" —these are multiple sources of the affect that is clearly perceptible through the performance of writing. The shame-humiliation reaction characterized by one psychologist as "the inability to effectively arouse the other person's positive reaction to one's communications" is at issue here.<sup>12</sup> Thus, the shame-humiliation response "represents the failure or absence of the smile of contact, a reaction to the loss of feedback from others, indicating social isolation and signaling the need for relief from that condition." (Basch, 212) This novel, published only posthumously despite repeated attempts to have it put into print, maps out the process of a spoiled identity that suffers shame and humiliation, and as such, it also bears the imprint of that affect in its reception. The averted gaze that the novel continues to provoke today may well be a response not only to the refusal to romanticize reality but also to the suffering affect that brings the story of a self-made man to light. In this *The Professor* most closely resembles nothing so much as the unanswered letter of the first chapter that initiates it.

## Notes

1. Charlotte Brontë, *The Professor*, (Penguin Classics, Harmondsworth, 1989) p. 37. All references will be to this edition and will be included in parenthesis in the text.
2. Ellen Moers concurs, characterizing the narrator as dry bitter and taciturn ... punctual, diligent, tidy in his work, austere and thrifty in habit. (79) Eva Figes conjectures that "she is so ill at ease with him that one is forced to conclude that she chose Crimsworth as a narrator to put as great a distance between herself as author and the female heroine, with all the painful dangers that would entail." (122) Gilbert and Gubar ascribe the deleterious effect of the narrator to the "lack of apparent directness and confessional intensity of Charlotte Brontë as Jane Eyre or Lucy Snowe" (316). However, they go on to link the novel to Brontë's juvenilia, which also makes use of male narrators, in order to explore her literary male-impersonation in the tales and what they term her distinctively "female" method of composition (316). The strategy of using a male narrator is viewed in *The Madwoman in the Attic* as a means of seizing male authority, "not only to punish her own forbidden fantasies but also to act them out" (317).
3. "I strove to restrain my tears, to utter no complaint. But when one does not complain, when one seeks to dominate oneself with a tyrant's grip, the faculties start into rebellion and one pays for external calm with an internal struggle that is almost unbearable." Jan. 8, 1845 Winifred Gérin. *Charlotte Brontë* (Oxford and New York: Oxford UP, 1967) p. 278. "That, indeed, is humiliating—to be unable to control one's own thoughts, to be the slave of a regret, of a memory, the slave of a fixed and dominant idea which lords it over

the mind." Nov. 18, 1845, Gérin, p.291.

4. Mrs. Humphrey Ward provides insight into this aspect of Brontë's novels from the point of view of a late Victorian woman writer. She criticized the depiction of power relations between men and women in Brontë's novels as "often parochial, womanish and morbid in her imagination of men and their relation to women ...To Jane Eyre, Rochester is 'my master' from first to last; Louis Moore is the tutor and tyrant even in love-making; Paul Emmanuel ... [is] in relation to the woman he loves, the captor, the teacher, the governor" (Sutton-Ramspeck, "The Personal is Political: Feminist Criticism and Mary Ward's Readings of the Brontës" (Victorian Studies. Autumn 1990, vol 34, no. 1:55-75) p. 70.
5. Here his experience of being "weary and solitary" echoes the way in which Charlotte Brontë describes her memories of dances and drawing rooms: "The only glimpses of society I have ever had were obtained in my vocation of governess, and some of the most miserable moments I can recall were passed in drawing-rooms full of strange faces. At such times, my animal spirits would ebb gradually till they sank quite away, and when I could endure the sense of exhaustion and solitude no longer, I used to steal off, too glad to find any corner where I could really be alone" (Shorter, cited by Litvak, *Caught in the Act: Theatricality in the Nineteenth-Century English Novel* (Berkeley, London: U of California Press, 1992) p. 47.
6. Samuel Smiles, *Self Help*, cited by *Asa Briggs in Victorian People: A Reassessment of Persons and Themes 1851-67* (1954, rpt. Harmondsworth, Penguin Books, 1990) p. 129.
7. Silvan S. Tompkins, "Affect Imagery Consciousness," vol. 2: *The Negative Affects* (New York, Springer, 1963 p. 123) cited by Eve Kosofsky Sedgwick in "Shame and Performativity: Henry James' New York Edition Prefaces" in David McWhirter, (ed.) *Henry James New York Edition: The Construction of Authorship* (Stanford University Press, Stanford, Calif., 1995) p. 211.
8. For an engaging discussion of the meaning of the word 'repudiation' and its relationship to the cognate 'shame' see Rachel Bowlby in *Between Feminism and Psychoanalysis* Teresa Brennan (ed.) (London and New York: Routledge, 1989) pp. 53-55. Bowlby notes that its primary meaning was 'to divorce', used in English of a man in relation to a woman but not the other way round. In Latin, the root of the verb to repudiate is *pudor*, that is, shame, whence the euphemistic '*pudenda*', those parts for which shame should be felt. In practice, however, this term refers only to female genitals. This excursion around the original meanings of a term and its subsequent accretions is suggestive in the light of Crimsworth's very strong reaction and imputations of shame to his female students.
9. M. Schultz, "The semantic derogation of women" in Deborah Cameron (ed.) *The Feminist Critique of Language: A Reader* (London: Routledge, 1990) pp.134-47. The following pairs illustrate this tendency of derogation in terms pertaining to women: governor/governess; master/mistress; manager/managerness.
10. In one study following Henleys initial research they found a "pervasive tendency to stigmatize the female clients displaying masculine sex-typed behaviors, in comparison to male clients displaying these same behaviors." (see Nancy Henley, "Body Politics Revised: What do We Know Today?" in *Gender, Power and Communication in Human Relationships*, Pamela J. Kalbfleisch and Michael J. Cody [eds.] [New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, 1995] pp. 27-62)
11. Winifred Ge'rin, Charlotte Brontë" (Oxford and New York: Oxford UP,1967) p. 110.
12. Michael Franz Basch, "The Concept of Affect: A Re-examination," *Journal of the American Psychoanalytic Association* 24 (1976) p. 765-6, cited by Eve Kosofsky Sedgwick, p. 212.

## Sources

- Bowlby, Rachel. "Still Crazy After All These Years" in *Between Feminism and Psychoanalysis*. Teresa Brennan (ed.) London and New York: Routledge, 1989.
- Briggs, Asa. *Victorian People: A Reassessment of Persons and Themes 1851-67*. (1954) rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1990.
- Eagleton, Terry. *Literary Theory*. Oxford: Basil Blackwell, 1983.
- Figs, Eva. *Sex and Subterfuge: Women Writers to 1850*. New York: Persea Books, 1982, 1988.
- Gérin, Winifred. *Charlotte Brontë*. Oxford and New York: Oxford UP, 1967.
- Gilbert, Susan and Sandra Gubar. "A Secret, Inward Wound: *The Professor*" in *The Mad-woman in the Attic*. New Haven and London: Yale University Press, 1979.
- Glen, Heather. intro. to Penguin Classics (ed.) *The Professor*. Harmondsworth, England: Penguin Classics, 1989.
- Henley, Nancy. "Body Politics Revised: What do We Know Today?" in *Gender, Power and Communication in Human Relationships*. Pamela J. Kalbfleisch and Michael J. Cody (eds.) New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, 1995.
- Johnson, Barbara. "Teaching Ignorance" in *A World of Difference*. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1987.
- Litvak, Joseph. *Caught in the Act: Theatricality in the Nineteenth-Century English Novel*. Berkeley, London: U of California Press, 1992.
- Lonoff, Sue. "Charlotte Brontë's Belgian Essays: The Discourse of Empowerment" *Victorian Studies*. Spring 1989, vol. 32, no. 3 :387-409.
- Mills, Sara. (ed.) *Language and Gender: Interdisciplinary Perspectives*. London and New York: Longman Group Ltd., 1995.
- Moers, Ellen. *Literary Women*. New York: Oxford University Press, 1963.
- Moglen, Helene. *Charlotte Brontë: The Self Conceived*. Madison, Wisconsin: University of Wisconsin Press, 1976.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. "Shame and Performativity: Henry James New York Prefaces" in David McWhirter, *The Construction of Authorship*. Stanford U Press, 1995.
- Shuttleworth, Sally. *Charlotte Brontë and Victorian Psychology*. Cambridge UP, 1996.
- Sutton-Ramspeck, Beth. "The Personal is Political: Feminist Criticism and Mary Ward's Readings of the Brontës" *Victorian Studies*. Autumn 1990, vol 34, no. 1:55-75.



“Elaine, the Lily Maid” に託されたメッセージ  
—Malory と Tennyson の相違点をふまえて—

堂村由香里

SYNOPSIS

Drawing on Arthurian legend for his subject, Tennyson created his own version of “Elaine” who is characterised as “the lily maid.” As a character in one of the idylls “Lancelot and Elaine,” she naturally parallels Elaine in Sir Thomas Malory’s *Le Morte D’Arthur*, but what is conspicuous about Tennyson’s Elaine is that she is endowed with original aspects which undermine Victorian morality and express an anti-Victorian attitude. That is, Tennyson presented “the angel in the house” at the beginning and transformed her with a sensual motif and words: he emphasised Elaine’s sensuality with the motif of “red” and “white” which was borrowed from D. G. Rossetti, and with such intense words as “naked” and “stript.” It must have been Tennyson’s intention to portray the process of her transformation minutely. At the bottom of his mind, he seems to have been skeptical about the situation of Victorian women who had been taken under men’s wings and not allowed to act by themselves.

序

“Lancelot and Elaine” は、長編叙事詩 *Idylls of the King* (1859-85) に収められている、1,418行の物語詩である。Alfred Tennyson (1809-92) によるこの作品は、Sir Thomas Malory (?-1471) の *Le Morte D’Arthur* (1485) を下敷きにしている。そのため、物語のプロットは勿論のこと、全体の構成や細部の描写に至るまでマロリーの影響が見うけられる。中でも“Lancelot and Elaine” に登場する百合姫エレーンは、マロリーの作品に見られるエレーンと重なる女性像である。しかし、テニソンはかなりの独自性を持ってエレーンを描いている。彼はマロリーのエレーン像を踏襲しつつも、まず冒頭でヴィクトリア時代の理想の女性像を提示し、それを全く異なったイメージへと変貌させていくのである。テニソンは「赤」と「白」のモチーフや、周密に選択された語、克明なエレーンの心理描写を駆使して、このプロセスを強調している。そこで彼がいかに独

自のエレーン像を創造していったか、その際、マロリーのエレーン像との差異はどこに見いだせるか、という点をふまえながら、エレーンを変容させていくプロセスを辿りたい。そこには、彼の隠された意図が潜んでいるに違いない。

## 1. 理想の女性像としてのエレーン

テニソンが *Idylls of the King* を発表した背景には、ヴィクトリア朝における中世復興の風潮と、厳しい道徳理念があったことを見逃すことはできない。中世を野蛮で残酷な、暗黒の時代とみなしていた概念が、19世紀になると、憧れへと変貌していく。Thomas Carlyle (1795-1881) が中世復興を、Sir Walter Scott (1771-1832) が騎士道を礼賛するという風潮の中<sup>1</sup> アーサー王伝説が国民的文学として復活の糸口をつかんだのである。アーサー王伝説は1485年にマロリーのキャクストン版が出版されてから後は、殆ど顧みられることがなかったが、19世紀に入ると相次いで復刻出版されている。この復活を決定づけたのが、テニソンの *Idylls of the King* であり、当時の読者に幅広く受け入れられていた。

こういった時代背景のもと、テニソンは“Lancelot and Elaine”の冒頭において、エレーンにヴィクトリア朝女性としての側面を持たせている。

Elaine the fair, Elaine the lovable,  
 Elaine, the lily maid of Astolat,  
 High in her chamber up a tower to the east  
 Guarded the sacred shield of Lancelot;  
 .....  
 ... fashioned for it  
 A case of silk, and braided...? (lines 1-4, 7-8)

美しく愛らしいエレーンは“the lily maid”，つまり純潔なる処女として登場する。彼女の部屋は「塔」という堅牢な建物の中に設定されている。そこは窓も小さく、光が殆ど入ってこないような閉鎖的な空間であろう。しかもその部屋に容易に到達できないことは、この塔の高さが3行目の文頭で“High”と強調されていることから推察できる。つまり、テニソンは汚れのないエレーンを、「塔」という特殊な空間に住んでいると設定することによって、彼女を世間から完全に隔離し、ヴィクトリア時代の女性たちが置かれていた境遇と重ねあわせているのではないだろうか。

また、エレーンがランスロットの盾に絹のケースを作り、刺繍をほどこしている点も、当時の理想の女性像に対応している。テニソンが *The Princess* (1847) で歌っているように、当時の女性は男性の命令に従い、針を手にして炉辺に座る姿が理想とされていた。<sup>3</sup> しかもエレーンは、ランスロットの盾のモチーフを写すだけではなく、生まれたばかりの雛鳥が親鳥を求めてさえずっている図案を、自分の意志で付け加えている。つまり、彼女が家庭や家族を連想させるような意匠を刺繍することによって、「出産と子育ては女の知恵」<sup>4</sup> というアフォリズムの実行者としての資質を暗示していることになる。

この詩の冒頭において、テニソンの描くエレーンは、ヴィクトリア時代を生きる女性を彷彿させる姿となって登場している。これは当時の読者、特に女性にとっては、エレーンが自分の姿と重なったであろうことは想像に難くない。「塔」の奥深くに住む乙女を完全に世間から隔絶していること、しかも手芸に興じている女性像を提示することによって、テニソンが当時の女性を想定しながらエレーン像を構築していったという仮説を立てることができる。

## 2. エレーンの官能性

このように、テニソンは“Lancelot and Elaine”の冒頭において、Coventry Patmore が理想としているところの「家庭の天使像」を我々に提示している。英国王室が「義務」「道徳」「勤勉」「家庭性」を掲げていたヴィクトリア朝の桂冠詩人としては、穏当な路線であろう。しかも Hippolyte A. Taine が指摘しているように、テニソンは William Wordsworth の後任者としての役目を無難に果たしている。

Without being a pedant, he [Tennyson] is moral; he may be read in the family circle by night; he does not revel against society and life; he speaks of God and the soul, nobly, tenderly . . . he has no violent and abrupt words, excessive and scandalous sentiments; he will pervert nobody.<sup>5</sup>

テニソンは万人に受け入れられる、道徳に則った、家庭の団欒にふさわしい読み物を提供していた。そしてエレーンは、テニソンのヒロインにふさわしく、ヴィクトリア朝における理想の女性として登場している。しかし、彼女はその枠の中に納まってはいない。それどころか、驚くばかりの大胆さと官能性を持つ女性へと変身してゆくのである。

では、テニソンはいかにエレーンを変貌させていったのであろうか。冒頭で理想の女性像として掲げられていたエレーンであるが、次のように、沸き起こってきた願望を実行に移す激しい女性へと変わっていく。

Suddenly flashed on her a wild desire,  
That he should wear her favour at the tilt.  
She braved a riotous heart in asking for it.  
‘Fair lord, whose name I know not . . .  
. . . will you wear  
My favour at this tourney?’ (355-60)

ここでは“suddenly”や“flashed”という激しい語や，“wild”あるいは“riotous”という形容詞が用いられて、エレーンの心に目覚めた情熱が強調されている。こうした描写は、冒頭で描かれていた、物静かに手芸にうちこむ姿[“Nor rested thus content” (13)]とは対照的である。

続く場面は、「白」百合姫エレーンが「赤」い袖を渡すという、物語における山場のひとつである。この緊迫した場面で用いられている「赤」と「白」のコンビネーションから、多様な意味を読み取ることができる。まず視覚的効果を狙った色彩のコントラストが挙げられるし、キリストの血やマリアの百合といった宗教的な意味合いも当然含まれているであろう。しかし、単なる色彩美や宗教的示唆といった要素だけではなく、この「赤」と「白」の組み合わせからは、同時代の芸術家 Dante Gabriel Rossetti (1828-82) の用いたモチーフが連想されるのである。ロセッティといえは Robert Williams Buchanan (1841-1901) から “the fleshly school”<sup>6</sup> と呼ばれて、作品の官能性を非難されていた画家かつ詩人である。彼は厳しい道徳理念に支配されていたヴィクトリア時代においては異色の存在であり、評判通りの官能的なモチーフを多用していた。ここでテニソンが使っているモチーフも、まさにそのひとつである。そのモチーフとは、ロセッティの画家としてのデビュー作 *The Girlhood of Mary Virgin* (1849) において見られる、「白」百合の刺繍がおかれた「赤」い布である。この絵では、幼いマリアが母アンナに見守られながら刺繍している様が描かれているが、燃えるような深紅の布と、純潔の象徴である白百合という両者の組合せが、全体の絵の中で非常に際立っている。とりわけ赤の色彩が強調された布は、無彩色のアンナやマリアの洋服地を背景にして、くっきりと浮かび上がっている。元来、この絵はロセッティ自身がソネットを寄せているように、マリアの徳目を讃え、彼女が受けるであろう喜びと悲しみを描いたものである。しかし、こ

のようにマリアの純潔をとりあげている作品において、赤、しかも深紅という愛や情念あるいは姦通さえ連想させる色を強調して用いているという手法は、全く伝統から逸脱したものである。キャンバス上の「赤」い布と「白」百合は異彩を放って、この絵を見る者に強烈な印象を植えつけている。

その同じ布が、連作とみなされている *The Annunciation* (1850) において、受胎告知を受けているマリアの傍らにかけられているのである。この絵では、既に完成した「白」百合の刺繍が「赤」い地色の上にくっきり浮かび上がっている。また、全体に白を基調としたシンプルな画面に赤が大胆に用いられており、見る者には「赤」と「白」のコントラストが、否応なく焼き付けられる。ここでも、赤い布というモチーフが、処女マリアへの受胎告知という題材にそぐわないのは、前作と同様であるが、そのモチーフがより強調された形で用いられている。しかも、この2点の絵は、発表当時かなり話題になった作品であり、テニソンの目に触れていた可能性が高いと考えられる。なぜなら、第1作目は“P. R. B.”という謎めいたサインと、その斬新な色使いのために注目された作品であるし、第2作目も“P. R. B.”の謎の暴露に伴い、非難の渦に巻き込まれ、当時の論壇を賑わしていた作品だからである。また、ロセッティがしばしばテニソンの詩に挿絵を描いていたことから、二人の芸術家の交流が立証される。

つまり、テニソンは“Lancelot and Elaine”を書くにあたって、ロセッティの「赤」と「白」を用いた斬新なモチーフに触発されたと考えられることができる。この詩は1859年に発表されていることから、1849年から翌年にかけて発表されたロセッティの絵を既に見ているという推論は、時間的には矛盾は生じない。また、テニソンらしからぬ官能の香の源も、ロセッティが繰り返し用いていたこのモチーフにあると考えることによって、十分に説明できるのではないだろうか。このモチーフを採用することによって、エレーン像に新たに官能的な色合いが添えられていることは、紛れもない事実である。テニソンは「白」百合姫エレーンに、「赤」い袖を持たせることによって、彼女の行動の大胆さ、官能性を際立たせることに成功している。

次に、この詩における言葉の選択が、かなり官能的である点に目を向けてみたい。エレーンは“[She] Stript off the case, and read the naked shield, / Now guessed a hidden meaning in his arms” (16-17) とあるように、盾のケースをはぎ取り、裸になった盾を見つめて、そこに秘められた意味を読み取ろうとしている。テニソンが、“stript”という強い意味を持つ動詞と“naked”というあからさまな形容詞を取って用いている点に注目したい。ピアノのむき出しの脚を見ても淑女は顔を赤らめ、ソックスをはかせたような時代に、こうした官能的な

響きを持ち、視覚に訴えかけるような言葉を選んでいるのである。単に“take”ではなく“strip”（「裸にする」「もぎとる」「奪い取る」）といった、強烈的な印象を与える動詞が用いられていることから、エレーンが激しい動作でケースをはいでいることがうかがえる。ここでは、彼女の思いの深さや激しさが“strip”という単語にはっきりと表現されている上に、“naked”と組み合わせられることによって、相乗効果をなしている。その上、あらわになった盾は大切な人の忘れ形身であり、はぎ取ったケースはランスロットへの思いをこめて丹念に刺繍したものであるとなると、これらの語に込められた意味は、際限なく広がっていく。

しかもテニソンは、詩の後半部で“[She] Strip off the case, and gave the naked shield” (972) とほぼ同じフレーズを繰り返している。彼が“strip”や“naked”といった語を再び用いることによって、これらの言葉から引き出されるイメージを読者に再提示しようとしているのは明らかである。それと同時に、このリフレインによって新たなイメージが重なりあって、物語の展開を示唆している点も見落とすことはできない。ここでフレーズが繰り返されることによって、ランスロットに拒絶されたエレーンがケースを脱がせるのと同時に、自分自身の殻をも脱ぎ捨てるという、二重のイメージが広がるのである。実際、ランスロットが去った後、一人残されたエレーンは、冒頭で描かれていた「家庭の天使」像から脱皮していく。その分水嶺ともいえるのがこのフレーズなのである。

このように、テニソンはエレーンに対して激しさや放縦を表す語を用いたり、今までにない手法を取り入れることによって、彼女の大胆さや情熱、あるいは官能性を強調している。ロセッティという、いわばテニソンの対極にいる作家のモチーフを用いているということは、即ちテニソン自身、それに対する共感があったと考えるのが妥当であろう。少なくとも興味を抱いていたことは間違いない。ここに、テヌの指摘とはいささか違ったテニソンの一面を見いだすことができる。また、エレーンというヴィクトリア時代における理想の女性像を取って提示しておきながら、このようにイメージを変化させていくプロセスに、テニソンの意図が感じられる。

### 3. エレーンの脱出願望

テニソンのエレーンのイメージは、物語の展開に伴って、ヴィクトリア朝女性の理想像からすっかりかけ離れてしまったが、さらに彼女は外の世界を追い求めていく。まず、第一段階ともいべき場面では、エレーンがランスロット

会いたさに自分の部屋から抜け出していく。ここでは、不安と期待の交錯した彼女の心の動きが描写されている。

First as in fear, step after step, she stole  
Down the long tower-stairs, hesitating:  
Anon, she heard Sir Lancelot cry in the court . . . .

(340-42)

エレーンはおそるおそる階段を降りていく。閉鎖的であるがゆえに安全な「塔」という空間からの脱出は、彼女にとって初めての試みであり、これまでにない勇気を要する冒険である。しかもその道のりは、高い塔の階段という物理的な長さに、エレーンの歩みのもどかしさが加わって、より長く感じられる。その上、彼女は途中で立ち止まるのである。行こうか行くまいかという躊躇が、脱出のプロセスをより困難にしている。しかし、その不安の中に未知なるものへの期待が潜んでいることは明らかである。なぜなら、一歩ずつではあるが、そして忍び足ではあるが、彼女は確実に歩みを進めているのである。このように、テニソンは外の世界への第一歩を非常に克明に描写して、エレーンの心の変化を隅々までとらえている。

また、ランスロットとラヴェインが発ったあとのエレーンの描写にも、外の世界への脱出の予感が漂っている。

And thus they moved away: she stayed a minute,  
Then made a sudden step to the gate, and there—  
Her bright hair blown about the serious face  
.....  
Paused by the gateway, standing near the shield  
In silence . . . . (388-90, 391-92)

二人が出ていった門に歩み寄り、風に髪をなびかせながらたたずんでいるエレーン。彼女はランスロットが残していった盾のかたわらに立って、黙ったまま思いを巡らしている。そこには、嵐の前の静けさのような気配が漂っている。そして、ついにエレーンは彼らの帰りを待ちきれずに、夢に見た騎士のもとへ行かせてくれるように父に願い出るのである。この必死の願いの中に、「塔」という囲われた場所では最早待つことができず、外の世界へ飛び出していきたいという、彼女の内に目覚めた情熱が見いだせる。テニソンは、エレーンを自

分の殻を破っていく自立したひとりの人間へと変貌させている。つまり先程指摘したエレーンの脱皮が、この脱出宣言で完結するのである。

一方で、テニソンは同様のタイプの女性を“The Lady of Shalott”において登場させている。

Four gray walls, and four gray towers,  
Overlook a space of flowers,  
And the silent isle imbowers  
The Lady of Shalott. (I, 15-18)

ここでもヒロインであるシャーロット姫は、静寂の島にそびえ立つ「高き塔」の中に住み、来る日も来る日も機織りをしている。この状況設定は、ヴィクトリア時代の抑圧されていた女性像を描いているという点で“Lancelot and Elaine”の冒頭部と酷似している。<sup>8</sup>つまり、エレーンとシャーロットは同一視できるキャラクターであり、ヴィクトリア時代を生きる女性の典型とみなすことができる。しかも、両者とも共通して、外の世界へ飛び出したいという欲望を持つ女性として描かれている。ということは、この図式から、当時の女性が脱出願望を持っていたという結果が導きだされることになる。少なくとも、慎ましやかで、木に寄り添う鶯のごとく男性につき従う女性が理想とされていた時代に、汚れを知らぬ乙女の内に潜んでいる欲望—自由への憧れ、抑圧からの開放—を取り上げていることは明らかである。

さらに、外の世界へ飛び出したエレーンは、非常に情熱的に描写されている。彼女は精力的にランスロットを探し、とうとう洞窟で、痩せ衰えて骸骨のようになっている彼を見つけだす。そして献身的な看病を続けて彼の命を救うのだが、ランスロットにとって、エレーンは命の恩人にすぎないという現実が彼女を待ち受けている。エレーンは“... suddenly and passionately she spoke: / 'I have gone mad. I love you: let me die.'” (924-25) と打ち明けるが、彼女の思いはランスロットには届かない。それでも次のように詰め寄るのである。

'I care not to be wife,  
But to be with you still, to see your face,  
To serve you, and to follow you through the world.'  
(932-34)

だが、この熱烈な願いも虚しく却けられてしまい、エレーンは死を選ぶ。この



驚くばかりの激しいエレーンの告白、かくも大胆な感情の吐露が、詩の冒頭で“Elaine, the lily maid”として登場した可憐な乙女に似つかわしくないのは言うまでもない。しかし、ここで両者を対比させることによって、純真無垢なる百合姫が激しい情熱に身を焦がしてゆく様が、コントラストをなすという効果が生じている。このように入念な手法を用いていることから、テニソンがいかにも、エレーンが変わっていくそのプロセスに重きをおいていたかがわかる。

テニソンはエレーンに官能性と情熱を与えて、彼女を理想像からかけ離れた女性に仕立てあげていく。そして、段階を追って脱出願望を折り混ぜて、徐々に緊張感を盛り上げていく。それがピークに達したところで願望は実行へと移され、情熱は堰を切ったように、とどまるところを知らずにほとばしるのである。エレーンに脱出願望という要素を付け加えることによって、白百合姫は情熱の塊のような、強い女性と変貌していく。そして最早「家庭の天使像」は跡形もなく消え去ってしまっている。

#### 4. マロリーのエレーンとの相違点

これまで見てきたように、テニソンは変化するエレーンのイメージを詳細に追っていくことによって、エレーン変貌のプロセスを巧みに描いている。では、彼が種本としたマロリーの *Le Morte D'Arthur* において、エレーンはどのように描写されているのであろうか。そして、テニソンとの違いはどこに見いだせるのであろうか。

ところで、テニソンとマロリーといえは、先に取り上げたビュカナンを始めとするテニソン派の批評家と、世紀末の詩人によってかわされた一連の批評論議を看過することはできない。この論争は、ビュカナンや James Thomas Knowles (1831-1908) というテニソン擁護派が、ロセッティや Algernon Charles Swinburne (1837-1909) を亜流だとして、激しく攻撃したことに端を発している。それを受けて立ったスウィンバーンが、テニソンのアーサー王はマロリーの「ギリシャ的尊厳」を台なしにしていると酷評して一大論争へと発展したというものである。この両陣営の対立の陰で、マロリーが媒体となっているという事実は興味深いものである。なぜなら、マロリーとテニソンが当時いかに流布していたか、そして両者が対立項としてみなされていたことを推測できるからである。このように、論議の的となったマロリーとテニソンであるが、両者の相違点を検証することによって、テニソンがエレーンを変身させた意図を明らかにしたい。

まず第一に、最も大きな違いは物語の構成であり、*Le Morte D'Arthur* においては、ランスロットとエレーンの物語は独立して扱われていない。この部分は、キャクストン版では Book 18 の 9-20章に収録されており、ランスロットが王妃ギニヴィアに話しかける場面で始まっている。<sup>10</sup> そして、二人の一連の会話で幕が上がり、エレーンの「赤い袖」の話聞いたギニヴィアが激怒するが、最後にその誤解が解けるという展開である。こうした流れの中で、エレーンの恋は挿話としてはさみこまれ、サブプロットとして添えられているだけである。実際、マロリーにおいてエレーンはなかなか登場しない。ランスロットがアストラット城を訪れる場面も、彼が盾を所望するところから始まり、登場するのはエレーンの父と兄だけである。物語の構成という点で、ギニヴィアとランスロットの会話で始まりエレーン不在のまま物語が進行していくマロリーと、エレーン賛美で幕を開けるテニソンとは対照をなしている。

そして、やっとのことでエレーンが登場しても、次のような散文的な描写で叙述されているだけである。

This old baron had a daughter that was called that time the fair maiden of Astolat. And ever she beheld Sir Lancelot wonderfully; and as the book saith, she cast such a love unto Sir Lancelot that she could never withdraw her love, wherefore she died . . . . (9, 53-57)<sup>11</sup>

特別にエレーンの存在を読者に訴えかけているとは思えない表現である。しかも、登場したとたんにエレーンの死が明示されている。つまり、マロリーの *Le Morte D'Arthur* において、エレーンは登場人物のひとりとして扱われ、伝説中のひとつのエピソードとして紹介されているにすぎないといえよう。それに対してテニソンの“Lancelot and Elaine”は、エレーンをヒロインとして前面に押し出し、彼女の言動のみならず心の動きまで克明に追っている。結局、両者の最大の相違点はエレーンに対する比重の差なのである。<sup>12</sup>

では次に、エレーンに関わる表現の差異について個別に検証していきたい。「赤い袖」、「エレーンの部屋」、「白百合姫」、「ランスロットの盾」の4つの例を順に取り上げる。最初の「赤い袖」の場面であるが、テニソンが斬新な手法を用いて強調しているこの箇所を、マロリーはごく簡潔に述べている。

. . . as she came to and fro she was so hot in her love that she besought Sir Lancelot to wear upon him at the jousts a token of hers . . . it is a red sleeve of mine of scarlet, well embroi-dered with great pearls” (9, 58-60, 69-71)

情熱的な場面にもかかわらず、単に状況を説明しているにすぎない。一方のテニソンは、これまで見てきたように、かなりの行数をさいてエレーンの心の揺れを表現している。そのため、上記のマロリーの引用に対応する部分だけでも42行に及び、テニソンが新たに創造した部分を加えると143行になり、その差は歴然としている。質的にもかなりの差異が認められ、マロリーは散文的に出来事を淡々と語っているのに対して、テニソンはこれまで見てきたように、エレーンの心象や表情描写に力を入れている。しかも、エレーンがランスロットに撫でられている馬にさえ嫉妬を感じているというような、実に些細な心の動きをもとらえているのである。<sup>13</sup>このように、表現上でも、マロリーとテニソンの最大の相違点はエレーンに対する比重の差にあることが明らかである。

では、「エレーンの部屋」の設定の違いに目をむけてみたい。マロリーは単に“chamber”としているのに対し、テニソンは彼女の居室を「高い塔」に置いている。これは読者の想像力に働きかけて、先述のように世俗に汚されていない乙女を連想させるためであろう。ただの部屋ではなく、「塔」という閉鎖的な空間に設定することによって、エレーンが箱入り娘であるということを読者にアピールしていることは間違いない。その上、「高い」というエピソードを添えることによって、視覚的な効果も取り入れている。高さを強調することによって、塔が威風堂々とそびえ立つ建物であり、堅牢な砦であることを示している。つまり、塔からの脱出の困難さを暗示しているといえよう。こうした設定がなされていることによって、テニソンのエレーンの脱出がより意味を持つものとなっている。

また、テニソンが「白百合姫」— “the lily maid” — というエピソードを繰り返し用いてエレーンの処女性を強調している点も、マロリーには見られない点である。彼は11回にも及んで、このエピソードを繰り返している。その上、エレーンの亡骸に、手紙だけでなく百合の花を添えることによって、このシーンの絵画的な美しさを引き立てている。この葬送の場面における百合もテニソンの創意であり、マロリーには見られない点である。このようなテニソンにおける絵画性については、対立しているスウィンバーンがそれを認めているほど顕著なものであり、白百合が醸し出す清新なイメージが広がっていく。

最後に、「ランスロットの盾」についてである。マロリーでは、“it is in my chamber, covered with a case” (14, 8-9) という記述があるのみであるが、テニソンのエレーンはこの盾に固執している。彼女は先に引用したように、せっせと盾のケースに刺繍をおいたり、その図案を自分で考えたりしている。あるいは、盾に反射する光で朝、目が覚めるように置き場所を工夫したりと、<sup>14</sup>如何にも良

き「家庭の天使」たる姿として描写されている。つまりテニソンはマロリーにとっては特別な意味を持たない「盾」を小道具として用いて、エレーンの家庭的な側面を強調しているのである。

こうして見ていくと、マロリーとテニソンの最大の相違点は、エレーンの扱いの差に他ならない。エレーンをヒロインとして抜擢したテニソン、そしてそのヒロインは世俗にまみれておらず、脱出困難な場所に住んでいて、白百合のように清純で愛らしく、かつ家庭的なのである。これは、まさにヴィクトリア朝における理想の女性像そのものである。冒頭部のエレーン像から引き出された仮説は、ここで確かに成立する。彼はマロリーを踏襲する一方で、エレーンに関しては様々なイメージを賦与することによって、実は同時代を生きる女性像を描いていた。しかしここで重要なことは、理想像としてのエレーンは、変貌していくプロセスを描くために提示されたものだという点である。またテニソンが、マロリーにおいては全く見られなかった官能性を独創的な手法で創造し、脱出願望を強調しているという点である。赤い絵の具は、真白い画布の上ではよりその鮮やかさを際出たせる。それと同じように、テニソンの独創をより効果的にするために、エレーンが「家庭の天使」として提示されているのだ。

## 5. ヒロインとしてのエレーンの意味

伝説中の一人物をヴィクトリア朝に甦らせて、意志を持ったヒロインに仕立てあげたテニソンの意図は何であったのだろうか。まず、快樂に身を任せると破滅が待ち受けていることへの警告という、従来からの説を挙げることができる。確かに、エレーンの言動は、ヴィクトリア朝の道德規範から大きく逸脱しており、最終的には死に至っている。しかし、もしこの詩が警告であるとするならば、エレーンの最期は悲惨で醜いものとして描かれ、読者に対して恐怖感、あるいは嫌悪感を与えるものとなる筈である。ところがテニソンは、ヴィクトリア社会の倫理感に反する言動をとっていくエレーンを決して批判的に扱ってはいない。彼はエレーンを非難するどころか、確固たる自分の考えを持ち、毅然として死を選ぶ、自立したヒロインとして描いている。つまり、反社会的な行動を重ねる女性を肯定しているのである。

特に、エレーンの死の場面は、醜いどころかとても美しく描かれており、亡骸が手紙と百合をその手に携えて、遺言どおり舟でキャメロットへと流されていく様は、さながら一幅の絵のようである。実際、このシーンは多くの画家のインスピレーションを刺激し、種々多様なエレーンが描かれている。<sup>15</sup> 純愛に生

きた乙女が、死をもって愛を成就させるという設定が、彼らの琴線を揺さぶるのであろうか。テニソン自身もこの場面を綿密に描写して、荘厳な美しさを描くのに筆を惜しんでいない。先程触れたように、スウィンバーンは反テニソン派であるが、例の批評論議の一環でテニソンの低俗さを非難しつつも、「絵画的には最高の美と真実を表現し得る詩人だ」と言及している。<sup>16</sup> とりわけ、テニソンが旅立つエレーンを描写した箇所は、息をのむほどに美しい場面である。

‘Farewell, sweet sister,’ parted all in tears.

.....

In her right hand the lily, in her left

The letter—all her bright hair streaming down—

And all the coverlid was cloth of gold

Drawn to her waist, and she herself in white

All but her face . . .

Was lovely, for she did not seem as dead,

But fast asleep, and lay as though she smiled.

(1145, 1148-54)

白装束に身を包み、金欄の布にくるまれた、安らかな死に顔のエレーンを描いていることから考えると、テニソンの物語は、恐ろしい破滅への警告とは程遠いものである。これを当時の“fallen women”が辿った運命と比べると、その違いは明らかである。<sup>17</sup>

その上、エレーンを待ち受けていたのは、円卓の騎士の長であるアーサー王である。彼女は王の命令で、騎士の中でも特に優れた騎士たちにうやうやしく運ばれ、ランスロットと対面する。そして、ランスロットから成り行きを聞いた王は、エレーンの純愛に心打たれ、自らが先頭に立って豪華な葬送を執り行なうのである。

So towards that shrine which then in all the realm

Was richest, Arthur leading, slowly went

The marshalled Order of their Table Round,

.....

The maiden buried . . .

Nor meanly, but with gorgeous obsequies,

And mass, and rolling music, like a queen.

(1319-21, 1323-25)

名も知らない、偶然流れついた乙女の亡骸を、アーサー王自身手厚く葬っている。また王は、“Let her tomb / Be costly, and her image thereupon” (1328-29) と、立派な墓石まで彼女に贈っている。こうしてエレーンは、自分の愛を全うし、死を選ぶことによって“Pray for my soul, and yield me burial” (1272) という自らの望みを遂げている。死ぬことによってしか成就することのない愛を選んだエレーンであるが、彼女の死は、美しく、気高いものとして、残された人々の心に強烈に焼きついている。つまり、彼女の命を賭けた愛は、非難されるどころか、反対に礼賛されていると解釈することができる。やはり、この詩が当時の道徳理念に反した行為に対する警鐘であるとは考えがたい。

そうすると、エレーンに体现されている、閉じこめられていた「家庭の天使」が自我に目覚め、自らの意志で選んだ人生を完全燃焼していく様は、ヴィクトリア朝を生きる女性たちへの提言と考える事ができるのではないだろうか。いみじくも T. S. Eliot は “Tennyson is ... the most instinctive rebel against the society in which he was the most perfect conformist.” というテニソン評を残している。<sup>18</sup> これは彼の意外な一面を示唆している興味深い発言である。テニソンは、エレーンをヒロインとして登用して、反社会的行動をとらせることによって、当時の女性が被っていた抑圧に反旗を翻していたのではないだろうか。その際に賦与された官能性や脱出願望は、自由な生き方の象徴であるといえよう。

## 結び

テニソンの“Lancelot and Elaine”が、単にマロリーの物語の焼き直しでないことは明らかである。その点については、脇役であったエレーンをヒロインとして登用し、時代が求める女性像として提示しながら、徐々に、しかし強烈に覆していくテニソンの手法に、明確に表われている。彼は、エレーンの持つ二面性を、「白」と「赤」のイメージを用いて巧みに表現している。「白」の側面によって、ヴィクトリア朝の理想の女性像を描き、それが十分に広がったところで「赤」を効果的に用いた、ラファエロ前派ばりの官能性を漂わせていく。ここで「赤」の側面を用いることによって、内に秘めた脱出願望と情熱をも描出しているのだ。さらに、吟味して選択した語を用いて、エレーンの心の動きをつぶさに描き出し、脱出願望をより高揚させている。また、テニソンはこのプロセスにおいて、絵画的な美を盛り込むことも忘れてはいない。そして最

後には、自分の心に忠実に生きた乙女に、アーサー王の手によって弔られるという名誉を授け、彼女の生き方を肯定している。このエレーン変貌のプロセスこそ、テニソンが描きたかったものではないだろうか。

結局、テニソンはエレーンという伝説上の人物に仮託して、「家庭の天使像」を押しつけられているヴィクトリア朝女性に呼びかけているのではないだろうか。彼は、「白」の側面として描かれた理想像の対極にある、抑圧からの開放と、ひとりの人間としての生き方を提言しているように思える。男は外で働き、女は家を守るという図式の堅持が望まれていた時代に、敢えてテニソンは「赤」の側面を前面に押し出して、エレーンを外の世界へと飛翔させて完全燃焼させている。彼自身が内包している、当時の女性に対する問題意識がそうさせたに違いない。それゆえに、理想の女性像エレーンに情熱を吹き込み、大胆に振る舞わせて、官能的な女性へと変貌させていくプロセスをこのように緻密に描いているのであろう。テニソンによるエレーンの変身には、男性中心の社会で、人間として生きる自由や権利を剥奪された女性たちへのメッセージがこめられているのではないだろうか。

## 注

\* 本稿は甲南英文学会第12回研究発表会（1996年6月29日、於甲南大学）における口頭発表の草稿を加筆修正したものである。

- 1 Carlyle は *Past and Present* (1843) において、産業革命後ひたすら物質文化を追い求めて“Mammonism”に陥ってしまった国民が模範にすべきなのは、信仰と労働の喜びに満ちあふれていた中世であると主張している。また Scott の *Marmion* (1806) では、アーサー王伝説の聖杯探求が扱われている。
- 2 *The Poems of Tennyson*, ed. Christopher Ricks (Essex: Longman, 1987). 以下、テニソンのテキストの引用は本書により、括弧内に行数を示す。
- 3 Man for the field and woman for the hearth:  
Man for the sword and for the needle she:  
Man with the head and woman with the heart:  
Man to command and woman to obey . . . .  
(“The Princess,” v, 437-40)
- テニソンは男女間の役割分担を明確にし、男は外で戦い女は家庭を守り、頭脳労働は男の領域とし女性は心優しく従順であれ、と歌っている。
- 4 “The bearing and the training of a child / Is woman’s wisdom.” (“The Princess,” v, 455-56)
- 5 H. A. Taine, “Tennyson as the Poet of Victorian England,” *Tennyson: The Critical Heritage*, ed. John D. Jump (London: Routledge and Kegan Paul, 1967) 272.
- 6 *Contemporary Review* 誌に掲載されたビュカナンの評論 “The Fleshly School of Poetry: Mr. D. G. Rossetti” (Oct. 1871) において、彼はロッセティやスウィンバーンらを “the fleshly school” と呼ん

で非難している。

- 7 Dante Gabriel Rossetti, "Mary's Girlhood," *The Works of Dante Gabriel Rossetti*, ed. William M. Rossetti (London: Ellis and Scrutton, 1911) 173.
- 8 "The Lady of Shalott" はマロリーではなく, "Donna di Scalo" という Italian novelette を下敷きにしてはいるが, 機織り, 鏡, 呪い, 島などの要素はテニソンの独創である。またシャーロット姫が塔に幽閉されていることや, 外の世界へ飛び出して行く決心をする点も, 元の物語には見られない。つまりテニソンはここでも世俗からの隔離と, 外界への脱出願望という要素を付与している。
- 9 A. C. Swinburne, "Under the Microscope," *Dictionary of Literary Biography: Victorian Poets After 1850*, ed. William E. Fredeman and Ira B. Nadel (Michigan: Gale Research, 1985) 377-400.
- 10 マロリーの「アーサー王物語」は, キャクストン版 (1485年) とウインチェスター版 (1934年に写本が発見された) があるが, 物語の構成がかなり違っている。しかし, テニソンが前者を参照したのは明らかであるので, テキストはキャクストンの現代英語版を用いている。
- 11 Thomas Malory, *Le Morte D'Arthur* (London: J. M. Dent and Sons, 1923) Vol. 2. 以下, マロリーのテキストの引用は本書により, 括弧内に章および行数を示す。
- 12 テニソンは1859年に "Elaine" として発表後, 1870年に "Lancelot and Elaine" と改題している。当初 "Elaine" と題していたことから, 彼がエレーンにスポットをあてていたことがうかがわれる。
- 13           to his proud horse Lancelot turned, and smoothed  
          The glossy shoulder . . .  
          Half-envious of the flattering hand, she drew  
          Nearer and stood.           ("Lancelot and Elaine," 345-48)
- 14           the sacred shield of Lancelot;  
          Which first she placed where morning's earliest ray  
          Might strike it, and awake her with the gleam;  
  ("Lancelot and Elaine," 4-6)
- 15 同時代のものとしては, Doré や Grimshaw の Elaine が有名である。古くは *The Works of Sir Thomas Malory* の写本の挿絵 (マンチェスターのライオンズ図書館所蔵) や Royal Manuscript の *Arthurian Legends in Medieval Art* の挿絵 (大英博物館蔵) に見られる「アストラットの少女」の版画がある。また日本においても, 中村不折や橋口五葉が夏目漱石の『産露行』に寄せた挿絵が見られる。
- 16 A. C. Swinburne, "A. C. Swinburne replies to Taine," *Tennyson: The Critical Heritage*, 347.
- 17 Thomas Hood の "The Bridge of Sighs" (1843) や Mrs. Gaskell の小説 *Ruth* (1853) などに, 悲惨な最期を逃げた "fallen women" が描かれている。
- 18 T. S. Eliot, "In Memoriam," *Selected Essays* (London: Faber and Faber, 1976) 337.



## *The Rainbow* における幻想と幻滅

横山三鶴

### SYNOPSIS

Lawrence created Ursula, the heroine of *The Rainbow*, as an independent and responsible woman who acts according to her own will. Ursula's experience as a school teacher and love-relationship with Skrebensky, both of which brought about her disillusionment with life, indicate that she was unable to achieve her fulfilment in society, as well as her independence in pursuing her social self. Lawrence denounced the degradation of human life and oversophistication of the intellect in the industrialized, civilized society of the modern age. Though the world still goes on to retrograde toward destruction, Lawrence believes in man's potentialities to fight his way through life. Ursula's illusions and subsequent disillusionment in her development suggests Lawrence's attitude toward modern society. It is a necessary process to regain the essential human qualities and to achieve fulfilment.

### はじめに

*The Rainbow* (1915) に三代目のヒロインとして登場する Ursula は、「行動する女性」である。Lawrence は、この小説のヒロインを、新しい自我を持ち自分の意志で行動する女性として描こうとした。*Sons and Lovers* (1913) を書き上げた後に書かれた序文の中で、Lawrence は、かつてはエディプスであった息子と恋人の悲劇は今や多数であると述べ、女性も個人として確立した自我を持たなければその悲劇は延々と繰り返されることを示唆している。<sup>1</sup> また、*The Rainbow* を執筆するにあたって習作とした“Study of Thomas Hardy” (1936) においては、芸術の目指すものは相反する二つのものの葛藤と最終的な和解であり、それは両者が対等に独立してはじめて成就するということを主張している。<sup>2</sup> つまり、男女がそれぞれに「個人」として対等に独立した自我を持つことの必要性が、*The Rainbow* 以降のテーマとなっているのである。そして、1914年6月5日の Edward Garnett に宛てた手紙において、*The Rainbow* のヒロインに託して、“old stable ego”ではなく“another ego”を描いていると述べているように、

Lawrence はこの作品で個人として最も本質的な部分としての自我を探ろうとしたことが伺える。<sup>3</sup> *Sons and Lovers* で、Paul が母親の死を通して人生における死を経験し新しい自己として生きる道を見いだしたように、Ursula も成長の過程で様々な幻想を抱いて行動しては幻滅を繰り返し、最終的に生死をさまよう経験を経て新しい自己として生きる出発点に立つのである。

本稿では、Lawrence が Ursula に託した真の個人としての「生」を、社会的個人としての生き方と対比して論じていく。つまり、新しい生き方を求めて幻想を抱き「外」の世界に踏み出した彼女にとって、なぜその経験が幻滅に終わらなければならなかったのかを、第一に教師としての社会への挑戦、そして第二に Skrebensky との恋愛と破局という経験を取り上げ、考察する。これらの経験を経て Ursula は、「外」の世界、つまり社会の価値判断に従って生きるのではなく、本来の自己の欲求に忠実に生きる女性—新しい自我を持ち個人として確立したヒロイン—に成長する。そして、Ursula にとっての幻滅の経験は、彼女個人の次元だけで語ることはできない。彼女が幻想と幻滅を繰り返すことで自我を見いだすその過程は、個人としての「生」にとって無意味なものを否定していくことである。Lawrence は、産業革命、都市の発達にともなって民主化運動が進み、社会の変動が様々な問題を引き起こした1840年代をこの小説の始まりとしている。この、Ursula に託された幻想と幻滅のパターンは、産業社会の進んできた方向と人間のあり方に対する Lawrence の、幻滅であり批判である。Lawrence が新しい“ego”を持った人物を描こうとしたことについては、Raymond Williams が指摘しているように、共同社会の崩壊、社会の変動という軋轢の中で、“such a reality, radical and irreducible, has to be made and found”であることを示唆している。<sup>4</sup> Lawrence は現代社会、及び社会的自我や意識を追及する人間の生に対してあくまで批判的であるが、その批判は、同時に新しい「生」とは何かという問いかけでもある。

## 1. 教育への期待と幻滅

Ursula は、小学校助教師の願書を投函した瞬間、次のように感じている。

As she stamped her long letters, and put them into the box at the main post-office, she felt as if already she was out of the reach of her father and mother, as if she had connected herself with the outer, greater world of activity, the man-made world.<sup>5</sup>

Ursula は、幼い頃から特に母親に対して反抗的であった。それは、母親という権威に無意識に抵抗していたのだが、成長するにつれ、次々に子供を産み家庭内の雑事に追われている母親への幻滅は、次第に大きくなっていく。彼女にとって母親は、妊娠することに女としての幸福を感じ、ただその多産性に満足し母性に安住している女性としか映らない。そして、家にいる限りはこの母親と闘わなければならないという気持ちが行動の原点となり、Ursula は娘を働かせる必要はないと考える父親のプライドをも否定し、自立した人間になるために教師という道を選ぶのである。「外の、より大きな活動の世界、男によってつくられた世界」、つまり社会の一員として働く仕事と義務の世界に、一步を踏み出すのである。

教師という仕事に子どもたちとの人間的な接触や個人的な関係を期待していた Ursula は、教育の実態そのものに幻滅することになる。愛情を注げば自分の理想は理解してもらえると信じていた彼女は、いきなり理想と現実の“horrible gaps” (350) に直面する。朝早く到着した彼女に、学校はまず“empty prison” (343) という印象を与えている。絶対的な権力を持つ校長、まるで機械のように授業をしている教師たち、そして生徒たちは、彼女にとって“individual children”ではなく、むしろ“collective inhuman thing” (350) と感じられるのである。その「非人間の集団」が彼女に敵意を持ち、命令されるのだけを待っている。Ursula は意気揚々と男の世界に乗り込んで独立はしたものの、教師という仕事を恐ろしく感じるようになる。

Ursula felt her heart faint inside her. Why must she grasp all this, why must she force learning on fifty five reluctant children, having all the time an ugly, rude jealousy behind her, ready to throw her to the mercy of the herd of children, who would like to rend her as a weaker representative of authority. A great dread of her task possessed her. She saw Mr Brunt, Miss Harby, Miss Schofield, all the school-teachers, drudging unwillingly at the graceless task of compelling many children into one disciplined, mechanical set, reducing the whole set to an automatic state of obedience and attention, and then of commanding their acceptance of various pieces of knowledge. (355)

教師とはだれもが「権威の弱い見本」であり、子どもたちを「服従と注意の自動機械化」し、断片的知識を命令同様に詰め込ませているにすぎないと気づく。しかも、教師という立場は、上からは校長という権力、下からは生徒たちの敵

意にはさまれ、まるで女中頭のような“the ignominious position” (354)である。まさに“the mongrel authority, teacher” (354)というべく、権威を持っているようで持っていない、中途半端な立場に置かれている。

この、教室で Ursula の経験する矛盾やジレンマは、実際に教師の経験を持つ Lawrence 自身の印象でもあるが、本論では Ursula の自我と関わる問題として、彼女が否定しなければならない現実としてのみ取り上げる。Ursula がいくら人間的な教育を志したところで、現実に教育の場で最も必要とされていたものは「秩序」なのである。秩序を保つためには、人間としての自分を捨てて、教える道具、一個の抽象としての教師でいなければならない。つまり、役割としての Standard Five Teacher (第5学級教師) に徹し、Ursula Brangwen 個人としての自分は捨て去らなければ、たとえ見せかけでも権威を保つことはできない。さらに、彼女がなまじ教育を受け独立心をもつ女性であるがゆえに、校長からも憎まれることになる。敵意にはさまれ、秩序のために義務のことだけを考える職業教師になりきることは、個人の生の充足を求めようとする Ursula にとって、当然、自己実現の道とはなり得ない。むしろ、自己を破壊することなのである。

Ursula は、大学進学というより高い目標をもつことで、「仕事と男の因襲の世界」(377)の二年間を切り抜けるが、新たな理想を抱いて進学した大学も“barren, cheap, a temple converted to the most vulgar, petty commerce” (404)であり、すべての知識も乾物、骨董品でしかない。何という不毛、墮落であろう。彼女の理想はまた幻想となり、自分が進むべくして選んだ道に幻滅した Ursula は、これまでの自分を振り返って次のように語っている。

Already it was a history. In every phase she was so different. Yet she was always Ursula Brangwen. But what did it mean, Ursula Brangwen? She did not know what she was. Only she was full of rejection, of refusal. Always, always she was spitting out of her mouth the ash and grit of disillusion, of falsity. She could only stiffen in rejection, in rejection. She seemed always negative in her action. (405)

こうして自分の歴史が、拒絶、反抗、幻滅の連続であったことに気づくのである。しかし、不断の牢獄であった教師時代、新たな幻滅となった大学生活を通して、Ursula はただ否定を続けるだけだったのであろうか。彼女にとって全ての価値に反抗し、それを否定することは、後退ではなく成長でなければならない。幻滅、反抗、否定を繰り返すなかで、彼女は、魂の奥深くで何かを求めている自分を理解していた。

She felt that somewhere, in something, she was not free. And she wanted to be. She was in revolt. For once she were free she could get somewhere. Ah, the wonderful, real somewhere that was beyond her, the somewhere that she felt deep, deep inside her. (377)

それは、“seed buried in dry ash” (405) のようなもので、彼女にさえまだ実体はつかめない。そして、その種子のようなものに到達するには、まだ、払いのけなければならない現実の灰があるのである。

## 2. 初恋の幻想と幻滅

Ursula の青春における最大の幻想は、Skrebensky という男性に対して抱いた理想、そして彼との恋愛である。その初恋の段階から破局に至るまで Lawrence はこの恋愛が Ursula の錯覚であることを意図して描いている。彼の魅力に強くひかれながらも、“Skrebensky, somehow, had created a deadness round her, a sterility, as if the world were ashes.” (293-4) とあるように、二人の恋愛には激しくはあるが、常にある種の空しさ、“nothingness” (294) が残る。思春期の頃「自己責任」に目覚めそれを重荷と感じていた彼女には、すでに軍人であった Skrebensky がいかにも自己に責任を持つ孤高の紳士に思えた。また、仕事に、大学に幻滅していた彼女の前に再び現れた Skrebensky は、新しい世界への突破口になるかと思えた。結局、Skrebensky は Ursula のまだ満たされない自己の欲求を投影する相手であり、彼女が本当に求めていたものは Skrebensky 自身ではなく、彼の存在をはるかに越えた彼女自身の自我なのであった。

Ursula と Skrebensky とを決定的に隔てているものは、いったい何なのだろうか。軍隊に所属して国家のために働いている Skrebensky は戦争が起これば国家のために戦う、自分は国家の一員で国家のためにこそ働く、と言って Ursula を失望させたことがあった。彼は、魂を持たない男として描かれ、官能の欲求を満たすために恋愛もするが、恋愛においても仕事においても自己実現のための意志や希望などはすでに失ってしまっている。

He went about at his duties, giving himself up to them. At the bottom of his heart his self, the soul that aspired and had true hope of self-effectuation lay as dead, still-born, a dead weight in his womb. Who was he, to hold important his

personal connections? What did a man matter, personally? He was just a brick in the whole great social fabric, the nation, the modern humanity. His personal movements were small, and entirely subsidiary. The whole form must be ensured, not ruptured, for any personal reason whatsoever, since no personal reason could justify such a breaking. What did personal intimacy matter? One had to fill one's place in the whole, the great scheme of man's elaborate civilisation, that was all. The Whole mattered—but the unit, the person, had no importance, except as he represented the Whole. (304)

彼にとって大切なのは、「個人」ではなく「全体」である。そしてさらに“the good of the greatest number” (304) に従うのが個人の生き方、自分はどうであれ最大多数にとって善とされていること、つまり国家の繁栄、国家の富ということが、彼にとっても善なのである。それが、自分自身の魂に真の満足を与えてくれないことはわかっている、その魂をすでに失っているため彼はただ組織というすでに確立された社会の秩序の中でその義務を果たしていればよかったのである。

あくまで個人としての生き方を追及する Ursula と、組織の一員としての役割に徹する Skrebensky との恋愛は、二人に結婚という問題が生じたときに危機を迎える。Ursula にとって幻滅ばかりの大学生活ではあったが、彼女は顕微鏡で単細胞生物の光を帯びて輝く細胞核を見たとき、次のように感じている。

It intended to be itself. But what self? Suddenly in her mind the world gleamed strangely, with an intense light, like the nucleus of the creature under the microscope. Suddenly she had passed away into an intensely-gleaming light of knowledge. She could not understand what it all was. She only knew that it was not limited mechanical energy, nor mere purpose of self-preservation and self-assertion. It was a consummation, a being infinite. Self was oneness with the infinite. To be oneself was a supreme, gleaming triumph of infinity. (408-9)

Ursula は、彼女自身の中で、永遠的な自我に目覚めようとしていた。一方、やがて大尉となり支配階級の一人として、文明を代表する一人として、よりよき国家理想の達成という目標のために献身しようとインドに行く Skrebensky は、本来の自己のアイデンティティというものを持たず、常に社会から与えられた役割によってのみ存在する人物にすぎない。Skrebensky は、Ursula を自分のものにしたいがために結婚を望み、Ursula もそんな彼と結婚して「社会的妻」と

なることに魅力を感じないわけではない。しかし、それは“dead reality”の一部になることであり、「社会的妻」というのは、“a material symbol” (419) にすぎない。Skrebensky が結婚にこだわればこだわるほど、彼女にとってそれは意味のないことに思えてくる。Ursula が彼の存在を終始どこか不毛であると感じていたように、Skrebensky 自身も、Ursula を通して、次第に自分の中に個人としての生命が欠如していること、「魂の死」を意識せずにいられなくなるのである。彼女に拒否されることは、彼をなおさら不安にさせる。

He felt as if his life were dead. His soul was extinct. The whole being of him had become sterile, he was a spectre, divorced from life. He had no fulness, he was just a flat shape. Day by day the madness accumulated in him. The horror of not-being possessed him. (424)

そして、イギリス人のインド統治をめぐって Ursula の投げかけた “...I'm against you, and all your old, dead things,” (428) ということばは、彼に決定的な一撃を与える。自分の掲げてきた信条を否定するこのことばに、彼は生命を奪い取られたかのように、また、その肉体に個人の生命など存在しないかのように感じている。そして、Ursula にとって自分が無力であることにも気づいていく。一方、Ursula はどんなに情熱をもって愛したいと願っても、肉体的に満足を得ることはできても、最終的に Skrebensky の不毛な自己ゆえに愛を成就することはできない。Ursula は無意識のうちに Skrebensky という男、恋愛、結婚といった次元を越えたもの、つまり Lawrence のいう「新しい自我」を求めており、Skrebensky にとって彼女は、“the darkness, the challenge, the horror.” (447) なのである。無限なもの、永遠なものへと自我を拡大しようとしている Ursula の生に対して、社会的自我のみを追及する Skrebensky の生は、むしろ破壊、死へと向かうものである。

### 3. 幻滅から新たな個の確立へ

この小説の始まりは1840年代に設定されており、舞台となるマーシュ農場では、すでに運河が通り、炭坑からは巻き上げ機の唸りが聞こえ、汽車が走り、人々を驚かせていた。その時代の変化の中で、Brangwen の男たちは、その祖先たちがそうであったように大地を守り、自然のリズムの中に「無限なもの」の一部として生きていたが、女たちは何か違うものを求めようとしていた。

The women were different. On them too was the drowse of blood-intimacy, calves sucking and hens running together it droves, and young geese palpitating in the hand whilst food was pushed down their throttle. But the women looked out from the heated, blind, intercourse of farm-life, to the spoken world beyond. They were aware of the lips and the mind of the world speaking and giving utterance, they hear the sound in the distance, and they strained to listen. (10)

女たちが求めていたものは、はるかかなたの声ある世界、ことばの世界、すなわち “the far-off world of cities and governments and the active scope of man, the magic land to her, where secrets were made known and desires fulfilled” (11) であり、これからの子どもたちに違う人生を歩ませるためには、“education and experience” (12) が必要であると考えたのである。「教育と経験が人生を変える」という三世前前の母たちの世代が思い描いたまさにその理想を、Ursula が実現したということになる。しかし、その理想は、幻想であった。現実の社会は、「男の世界」であり、教育そのものが自己実現の場にも、手段にもなり得ないことは、Ursula の幻滅が物語っていた通りである。Patricia Alden は、ビルドゥングスロマンの流れにおいて、*Sons and Lovers* と *The Rainbow* の主人公、Paul と Ursula の社会的上昇と自己充足とが一致しえなくなっていることを指摘し、Ursula の社会の現実との衝突は、悲劇ではなくむしろ勝利であると述べている。<sup>6</sup> *Sons and Lovers* においては、労働者階級から教育を上昇の手段として社会的上昇を果たした William が、自己破壊という悲劇に終わる。一方、Paul は同じように教育を受け、中流階級の仲間入りをするが、彼には社会的上昇という意識はなく、彼にとっての成長は何ものにも属さない自由な「生」を得ることであった。Ursula の成長の過程も、教育を受けて自立し男の世界を征服することでもなく、また社会的地位のある男性と恋愛し結婚に至ることでもない。Ursula は Brangwen の女たちの理想を「教育と経験」を通して実現しながらもそれに幻滅し、自らそれを否定しているのである。

Ursula は、妊娠、そして流産という生死をさまようほどの苦しみを通して自分を取り巻く環境と不毛な「過去」に決別をする。

Repeatedly, in an ache of utter weariness she repeated: “I have no father nor mother nor lover, I have no allocated place in the world of things, I do not belong to Beldover nor to Nottingham nor to England nor to this world, they none of them exist, I am trammelled and entangled in them, but they are all unreal. I must break



out of it, like a nut from its shell which is an unreality.” (456)

Ursula は、ドングリの実の核が硬い殻を破って若芽を吹き出すように、彼女が反抗を続けて来た現実の古い殻を破って「時の流れの中に、新しい永遠の知識を創造する」(456) という決意をするのである。それは、彼女の中に流れる代々マーシュ農場に生きて来た Brangwen の伝統、すなわち “blood intimacy” (11) と言われていた、大地、自然といった生命の根源との結びつきや、自然の中で繰り返される死と生成のメカニズムへの共感を改めて認識したということになるのである。

この点において *The Rainbow* は、時代がもたらした変化、あるいは崩壊へと向かっている社会に対する、Lawrence の挑戦と解釈することもできる。Lawrence にとって、社会的な自我は「個人」の生命にとって破壊的であり不毛なものでもある。Scott Sanders は、“... he (Lawrence) searched for a compromise between natural self and the social self.” と述べ、この小説においては、自然と社会との対立が軸になっていると論じている。<sup>7</sup> また、Peter Sheckner は、この時代の変化する社会における個人の葛藤に注目し、*The Rainbow* の葛藤の本質は、「産業資本主義の醜さにもかかわらず十分な可能性を認識する個人の葛藤である」と述べている。<sup>8</sup> このように自然と社会、あるいは個人と社会を対比させることで、Lawrence は、産業社会を象徴する Ursula の伯父である炭坑経営者の Tom や、国家理想を代表する軍人の Skrebensky、教育の場で教える機械となってしまった教師たちといった社会の側の人物を、人間の本来の「生」を否定する人物として描いている。彼らの生を通して、人間が社会の中で社会的自我のみを追及し、「個人」としての自己を顧みることができなくなったことを時代の危機としてとらえている。外の世界、社会と関わることを通して抱いた自己実現への道は、当然、幻滅の繰り返しとならざるを得ないことを、Ursula は理解するのである。

She had the ash of disillusion gritting under her teeth. Would the next move turn out the same? Always the shining doorway ahead: and then, upon approach, always the shining doorway was a gate into another ugly yard, dirty and active and dead. Always the crest of the hill gleaming ahead under heaven: and then, from the top of the hill, only another sordid valley full of amorphous, squalid activity. (404)

しかし、幻滅を繰り返す葛藤の過程は、あくまで、Sheckner が述べているように、個人の可能性を認識する過程であるといえるのである。

したがって、小説は幻滅のまま終わってはいない。幻滅を越えたところで最後にかかる虹は、Ursulaにとって彼女が理想とする結婚への希望、約束の虹である。彼女は代々の Brangwen の祖先のように、自然の中で生命の根源との結びつきを大切にするという原点に立ち返り、彼女の血の中に流れるその伝統を無意識のうちに継承しつつ、新たに「川底の石のように不動、不壊の」(455) 自己を認識する。次の作品、*Women in Love* においては、男女が「個人」として生きるための自我を確立しながら理想を求めて葛藤し、新しい関係を築いていくことになるが、その次なる道が、Ursulaにとって真の自己実現への道となるのである。

And the rainbow stood on the earth. She knew that the sordid people who crept hard-scaled and separate on the face of the world's corruption were living still, that the rainbow was arched in their blood and would quiver to life in their spirit, that they would cast off their horny covering of disintegration, that new, clean naked bodies would issue to a new germination, to a new growth, rising to the light and the wind and the clean rain of heaven. She saw in the rainbow the earth's new architecture, the world built up in a living fabric of Truth, fitting to the over-arching heaven. (459)

Leavis はこの虹を パラドックスであるとし、Ursula の虹は必ずしも Lawrence の虹とはいえないことを強調している。<sup>9</sup> 確かに虹は Ursula の成熟を意味し、彼女にとって希望、約束の象徴であることは否定できない。しかし、Lawrence が彼女のこれからの人生に託したものは、「個人」に対する信頼と可能性であり、現代という混沌の時代にあってその可能性を追及し続けることが、*Women in Love* さらに以降の作品のテーマにもなっている。1915年に書かれたエッセイ “The Crown” の中で、Lawrence は次のように述べている。

Destruction and Creation are the two relative absolutes between the opposing infinities. Life is in both. Life may even, for a while be almost entirely in one, or almost entirely in the other. The end of either oneness is death. For life is really in the two, the absolute is the pure relation, which is both.<sup>10</sup>

現代社会の危機が、*Women in Love* により具体的に描かれているように、時代は確実に破壊へと進んでいることを Lawrence は見抜いていた。しかし Lawrence にとって、破壊と創造は真の意味では等価なものであり、彼は、崩壊

の過程にあって新たに創りだされるものを信じていたのである。社会がいかに腐敗、墮落し、その現実が幻滅をもたらすものであっても、その現実の上に虹がかかったように、Lawrence はそこにまだその時代を生き抜いて行く「個人」にとっての新たな創造の可能性があることを信じて疑わない。それは、破壊という過程を経て創造へ向かう「生」の力である。

## 注

\* 本稿は甲南英文学会第12回研究発表会（1996年6月29日、於甲南大学）における口頭発表の草稿を加筆修正したものである。

- 1 Aldous Huxley ed. *The Letters of D. H. Lawrence* (London: William Heinemann, 1956) 95-102. 1913年1月に Edward Garnett宛に書かれた *Foreword to "Sons and Lovers"* に, "The old son-lover was Oedipus. The name of the new one is legion." とある。
- 2 "Study of Thomas Hardy", IX - X. D. H. Lawrence, *Phoenix*, ed. Edward D. McDonald (Harmondsworth: Penguin Books, 1987; first published by William Heinemann, 1936)
- 3 James T. Boulton ed., *Letters of D. H. Lawrence, Volume I 1901-13* (Cambridge: Cambridge University Press, 1977) 183.  
同じ手紙において, "another ego" を描くということは, 人物の "states of the same single radically-unchanged element" を発見することであると述べ, ダイヤモンドではなく炭素を描くことがテーマであるとしている。
- 4 Raymond Williams, *The English Novel from Dickens to Lawrence* (London: Chatto & Windus, 1970) 178.
- 5 D. H. Lawrence, *The Rainbow* (Harmondsworth: Penguin Books, 1995) 335. 以下テキストの頁数は本文中の括弧内に記す。
- 6 Patricia Alden, *Social Mobility in the English Bildungsroman: Gissing, Hardy, Bennett, and Lawrence* (Ann Arbor: University of Michigan Research Press, 1986) 123.
- 7 Scott Sanders, *D. H. Lawrence: The World of the Major Novels* (London: Vision Press, 1973) 14.
- 8 Peter Scheckner, *Class, Politics and the Individual: A Study of the Major Works of D. H. Lawrence* (Rutherford, N.J.: Fairleigh Dickinson University Press, 1985) 46.
- 9 F. R. Leavis, *Thought, Words, and Creativity: Art and Thought in Lawrence* (London: Chatto & Windus, 1976) 127-9. Leavis は, 虹 "quasi-hope", "un-daunted faith", "faith-in life overhung by frightening menace" であるとしている (*Ibid.* 137). Lawrence は虹に希望を託しつつ, *Women in Love* では時代のより厳しい現実を目を向けざるを得ない。
- 10 D. H. Lawrence, *Phoenix II*, eds, Warren Roberts and Hurry T. Moore (Harmondsworth: Penguin Books, 1978; first published by The Viking Press, 1968) 404. このエッセイにおいて, Lawrence は二つの相対する要素の対立こそ生の基本であることを主張している。



# “Vacillation”に見られるイエイツの詩の原理について

藤本 さおり

## SYNOPSIS

This paper aims at capturing the principle of W. B. Yeats's poetic practice through the analysis of “Vacillation,” a poem in Yeats's later years. Conflict deeply fascinates Yeats, and the poem “Vacillation,” loaded with conflict, counts among the poems which show Yeats's chief concern. A variety of conflicting elements in “Vacillation” embody the sense of the inevitability of conflict. What is remarkable in the poem is that not only the conflict between two opposing elements such as body v. s. soul but also the conflict between the impulse to dissolve conflicts and that to preserve them is problematized. The latter kind of conflict gives a great deal of vigour to Yeats's poetry because it, by nature, rejects an easy solution of any conflict. The conflict between the dissolution and the preservation of conflict seems to be the *primum mobile* of Yeats's poetic practice.

## はじめに

“Vacillation,” その表題どおりに揺れ動くこの作品は、1931年から32年にかけてイエイツ (W. B. Yeats) が66歳のときに書いた作品である。1931年12月15日付けの、友人オリビア・シェイクスピア (Olivia Shakespeare) 宛ての手紙にイエイツはこの作品について次のような言葉を記している。“I have begun a longish poem called ‘Wisdom’ in the attempt to shake off ‘Crazy Jane’ and I begin to think I shall take to religion unless you save me from it.”<sup>1</sup> クレイジー・ジェーンの詩とは1932年に出された“Words for Music Perhaps”という詩集に入っており、後に“Vacillation”と同じく1933年に出版された詩集“The Winding Stair and Other Poems”に収められた詩で、娼婦ジェーンをナレーターにした一連の作品を指している。“Wisdom”というのは“Vacillation”の原題である。イエイツはこの作品でクレイジー・ジェーンが代表する肉体の影を断ち切るために“Vacillation”を書き始め、そのとき“take to religion”, つまり宗教の方をとるかもしれないと考えていたことが分かる。

デヴィッド・ロジャーズ (David Rogers) は “Yeats and Von Hügel: A Study of ‘Vacillation’” と題した70ページあまりの論文において、“Vacillation” を、やまいから回復した詩人イエイツを晩年の作品群へと導くメルクマールの作品と見なしている。<sup>2</sup> ロジャーズは、詩人としての最終段階を迎えるにあたってどのような仮面を被るべきか迷っていたイエイツと、カトリック教会世界に真のキリスト教を復活させようとしていたローマ・カトリックの神学者フォン・ヒューゲルとの関係に焦点をあて、“Vacillation” を書くイエイツがいかにしてフォン・ヒューゲルを、すなわち正統的キリスト教を、拒絶したかについて述べている。<sup>3</sup> フォン・ヒューゲルは今では余りよく知る人もいないだろうが、当時は講演活動を盛んに行うなどかなり有名な人だったようだ。人柄もすばらしく、彼の著書 *The Mystical Element of Religion As Studied in Saint Catherine of Genoa and Her Friends* (1908年) もかなり読まれ、これを読んでローマ・カトリックに改宗した人もいたそうである。ところで、ロジャーズ論文の要点は、イエイツがカトリックのキリスト教をライオネル・ジョンソン (Lionel Johnson) や W. T. ホートン (Horton) らの極端なジャンセニズムと結びつけていたと指摘する点である。さらに、イエイツはキリスト教は肉体を否定してしまうものと誤解して理解していたので、肉体を否定する禁欲主義的なキリスト教とそれを代表していると彼が誤解したフォン・ヒューゲルをイエイツは拒絶したのだと論じている (Rogers 153)。このことから、イエイツは現世蔑視・肉体否定の極端な例を、ローマカトリック教を奉じていた身近な友人たちのなかに見ていたことが分かる。友人たちの愚かともいえる姿に一種の畏怖の念と賛嘆を禁じ得なかったイエイツではあるが、彼はこれらの友人たちとは異なる資質の持ち主であった。

“Vacillation” の第8セクションにおいて、イエイツは彼が理解したところの禁欲主義的キリスト教ではなく、ホメロスを、ホメロスの “unchristened heart” (87) を手本にするのだと宣言する。一見、イエイツは単にキリスト教を捨ててホメロスを選んだかのようにみえる。しかし “Vacillation” においてイエイツを選んだのはホメロスただ一人ではなかったと思われる。というのもイエイツは対立する二つのものが常にコンフリクト (葛藤) の状態にあることを望んでいたといえるからである。それはたとえば “Pages from a Diary in 1930” にはこんなふうにかかれていいる。“Could those two impulses, one as much a part of truth as the other, be reconciled, or if one or the other could prevail, all life would cease.”<sup>4</sup> 互いに真理の一部分をなす二つの衝動が、和解をしまえば、あるいは一方が他方を圧倒してしまえば、すべての生命は止んでしまうというのである。この感覚が作品 “Vacillation” の根底にある。イエイツはこの世をひと

つのコンフリクトと見て取っていたが、<sup>5</sup> イェイツの詩の世界に実際に大きな活力を与えているのは、このように整理して表現された信条ではなく、相反するものを詩のなかで取り扱う手法そのものである。そこで本稿は、作品“Vacillation”のなかの動きを追いつつながら、対立する二つのものがどのように扱われているかに注目することで、イェイツの詩の原理に迫りたい。

## 1. 対立するもののあらわれ

“Vacillation”は8つの部分から成るが、その各部分はそれぞれ独立した一つの詩であり、また同時にお互いに影響しあっている。“Vacillation”には様々なコンフリクトが様々なかたちをとって現れる。一つのセクションに複数のコンフリクトが現れることも、また一つのセクションが別のセクションとの間にコンフリクトをつくり出すこともある。“Vacillation”は、いわばコンフリクトの集積である。作品の冒頭で卒然と「ひとは極端と極端との間を走る」(“Between extremities / Man runs his course” [1-2])<sup>6</sup>もの、という考えが示される(イェイツの詩の訳は特にことわらないかぎり筆者訳)。一方の極から他方へとひとが振り子のように動いているところ、もちろんひとの一生を指すのだが、ここにコンフリクトが常にあることは間違いない。そこへ「たいまつ、あるいは炎の息吹」(“A brand, or flaming breath” [3])がやって来る。この炎は、あらゆる対立そのもの(“All those antinomies / Of day and night” [5-6])、つまりあらゆる対立そのものを破壊しようとする炎である。昼と夜とで代表されるような対立構造の崩壊を“body”は“death”と、“heart”は“remorse”と呼ぶ。しかし、とイェイツは立ち止まる。「もしこれらが正しいとすれば、喜びとは一体何か」(“But if these be right / What is joy?” [9-10])。この問いに対するはっきりした答えはここでは分からないし、作品の最後になっても出てはこない。しかし、“What is joy?”という問いかけがこの詩人から真率に発せられていることは疑えない。“Body”が“death”と名付け、“heart”が“remorse”と呼んでいる炎による対立物の破壊が行われると、“joy”が何であるかが分からなくなるのである。そうすると、この第1セクションにこれまで述べられてきた考えそのものが間違っているのではないだろうか。いや、そんなことはないはずだ、とここで新たに、相反する二つの考えの間でコンフリクトが生じる。この第1セクションをみるだけで、“Vacillation”には対立するものが折り重なるようにして現れて来ることが予想される。実際に“Vacillation”はコンフリクトによって成り立っているのだ。

まずコンフリクトがあり、そこにコンフリクトを壊そうとする何物かがやって来て、そこでまたコンフリクトが生じるという動きは、“Vacillation”の第2セクションにも見いだすことができる。ここではまず、木のイメージによって、相反するものとの間の葛藤は幻想的に表現される。

A tree there is that from its topmost bough  
Is half all glittering flame and half all green  
Abounding foliage moistened with the dew . . . (11-13)

燃える葉と緑の葉とは、第7セクションでいうところの Soul と Heart、つまり靈魂と肉体がそれぞれイメージ化されたものである。赤く燃える樹の葉と露に濡れた緑の葉、この両者はともに「半分」であることが、14行目と15行目の“half is half”や“half and half”とで、強調されている。

「半分」であることが強調されながら、火と水という相容れない性質をもつこの二種類の木の葉の間に和解はあるのだろうか。このセクションの後半部分ではアッティスをまつる神官が登場する。アッティスは小アジアのフリジアで崇拝の対象とされた。この美少年はマグナ・メーター（キュベレーあるいはアグディステイス）に愛されたが、彼女の独占欲のため自ら去勢することを強いられて死んだとある。その後、後悔したアグディステイスはゼウスに頼んでアッティスの体を永遠に朽ちないようにしてもらう。アッティスは基本的には植物の神であり、巡りくる春と植物の死と復活を象徴する（*Britannica*）。アッティスの賛美者はその崇拝する偶像を、“That staring fury”と“the blind lush leaf”（17）との間に据える。この象徴的な行為は、アッティスの神官のなかにその二つを和解させよう、最も遠く離れた性質をもつものを一体化しようという目論みがあることを示唆する。

このようなことを試みる者は一体どういう者なのか。最後の詩句には “[he] May know not what he knows, but knows not grief”（18）と書かれている。この謎掛けのような言葉はおそらく次のように解釈できるかと思われる。彼の象徴的な行為は、この特異な樹木にとっては無に等しい行為であったと。というのも、彼は緑の葉と燃える葉とのコンフリクトがある世界を超越しているととれるからである。その知るところを知らぬというのだから、この神官は忘我の境にあるといえる。さらに、この人は悲しみを知ることがないとされる。何も知らないのであれば、悲しみを知らぬのも当然のことなのに、ことさらに悲しみを知らぬのだと断定するのはそうするに足るわけがある。なぜならこの悲しみ（grief）は知らねばならないからだ。アッティスに仕え、したがって植物に似



るこの神官は — というのは崇拜者は常に崇拜の対象との同一化を逃げようとするものであるから — 真正の悲しみ、つまり、緑の葉と燃える葉とにひきさかれながら、とらわれている神ならぬ身である人間の悲しみを知らない (“but knows not grief”) ということになる。<sup>7</sup> 相反する二者の存在する世界を越えたところでは悲しみは無くなるのかもしれない。が、この第2セクション全体のメッセージとして読み取れるのは、対立するもの間に安易な調停はないということ、そして、一度に両方の側に身を置くことも、それらを越えることもできないということではないだろうか。アッティスをまつこのひとの知ることがない悲しみとは、片方の側にあつて、しかももう一つの側にあるものをもとめる悲しみのことだといえるのでないだろうか。この第2セクションの後半からは緑の葉と燃える葉とのコンフリクトを超越すると、このような悲しみが分からなくなるのだと非難するメッセージが読み取れる。

“Vacillation”のほかの部分では、一つのセクションがほかのセクションのアンチ・テーゼともなっている。分かりやすいのが、第4セクションと第5セクションだ。第4セクションの詩は、ロンドンのカフェでの実際の神秘体験を基に書かれた詩である。カフェに一人で座っていたとき、突然ある変化が生じたのだった。

While on the shop and street I gazed  
 My body of a sudden blazed;  
 And twenty minutes more or less  
 It seemed, so great my happiness,  
 That I was blessed and could bless. (40-44)

ナレーターは肉体が燃えたかのような大きな幸せを感じたという。ここでナレーターは、ただ地上に生きているだけで幸せであることを肉体の内側から教えられる。それなのに、この4番目の詩に描かれた存在の幸福というべき状態はこれに続く詩によってかき乱されてしまう。5番目の詩の、落ちて行くような、反省のムードは、その前の詩とあからさまな対照をなしている。例えば、第二連、

Things said or done long years ago,  
 Or things I did not do or say  
 But thought that I might say or do,  
 Weigh me down, and not a day

But something is recalled,  
My conscience or my vanity appalled. (51-56)

この世にいること、ただそれだけで幸福を感じもしたのに、この世にいるだけで心に重荷を感じる。4番目と5番目のセクションはペアとなって、生の正反対の二つの状態を描き出している。第4セクションは第1セクションでの“*What is joy?*”という問いかけへの答えとなる具体例であるかもしれない。しかし、つづく第5セクションでは喜びをうちくたくような後悔と良心の痛みが述べられる。この二つのセクションがほぼ同じ詩形をとっていることから、どちらの状態もナレーターの「私」にとっては同じ重さの真実であることが分かる。どちらの詩も、その片割れであるもう一方の詩が表す内容を否定し去ることはできず、従ってこの両者は対立したままである。

## 2. コンフリクトの消去

対立するものの絶えざる葛藤が瞬間的に消滅したかのような印象を受ける箇所が、“*Vacillation*”にはある。第6セクションである。ここでは、優雅な諦観を通り越してしまって、すべての出来事が色あせて見える虚無感が詩のなかにただよう。第6セクションのテーマは、放棄とっていいだろう。このテーマに限っていえば、第6セクションは、第3セクションの最後で語られた「誇り高く笑いながら墓に入る者」にふさわしくないものは“*extravagance of breath*” (32) とみなせという助言の内容の続きととれる。それが今度は、今までに得て来たものを捨て去れという命令にかわる。とはいえ、第6セクションは、何かを放棄することなどさしてむずかしくは見えないムードのなかで語られ始める。

A rivery field spread out below,  
An odour of the new-mown hay  
In his nostrils, the great lord of Chou  
Cried, casting off the mountain snow,  
'Let all things pass away.' (57-61)

この中国の王の態度は、彼が勝ち取って来た世俗の勝利に高貴な感じさえ与える。王の態度は世俗の勝利を放棄することで得られる聖なる勝利を手にするた

めの行為の規範であるかのようにも理解できる。歌は続く。

Wheel by milk white asses drawn  
Where Babylon or Nineveh  
Rose; some conqueror drew rein  
And cried to battle-weary men,  
'Let all things pass away.'

From man's blood-sodden heart are sprung  
Those branches of the night and day  
Where the gaudy moon is hung.  
What's the meaning of all song?  
'Let all things pass away.' (62-66, 76-71)

第2スタンザに登場する征服者の態度は「戦いに倦んだ兵士達」にとまどいと怒りを引き起こすのに十分である。このすべての骨折りと流血の報酬は一体何だというのだ？ 兵士達の上官の恐るべき答えは、'Let all things pass away'（「すべてを流し去らせよ」）、つまり報酬は何も無しであった。

同じく血をしたたらせながら「これら夜と昼との枝」(“those branches of the night and day” [68]) が一背後に生命の樹のイメージがある一心臓 (heart) から伸びている。次の7番目の詩をみると、Heart は「生まれながらの歌い手」(73) であるから、この heart (心臓) から伸び出るものは詩歌だろう。安っぽい書割のようなけばけばしい月 (“the gaudy moon” [69]) のかかる空に、「これら夜と昼との枝」を茂らせる過程が詩歌の誕生に等しいとすれば、“What's the meaning of all song?” (70)、すべての歌の意味は何だろうか。<sup>8</sup> 問と答えの間にはためらいの時間がある。帰ってくる可能性が一番高い答えは、最も望ましくない答えだと見当がついているからだ。取っておく価値のある歌などひとつもないことを暗示する最終行のリフレインは、これが下から2番目の行に続いていることから見ると、「すべての歌の意味は何だろうか」という問いの答えとなる。また “What's the meaning of all song?” を修辞疑問文ととれば、この行とリフレインの二行でもって「歌に意味なんかありはしない、すべてを捨ててしまっ結構だ」と合唱していることになる。

しかし問題のリフレインは、別の観点から見ると、“What's the meaning of all song?” に真っ当に応じる言葉にはならない。このリフレインは二度繰り返されて、古いバラッドによく見られるすでに意味を失ったリフレインのように、

それがただリフレインだからという理由で機械的に付け加えられたかのように思える。その結果、意味を持たなくなった呪文のように見えるこの問題のリフレイン ‘Let all things pass away’ は、その唐突さのせいで、Heart の切実な思いが込められている第3スタンザの残りの部分が意味しているところから、それてしまうのだ。とすれば、‘Let all things pass away’ は “What’s the meaning of all song?” の答えになりきれない。さらにもしこのリフレインがその言葉通りすべてを押し流し、それによってすべてを支配するのであれば、その言葉が唯一存在するリアリティーであるかのように残ってしまい、すべてのものが流れ去ることにはならないだろう。

地の部分とリフレイン、一つの詩のなかで二つ以上の声を扱うことがこの決定的瞬間を作り上げる。三つのスタンザに付与されたリフレイン ‘Let all things pass away’ は、この詩の中で言葉こそ変わらないがそのトーンを変える。今までに手に入れて来たものをすべて投げ出す高貴な仕草が、不愉快に感じられるようになるのである。国家であれ詩であれ何であれ、何かを得るために捧げてきた犠牲の量が多ければ多いほど、その「何か」など何の意味もない、捨ててしまえという声が一層激しく、一層の迫力をもって響くのである。この第6セクションは人間が成し遂げて来たことに意味を認めるか認めないかの葛藤、その重要さと無意味さとの間の葛藤、勝利の維持とその放棄との間の葛藤を描きながらも、もろもろの価値や意味の否定を迫るリフレインで詩を終わらせることによって、作品 “Vacillation” のひとつの極致をなしていると考えられる。

### 3. コンフリクトふたたび

第6セクションのリフレイン ‘Let all things pass away’ の響きに抵抗するかのように、“Vacillation” 第7番目の部分ではダイアローグの形式をとって、正反対の二つの状態をもつものの対立が最も明らかなかたちで現れる。この第7セクションでは、ダイアローグという形式と整ったカプレットの力で、SoulとHeartは、それぞれの本質的部分をあらわにする。SoulはHeartに “Seek out reality, leave things that seem” (72) と命令する。炎に焼かれて罪を拭い去った後の生が reality であり、生まれて来た者すべてが負っている原罪に汚れたままのこの世の生の営みは “things that seem” つまり仮象のものだというわけである。これに対してHeartは “What, be a singer born and lack a theme?” (73) と答え、さらに “What theme had Homer but original sin?” (77) と切り返す。詩人と

生まれたからには、ホメロスのように、原罪をテーマとするしかないではないか、というわけだ。これはホメロスの文学上のテーマが原罪であって、これをホメロスが長々と論じていると言う意味ではない。それではホメロスがキリスト教文学になってしまう。そうではなく、ホメロスの目は彼岸の国ではなく、此岸の国、この世界に向けられていたではないか、と言っているのである。

対話形式を取った第7セクションでは、Soul と Heart は正反対の意見を持つ相手の存在を意識し、相手を征服しようという野心をいだきながら、それぞれの主張を貫き通す。ダイアログという形式では相反する要素間の緊張の度合いが対立構造の生命力の指標であろう。ではダイアログを形成する片方の要素が失われた場合、つまり作品“Vacillaion”でいうと文体がダイアログ（第7番目の詩）からモノログ（第8番目の詩）へと移行した場合、どのような状態になるだろうか。イエイツは対立するものをどのように扱っているのだろうか。

第8セクションで初めて名前が出るフォン・ヒューゲルを、ナレーターは自分の想像上の対話の相手としている。“Vacillation”を含めてイエイツのさまざまな詩のマニュスクリプトを研究したブラッドフォード（Bradford）が、フォン・ヒューゲルとの想像上の会話を作り上げたことが、第2稿での最大・最上の出来事だと言っているように、<sup>9</sup>これが第8セクション全体の劇的雰囲気を高めていることは明らかだ。ナレーターにとってじつは大切なのだが、己れの身を賭けるものとは異なるもう一つの価値を体現している相手を、“we”という言葉で仲間であるかのように扱う。しかし、その相手であるフォン・ヒューゲル、君と決別せねばならないのか、と問いかけながらも、この事実を確かめるような言葉で、第8セクションは始まる（“Must we part, Von Hügel, though much alike, for we / Accept the miracles of the saints and honour sanctity?” [78-79]）。最終的にはフォン・ヒューゲルとは袂を分かつねばならないことは分かっている。分かっているからこそ、ナレーターであるイエイツは、語り的手段として虚構の会話を作り上げねばならない。だが、それはモノログの決定的な不安定さを示す行為でもある。

この第8セクションにおいて、結果としてナレーターは半球を失った地球の上に立っているという有り様になるのだが、にもかかわらず、ナレーターはこう宣言する。

..... I—though heart might find relief  
 Did I become a Christian man and choose for my belief  
 What seems most welcome in the tomb—play a predestined

この部分には注目したい点が二つある。言葉の使い方 (diction) と文の構成だ。ブラッドフォードも指摘しているように (133-34), イェイツが彼の理解したキリスト教を拒絶するのに際して、自らの演ずべき役割を “predestined” と形容していることに大きな意味がある。“Predestined” はカルヴァンの予定説につながる言葉である。ここでナレーターであるイェイツは、救われなくてもいいから、詩人として生き抜くという己れの意志が、神意によって決定されていたものであるかのような書き方をしているのである。ここでは、人間の意志がついに神の意志をこえられないことを皮肉にも示す、というより、私の役割は神意によって定められたといえるほどに神聖であると語る詩人イェイツの強い自負心を感じさせる。このような言葉を組み合わせることによって、神意の神聖さが逆に正確に伝わってくるように思う。次に文の構成をみると、この後に、“Homer is my example and his unchristened heart” (87) がくるわけだが、この部分は、“I . . . play a predentined part” という自らの運命を自覚し、これを受け入れることを確認する一句の間に、though 節によって heart の迷いが一ぱいにつめこまれている。迷いのなかで、ナレーターは “a modern saint” (83) ともしうべきフォン・ヒューゲルではなくてホメロスのほうを選ぶ。“So get you gone, Von Hügel, though with blessings on your head” (89) とフォン・ヒューゲルに祝福を送りながら。イェイツはこの最後の言葉によって現代の聖人に敬愛の念を表す。と同時に、詩人が聖人に祝福を送るのだということをも示している。イェイツが引き受けた役割は、聖人になることでなくて、聖人になれない、と同時に聖人にはならない詩人として、聖人をうたうことであった。このようにして、最後まで愛用することになる “heart” という言葉に己を託すのだ。

イェイツは、対立するものの絶えざる葛藤をありとあらゆるものの中に見いだそうとしていた。これはほとんどイェイツのオブセッションのようである。しかし、イェイツにあって真に対立していたのは、すべてのことがまるで魔法にでもかかったかのようにときほぐされて、世界がなにか一つのもので言い表すことができるとする世界観と、謎が謎として、神秘が神秘として濃のように残ってしまうのでどうしても世界は一つのもので言い表せず、だから、世界全体が対立する要素で成り立っていてそれらが争っているとする世界観なのだ。簡単にいえば、この世、あの世をふくめて世界にはコンフリクトがあるとするのか、それともコンフリクトは無くなり、何か究極の融合がおこるのか、ということである。これについてリチャード・エルマン (Richard Ellmann) が繰り返し語っている。

I think he saw with increasing sharpness the clash between the urge to have done with fine distinctions, subtle passions, and differentiated matter, and the urge to keep them at all costs.<sup>10</sup>

コンフリクトの源である “fine distinctions, subtle passions, and differentiated matter”, こういったものを絶やしてしまおうとする衝動と、それらを何と少しでも保ち続けようとする衝動、この二つの衝動のぶつかりをイエイツは年を経るにつれますます鋭い目で見つめていたのだ。ありとあらゆるものなかのコンフリクトをすべて切り捨てようとする衝動は、第6セクションのリフレイン ‘Let all things pass away’ に集約されているのだが、この衝動を一方の極として “Vacillation” は成り立っている。そして一方、様々なコンフリクトをあえて作り出し、それを保っておこうとする努力が作品全体に、もちろん第6セクションのなかにも、みられるのである。

“Vacillation” には必ず、一つのものだけでなくそれとは正反対のものが不可避的に存在するものとして描かれる。“Vacillation” においてイエイツが選んだのはホメロスただひとりではないといえるのは、こういう理由からである。ホメロスかフォン・ヒューゲルかという二つの選択肢から一つを選ぶことが本質的な問題となっているのではない。二者択一のうちの二者を選ぶことで、あるいはまた、相反するものの合一を何らかの方法で行ってそれで解決とするのか、そうではなくて、相反する二者を闘わせ続けるのか、という問題が問われているのである。イエイツがこの作品に表しているのは、コンフリクトの不可避性なのだ。

## むすび

“Vacillation” の生まれるひとつの契機となった問題にもう一度たち帰って言えば、イエイツはこの作品において肉体を全面的に肯定しているのでもなければ、靈魂の領域にかたよっているわけでもない。娼婦クレイジー・ジェーンに厳格なるジャンセニストが対抗するという図式は皮相である。肉体に救済を求めることにたいして、蒼白くも厳かなジャンセニズムの掟をもって対することは、肉を俗、靈を聖とみなす一般通念に則ったやり方に過ぎない。このような通念はすでに一連のクレイジー・ジェーンの詩によって無効になっている。おそらく、肉体のみに神聖さを見るのは誠実ではない、肉体にそればかりを見

ることはやはり出来ないというのが、本当の出発点であっただろう。この苦い思いが、多少冗談めかしてはいるが、“take to religion,” 宗教のほうをとるかもしれないとの言葉となった。ところが、“Vacillation”においてイエイツは再度、宗教家を拒絶して、ホメロスを礼讃する。ただし、ホメロスを手放して礼讃しているのではなく、また宗教家を完全に否定しているのでもない。なぜならキリスト教以前のホメロスの心に戻ることも、キリスト者フォン・ヒューゲルに従うことも、己のもつ衝動として互いに真理の一部であることをイエイツが認めざるをえなかったからだ。

靈魂と肉体とであっても、詩人の鑑ホメロスとローマ・カトリシズムを代表するフォン・ヒューゲルとであっても、互いに真理の一部であるようなそんな二つのもののうちの一方を取り他方を捨てるなら、この詩人の内部にある何らかの生命感が失われてしまう。さらにまた、イエイツは無理な方法で相反するものを合一させようとしているのでもない。アッティスを奉じて靈と肉との相剋の超克を図るか、はたまたいっそのことすべてを流し去れと一言つぶやいて虚無に赴いてみるか。そのいずれもが、コンフリクト解消への途を示しながら、逆にイエイツの内面の真のコンフリクトを誘い出すのである。対立するもの間のコンフリクトを解消しようとする衝動と、そのコンフリクトをあくまでコンフリクトのままにしておこうとする衝動との間のコンフリクトをこそイエイツは描く。これがイエイツの詩における基本的な原理ではないか。イエイツは作品においてさまざまなレベルのコンフリクトを乗り越えようとするのではなく、どうしても残存してしまう様々なコンフリクトを、すすんでというよりはむしろそうせざるをえないことを悟ったうえで、作品に表現しようとする。このようにして、イエイツの作品には独自の活力が生まれているのである。

## 注

\* 本稿は日本英文学会中国四国支部第49回大会（1996年10月26日、於香川大学）における発表原稿に加筆修正したものである。

- 1 Allen Wade, ed., *The Letters of W. B. Yeats* (New York: Macmillan, 1955) 798.
- 2 David Rogers, “Yeats and Von Hügel: A Study of ‘Vacillation,’” *Yeats: An Annual of Critical Textual Studies* 6 (1988): 90-164.
- 3 イエイツはこのころ、フォン・ヒューゲルからではないが、実際にカトリックへの改宗を勧められていた。当時の様子については Rogers 論文125-26ページを参照のこと。
- 4 W. B. Yeats, *Explorations* (Selected by Mrs. Yeats. New York: Macmillan, 1962) 305.
- 5 “. . . my mind had been full of Blake from boyhood up and I saw the world as a conflict . . .” (W. B. Yeats, *A Vision* Rev. ed. [1937; London: Macmillan, 1956] 72).



- 6 Richard Finneran ed., *W. B. Yeats: The Poems* (1983; rev. ed., London: Macmillan, 1989). 本論文での Yeats の作品からの引用は全てこの版からとし、本文中に行数を括弧に入れて示す。
- 7 この“he”を詩人イエイツそのひと同一視する解釈には賛成しかねるところがある（例えば Richard Ellmann, *Identity of Yeats* [London: Faber & Faber, 1954], 172, Rogers 143-44, 等）。永久に巡りくる春の象徴となったアッティスにイエイツが興味を抱くのは分かるが、もともと神話に現れるアッティス、つまり、若さの真っ只中にある性的機能を剥奪されたまま永久に時間を止められたアッティスに帰依する者にイエイツが自らを同一視しようとしたとは考えにくいからである。たとえば1906年に書かれたエッセイ“Discoveries”には“an eternal art”を求める artist と“his own eternity”を求める saint とを区別していることを考えると、ここの“he”をイエイツが自分と同一の者とみなすとは思えない（*Essays & Introductions* [London: Macmillan, 1961] 286）。イエイツがこのような俗界人間界を離れた人物と artist である自分とのある種の共通点は認めていたとしても。
- 8 鈴木弘氏はこの行を「歌などなんの意味があるものか」（『W. B. イエイツ全詩集』北星堂, [1982] 157頁）と訳している。私はあえて疑問文としてこの一行を読んだが、もちろんこの詩句のニュアンスは「歌などなんの意味があるものか」に限りなく近いと思う。その前行の“the gaudy moon”という言葉もやや自嘲的である。
- 9 Curtis Bradford, *Yeats at Work* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1965) 133.
- 10 “Preface to the 1979 edition” in *Yeats: the Man and the Masks* (1948; Harmondsworth: Penguin, 1987) xxix-xxx. 同じ言葉が *Four Dubliners* (New York: George Braziller, 1987) 62 にみられる。



## “Red Leaves” 考—二つの世界の間で—

沖野 泰子

### SYNOPSIS

Faulkner's “Red Leaves” is composed of the dual worlds: the Indians' world vs. Black slaves' world, the city vs. the country, Civilization vs. civilizations, and Europe vs. America. In contrast to the relationship of the Indian to the city, civilizations and Europe, and the consequent meaninglessness of his existence, in the Blacks' world the country, Civilization and America are shown as an integral part of their existence. This composition has important meaning when we analyze this story. It will illuminate the matter of death and rebirth.

The Negro, Issetibbeha's body servant, seems to belong to both of these worlds. Though he is black, he is forced to follow his master to the grave according to the Indians' convention. Early in the story, despite his lack of self-awareness, he tries to escape. But gradually he recovers his real self, and eventually he realizes that he does not want to die. In this paper we will discuss these dual worlds and the process of the Negro's developing self-awareness to show Faulkner's ideas about the possibility of death and rebirth.

### 序

“Red Leaves” という題はインディアンを示しています，と作者 William Faulkner が語ったことがあるように，この物語はあるインディアンの部族の衰退をめぐる物語である。<sup>1</sup> その衰退の原因が白人の持ち込んだ文明であることは従来指摘されてきたところであり，確かに，物語の大部分はインディアンに関する描写と酋長 Issetibbeha の側仕えの黒人に関する描写に費やされている。<sup>2</sup> しかし，この物語はその隠された構図を印象づけるかのように，“The two Indians crossed the plantation toward the slave quarters.” (313) という第一文で始まり，物語が二つの世界からなることが暗示される。<sup>3</sup> 二つの世界とはインディアンの世界と黒人の世界であり，その間に空間があるという構図が浮かび上がるが，この二つの世界の対峙という構図が物語の中で重要な意味をもってくる。二つ

の空間の対峙は、単にインディアンと黒人という組み合わせに留まらず、都市と自然、必要不可欠ではない文明と最低限の文明、ヨーロッパとアメリカといった対比もここに含まれる。<sup>4</sup> これらの対比を物語のテーマの一つである生と死の問題に重ね合わせれば、生と死の問題をさらに浮き彫りにすることができるであろう。

またインディアンの酋長 *Issetibeha* に仕える無名の側仕えの黒人は、この二つの世界を行き来する。黒人でありながらインディアンに近い暮らしをし、そのために殉死という形で死を受け入れざるを得なくなるのだが、二つの世界の間で生きてきた黒人は生と死の間で、恐れ惑いながら、無意識のうちに本来の姿を取り戻していく。結論を先取りして言うならば、Faulkner はこの側仕えの黒人を通して、死と再生の可能性を提示しているのである。以下、二つの世界を分析しながら、従来指摘されてきたような黒人の死への恐怖、生への渴望だけでなく、死と再生の可能性をも提示することが Faulkner の意図であったことを明らかにしたい。<sup>5</sup>

## 1 インディアンの世界

まず最初にインディアンの世界について検討し、この世界と結び付けられて描かれているものが何であるか考えてみたい。物語の最初に出てくる二人のインディアンの様子が “They were both squat men, a little solid, burgher-like . . .” (313) と描写されている。顔の表情には “a certain blurred serenity” (313) が見受けられ、腹が出ていて (“paunchy”), 活気もなく、緩慢な動きを感じさせる。“burgher-like” という言葉も、このインディアンが、もはや自然に溶け込んでいた昔のインディアンではないことを示している。そこには都市の波が押し寄せているかのようだ。さらにインディアンは黒人を奴隷にし、汗を掻くと身体に良くないという理由で、労働は黒人任せにしている。この物語に登場するインディアンは Chickasaw 族で、この部族は本来農業に長けた部族であるが、ここではもはや本来のインディアンではなくなった様子が描かれている。<sup>6</sup>

またインディアンは白人の行為を模倣し、土地を開墾して穀物を栽培し、黒人を育てて売ることにより、金を得ている。要するに経済活動を行うのである。インディアン自身が、“We must do as the white men do.” (319) と言う。しかしそれによって得た金の使いみちがわからない。例えば親族会議である男が、その金はどうするのかと問うと、“They [Indians] thought for a while. ‘We will see’ . . .” (319) という反応を示す。しゃがみ込んだインディアンは

“profound, grave” (319) と形容されるあたり、この問題が彼らの重荷になっていることをうかがわせる。黒人を白人から「押しつけられた」(“foisted”) (323) インディアンは、白人と同じようにしなければならないと思ひ込み、そして得たものは無用の長物である。インディアンの世界に入り込んできた文明は、彼等にとっては不要の文明、必要不可欠ではない文明である。

かつてインディアンは自分たちの風習を持っていた。それを Three Basket は、“In the old days, there was the good way. But not now.” (314) と言う。ネイティブ・アメリカンは概ね死を単なる肉体の死として捉え、死後の世界も生前と同様の生活が続くと考え、身の回りの品などを遺体と一緒に埋葬していた。<sup>7</sup> 酋長の側仕えの殉死は、自然と共生していた時代には意味のあるものだったのだ。しかし皮肉にも Three Basket が、いい風習は今はない、と言ったことからもうかがえるように、物語の中ではすでに風習は形骸化してしまっている。例えば Issetibbeha の葬式にやって来て、側仕えの黒人が捕まるのを待つ人々の様子は、祭りを楽しんでいるようにさえ見える。御馳走を用意し、着飾って来るのである。一見死後の世界へ旅立つ者に対して礼を尽くしているかのようにも見えるが、服装に目を向けるとそうでないことが明らかになる。彼等が身に装っているものはかつてインディアンが身につけていたものではない。語り手が “stiff European finery” (331) と述べているように、服装にも都市の波が押し寄せているのである。そして “stiff” という語から、インディアンがこの状態に馴染めずにいることが読み取れる。

ところで、酋長の Doom は若い頃 New Orleans へ旅行をし、そこから妻を連れ帰った。二人間の子供が Issetibbeha だが、都会の血が混じっているためか、生まれつき息切れがするたちで健康体とは言い難い。一方、Issetibbeha の最初の妻は土地の美しい女で “the broad, solid thighs, the sound back, the serene face” (321) の健康そうな女として描かれている。ところが Issetibbeha がこの妻をスイカ畑で見初めたとき、語り手はわざわざ次のように Issetibbeha の母のことを持ち出す。

... perhaps while he stood there watching the unaware girl he may have remembered his own mother, the city woman, the fugitive with her fans and laces and her Negro blood, and all the tawdry shabbiness of that sorry affair. (321)

こうして Issetibbeha の母のもつ都会性が強調され、彼の体内を流れる都会の血を意識させる。さらに “fans and laces” という優美なはずのものが、駆け落ち事件を思い出させることによって、逆に退廃のイメージを強調することになる。

Issetibbeha の母と妻を同時に描くことで、都市と自然の対比が意識させられる。

そしてこの母の描写の直後に、Issetibbeha の子 Mocketubbe が生まれた描写が続く。その “Within the year Mocketubbe was born; even at three he could not get his feet into the slippers.” (321) という描写からもわかるように、Mocketubbe は生来愚鈍であるばかりか、25歳で水腫を患う。このようにインディアン三代の酋長である Doom, Issetibbeha, Mocketubbe は、代が進むにつれ、体に問題を抱えるようになってくるが、そこには血が汚れたような、何か遺伝的なものがあるかのように描かれている。そしてこの過程が都会や必要不可欠ではない文明が入り込んでくる過程と一致するのである。

この都会、必要不可欠でない文明などを象徴するのがヨーロッパである。例えば、語り手は Doom が出かけて行った New Orleans を、“... New Orleans was a European city.” (317) と呼んでいるばかりか、この町で Doom の後見人になるのは、フランス出身の怪しげな貴族である。また Issetibbeha が外遊に出かけたのもヨーロッパ、それもパリであった。この地から Issetibbeha は、必要不可欠ではない文明を象徴するベッド、燭台、赤い靴などを持ち帰る。が、これらのものはインディアンの世界では何の役にも立たない。Issetibbeha の妻はベッドを使うのを嫌がり、燭台は隅へ追いやられ、赤い靴は Issetibbeha のサイズに合わない。ヨーロッパに行く以前、靴を履いたことのない Issetibbeha にとって、踵のある赤い靴は、必要不可欠でない文明以外の何ものでもないのだ。Doom が家の代わりに持ち込む座礁した蒸気船も、その荒廃ぶりが強調される。かつてアメリカへ渡った人々が置き去りにしてきたはずの都会が、文明が、ヨーロッパが、自然の中へ、最低限の文明の中へ、アメリカへ入ってきて、再び無用のものとなったのである。

ヨーロッパと結び付けられる文明がインディアンに及ぼす影響は、赤い靴と Mocketubbe を考察することで明らかになる。この靴が原因で父親の Issetibbeha を殺したのだらうと推察されるほどに、Mocketubbe は赤い靴に執着する。物語の中の現在に初めて具体的に登場する場面での、この赤い靴を履いた Mocketubbe の姿は、まるで死人同然に見える。“Mocketubbe did not move.” (326) といった表現が3頁余りの中に何度も繰り返される。しかもこの描写は Mocketubbe の全体像から、カメラの焦点を絞り込むように、顔へ目へと少しずつ狭められていき、さらにその様子は、“... upon his supine monstrous shape there was a colossal inertia, something profoundly immobile, beyond and impervious to flesh.” (327) とも述べられている。まさに肉の塊、人間離れした姿と化しているのである。Mocketubbe の動かぬ姿が強烈に印象づけられ、“He might have been dead himself.” (326) という言葉が現実味を帯びてくる。

それかあらぬか赤い靴を脱ぐと、Moketubbe は喘ぐように息をし始めるのだ。それを語り手は、“Moketubbe began to pant, his bare chest moving deep, as though he were rising from beyond his unfathomed flesh back into life, like up from the water, the sea.” (327) と告げている。まるで水底から生き返ったかのような描写だが、実は Moketubbe は側仕えの黒人を追いかける間、靴を脱いだり履いたりするたびに、生死の間をさ迷うかのように描かれている。赤い靴と水死が結びついているから、この靴は例えばノアの洪水のような、死もしくは滅亡を象徴する水の過剰を表していると言えよう。また反対に水底からの甦りは、しばしば水による浄化、再生を意味するが、Moketubbe は果たして本当に再生していると言えるのだろうか。

赤い靴そのものは、“... the cracked, frail slippers a little shapeless now, with their scaled patent-leather surfaces and buckleless tongues and scarlet heels ... carried through swamp and brier...” (335) と描写されている。古い靴の表面が鱗状になるのは、一つには乾燥のためである。つまり、水分が不足しているためだ。実際に履いて歩き回ったわけでもなく、袋に入れて大切に扱われてきたにもかかわらず、赤い靴は痛んで水の枯渇を示すものになってしまった。このように赤い靴は水の過剰と枯渇を同時に表しているのだが、この場合過剰も枯渇もともに荒廃を象徴するものである。この靴を片時も離さず Moketubbe は側仕えの黒人を追う。この行為をインディアンは狩りと同じに考えているが、語り手はそれを“the crime and its object” (335) と述べている。慣習が無意味になって、罪とみなされているのである。さらに語り手は、“To Moketubbe it must have been as though, himself immortal, he were being carried rapidly through hell by doomed spirits which, alive, had contemplated his disaster, and, dead, were oblivious partners to his damnation.” (335) と述べている。一見復活しているように見えている Moketubbe は救われなどしない。それどころか地獄に落ちていく運命にあるのだ。彼自身も周りのインディアンも、自分たちを破滅に追いやっているのが、赤い靴が象徴する必要不可欠ではない文明だということに気付いていない。

## 2 黒人の世界

物語の中で黒人たちが登場するのはわずかな部分にすぎないが、インディアンの世界に対峙している黒人の世界の検討が重要である。そこで、このセクションでは黒人の世界を考察の対象としたい。物語の冒頭で黒人奴隷の居住区は、

“There was no sign of life . . . . Although it was noon, the lane was vacant, the doors of the cabins empty and quiet; no cooking smoke rose from any of the chinked and plastered chimneys.” (313) と描かれ、食事ときにもかかわらず、火の気のない、空虚な印象を与えている。“There was no sign of life.” という表現は、人気がないという意味だが、文字通り生命のしるしがまったくないとも読め、一見黒人の世界が死と結び付いているかのような印象を受ける。しかし、居住区が静まり返ったのは Issetibbeha が死んでからのことであり、黒人が一箇所に集まっていたためである。そのときの様子は “They seemed to be musing as one upon something remote, inscrutable. They were like a single octopus. They were like the roots of a huge tree uncovered, the earth broken momentarily upon the writhen, thick, fetid tangle of its lightless and outraged life.” (315) と述べられているが、これは暗い小屋の中で、まるで一つの生命体のように集まっている黒人の一体感を、さらには、抑圧され傷付きながら耐え忍んでいる黒人の姿を描き出している。少なくとも黒人は皆、Issetibbeha の死に伴う仲間の殉死を、また突然突きつけられた死に対する恐怖を鋭敏に感じ取っている。ところが側仕えの黒人を犬や馬と一緒に、単なる持ち物として埋葬しようとするインディアンは、何の痛みも感じていない。インディアンとは違って、黒人は死を直視し命に対して敬意を払うのである。

また黒人はインディアンとは対照的に、昔からの慣習を守り続けている。黒人が集まっていた集会場のような小屋では儀式が行われるが、この儀式は月の満ち欠けに合わせ、また夜には川原へ移動して行われる。語り手が、“The drums began after dark. They kept them hidden in the creek bottom. They were made of hollowed cypress knees, and the Negroes kept them hidden; why, none knew. They were buried in the mud on the bank of a slough. . . .” (328) と述べているように、黒人は儀式の象徴である太鼓を川原に隠すのだが、その理由は誰も知らない。要するに自然と強く結び付いた昔からの慣習なのだ。もちろん月の満ち欠けは生と死の繰り返しを暗示するが、太鼓の素材である “cypress” はギリシャ・ローマ神話では、生と死、再生を象徴する。<sup>8</sup> 黒人も、“Let us let the drums talk.” “Yao. Let the drums tell it.” (328) と言って Issetibbeha が死ぬ前の晩にこの太鼓を打ち鳴らす。<sup>9</sup>

だがこの太鼓の音を聞いて側仕えの黒人が思い浮かべたのは、死ではなく生であった。

The only fire there would be the smudge against mosquitoes where the women with nursing children crouched, their heavy sluggish breasts nipples full and



smooth into the mouths of men children; contemplative, oblivious of the drumming, since a fire would signify life. (329)

子供に乳を与える行為はもちろん生命を支える行為であり、生を象徴する。黒人たちは農園で懸命に働き、その結果インディアンの生活の糧を産み出すが、これもまた他者の生命を支える行為と言えよう。さらに火は生を象徴すると語り手は言う。たとえ小さな火であろうとも女たちは死を越えた生を見つめているのである。インディアンの世界から離れた、自然の中に存在する太鼓は黒人にとって儀式的核を成し、これが生と結び付けて描かれている。明らかに語り手は黒人の世界と、自然、原始的文明、生を意識的に結びつけていると言える。

### 3 側仕えの黒人

最後に、二つの世界を行き来する側仕えの黒人について、その変化を中心に論じてみたい。物語の初めでは、側仕えの黒人は黒人でありながらインディアンの世界にも属していた。インディアンによればこの黒人は、仲間が畑で汗を掻いているときに、日陰で酋長に仕えていた(326)。また、“Issetibbeha is dead. . . . The one who held the pot for him, who ate of his food, from his dish, is fled.” (326) という言葉は、酋長の皿から直接食べ物を分けてもらうこの黒人が、酋長 Issetibbeha といかにちかしいところに居たかを示している。汗水流して畑で働くことは自然と共にある、原始的文明を意味する。仲間の黒人たちがこちら側に属しているのに対し、側仕えの黒人は経営の側、つまり必要不可欠ではない文明の側にも属していることになるのである。自分で望んだわけではないが、結果として側仕えの黒人は黒人とインディアンの世界を行き来していることになる。

Issetibbeha が死の床に就いていたとき、馬小屋の屋根裏に隠れていたこの黒人は、“‘Who not dead?’ ‘You are dead.’ ‘Yao, I am dead’ . . . .” (329) と静かに自問自答し、自分で自分が死んだと考えている。また逃亡途中で黒人たちの儀式に姿を見せた側仕えの黒人は、“Eat, and go. The dead may not consort with the living; thou knowest that.” (332) と黒人の長(“the headman”)から言われる。この時すでに黒人たちは、側仕えの黒人を死んだもの、あるいは死すべき運命のものともみなし、自分たちの中に受け入れようとはしていないのである。これに対して側仕えの黒人は、“Yao. I know that.” (332) と答えており、先の引用“Yao, I am dead.” (329) と併せて考えれば、この段階で側仕えの黒人自身が

死を受け入れ、黒人の世界から離れているように見える。これは別の黒人と出会ったときの “. . . he passed another Negro. The two men, the one motionless and the other running, looked for an instant at each other as though across an actual boundary between two different worlds.” (331) という描写にも、はっきりと示されている。

では側仕えの黒人はどの段階からこうなってしまったのだろうか。馬小屋に隠れているとき、側仕えの黒人は以前、故郷アフリカからアメリカへ連れてこられる船中でネズミを食べたときのことを思い出す。

Once he [the Negro] had eaten rat. He was a boy then, but just come to America. They had lived ninety days in a three-foot-high 'tween-deck . . . hearing from topside the drunken New England captain intoning aloud from a book which he did not recognize for ten years afterward to be the Bible. Squatting in the stable so, he had watched the rat, civilized, by association with man reft of its inherent cunning of limb and eye; he had caught it without difficulty, with scarce a movement of his hand, and he ate it slowly, wondering how any of the rats had escaped so long. At that time he was still wearing the single white garment which the trader, a deacon in the Unitarian church, had given him, and he spoke then only his native tongue. (330)

側仕えの黒人がこの時聞いたのは、まさにヨーロッパ文明の精神的支柱である聖書の文言であり、酔ってそれを口にしているのは New England 出身の船長である。Faulkner の皮肉は明らかである。当時アメリカの中で文明化されていたであろう地域を皮肉り、さらに文明化 (“civilized”) の結果をネズミに体現させているのだ。身を守る術もなく、本来備わっているはずの能力を無くし、緩慢な動きのネズミは、物語のインディアンと重なり、文明のもたらす負の結果を示し、インディアンの未来が如何なるものかを暗示することになる。そしてこのネズミは、側仕えの黒人のアメリカにおける未来をも示していたのである。

だが英語を解せず、母国語しか話せない側仕えの黒人は、ネズミとは対照的に、まだ文明化された世界に身を置いていない。黒人の服装にもそれが示されている。彼のお仕着せの服を語り手は “the single white garment” と述べるが、これは文字通り身を被うだけのものだったかもしれない。さらにどのようにも染まる白という色から、黒人の変化の可能性も感じ取れる。はたせるかな物語の現在に出てくる黒人は、明らかに以前の自分から大きく変化している。英語も話せるようになり、別の服を身につけている。この服は、“He was naked now,

save for a pair of dungaree pants bought by Indians from white men. . .” (330) という描写からもわかるように、文明の産物であり、経済活動を通して手に入れられたものであり、側仕えの黒人が都会、必要不可欠ではない文明、ヨーロッパといったものと結びつけて描かれている。さらにこの黒人が身につけているお守りは、二つの世界の間を行き来する彼の立場を象徴する。“The amulet consisted of one half of a mother-of-pearl lorgnon which Issetibbeha had brought back from Paris, and the skull of a cottonmouth moccasin.” (330) という描写にみられる蛇の頭蓋骨は、黒人が自分で殺して食べた蛇のものである。つまりこのお守りには、都市と自然、必要不可欠でない文明と最低限の文明、ヨーロッパとアメリカといった相対する世界が同時に存在しているのである。

だが、やがて側仕えの黒人は川原で文明の産物であるズボンを脱ぎ、泥を身体に塗りつける。物語の中で太鼓の番をする黒人の少年が虫除けに泥を塗りつけるように、自然と同化し、身を守る。自然に還るのである。土に還るということは一方で肉体的死を連想させるが、少なくとも服を脱いだ側仕えの黒人が今やインディアンの世界と一線を画していることは明らかだ。これは黒人があるインディアンと森で面と向き合ったときの両者の相違に、如実に現れている。黒人の様子は“gaunt, lean, hard, tireless and desperate” (334) と、インディアンの様子は“thick, soft-looking, the apparent embodiment of the ultimate and the supreme reluctance and inertia” (334) と描かれ、動きもせず、音も立てないインディアンの目の前で、黒人は凄まじい音を立てて逃げていく。この動と静の鮮やかな対比は、それだけで側仕えの黒人の生に対する執着の強さを浮き彫りにする。直前の段落では“... the Negro, the quarry, looked quietly down upon his irrevocable doom. . .” (334) と、一見運命を甘受したかのようにみえる側仕えの黒人の真の思いは行為となって現れる。

そしてついに側仕えの黒人は、本当は死にたくなかったことに気付く。

“It’s that I do not wish to die,” he said. Then he said it again— “It’s that I do not wish to die” —in a quiet tone, of slow and low amaze, as though it were something that, until the words had said themselves, he found that he had not known, or had not known the depth and extent of his desire. (335)

同じ言葉を二度繰り返しながら、ゆっくりとまるで正気に返るように悟りに到る黒人の思いが、それまで心の奥底に密かに封じ込められていたことが伝わるが、黒人にこれを悟らせるのが、毒蛇という自然の中の生き物であった。蛇に噛まれた側仕えの黒人の腕は腐ってきて、子供の腕より細くなってしまふ。肉

体的には滅んでいく運命にあるのだが、閉じ込められていた黒人の精神は自然によって都会や文明の呪縛から解き放たれ、その真の思いが明らかになるのだ。さらにこれをはっきりと示しているのが七日目の朝の描写である。

Dawn came; a white crane flapped slowly across the jonquil sky. . . .

Two Indians entered the swamp, their movements noisy. Before they reached the Negro they stopped, because he began to sing. They could see him, naked and mud-caked, sitting on a log, singing. They squatted silently a short distance away, until he finished. He was chanting something in his own language, his face lifted to the rising sun. His voice was clear, full, with a quality wild and sad. (338)

太陽が昇るときの空の色を黄水仙の色に喩えているが、鶴、水仙と言えどどちらも細く、垂直に伸びた姿を連想させる。引用の最初の文は、流れるような解き放たれた印象を与え、さらに朝日のイメージと相まって、大地から空への飛翔のイメージを孕むこととなる。そして黒人は歌を歌っているが、自分の国の言葉で、裸で、朝日に向かって歌う。インディアンのはげしさと対照的に、再生を象徴する朝日の光の中を流れる黒人の澄んだ歌声は、黒人の本来性、運命を前にした悲しみも示していると言える。今まで側仕えの黒人を取り巻いていたもろもろのものから逃れ、自分自身に、本来の黒人の姿に戻っているのである。ここには再生のイメージをも読み取ることができるのだ。

ところがいざインディアンに捕まって死が近付くと黒人はやはり平静ではいられなくなる。恐怖は嫌な臭いがするとインディアンは物語のセクション1で話しているが、捕まったとき側仕えの黒人もまた臭気を放っていた。外見は平静でも、潜在的に恐怖を感じているのである。そして物語は側仕えの黒人が死の目前に水を飲む場面で終わる。このとき黒人は、食べる、飲むという行為すらまともにならなくなる程の強い恐怖を感じ、目は落ち着きなくあたりを見回す。しかしこれが当然の反応であり、むしろ物語の中で黒人は徐々に本来の姿を取り戻していると言える。それは自分を取り巻く世界の変化と重なり、自分が本当に望んでいたこともはっきりと見えてきている。逃げるという行為を通して彼はインディアンとは一線を画したことになる。それと知らずに破滅へ向かっているだけのインディアンとは違っているのである。

## 結び

インディアンに捕らえられた側仕えの黒人は、インディアンの酋長の家へ連れて行かれるが、彼が水を欲したため、一行は井戸のあるところへ移動する。この場所は “He [the Negro] looked back at the house, then down to the quarters, where today no fire burned, no face showed in any door, no pickaninny in the dust, panting.” (340) と描かれているように、酋長の家と黒人の居住区の間にある。井戸はまさにインディアンの世界と黒人の世界という二つの世界の間であり、どちらの世界も見渡せる位置に存在しているのだ。そしてこの物語はそこで終わるのである。

着飾ったインディアンが滑稽なまでに辛抱強く見守る中、側仕えの黒人は水を飲む。その様子が落ち着かないのは、自らの真の思いに気付いた黒人の恐怖の程を考えれば当然である。

He [the Negro] dipped the gourd again and tilted it against his face, beneath his ceaseless eyes. Again they watched his throat working and the unswallowed water sheathing broken and myriad down his chin, channeling his caked chest. . . . Then the water ceased, though still the empty gourd tilted higher and higher, and still his black throat aped the vain motion of his frustrated swallowing. A piece of water-loosened mud carried away from his chest and broke at his muddy feet, and in the empty gourd they could hear his breath: ah-ah-ah. (341)

水は癒しや生を表すものだから、なおも水を求め続けるように高く高く上げられた瓢箪は側仕えの黒人の狂おしいまでの生への執着を表す。しかし命の源とも言える水を何とか飲もうとするその行為は空回りしてしまうから、黒人の死はどうしようもない圧倒的なものとして読者に示されている。だがここで、さらに黒人の身体を伝う水にも注意をしなければならぬだろう。この水は濁った煙に水が染み込むように、黒人の身体の表面で固まった泥を濡らしていく。潤していくのだ。そして水で緩んだ泥が身体から落ちれば、当然黒人の裸の姿が現れてくる。この時の黒人は、身体に泥を塗りつけたときの黒人とは内面的に明らかに違っている。“ah-ah-ah” という声は、真の思いに気付いた黒人の魂の叫びであり、ここに新たな何かが姿を現していると言えよう。Faulkner は、側仕えの黒人が死の恐怖故に気付かない、インディアンがその精神的愚鈍さ故に気付き得ない、死を越えたところにある何かを、読者に視覚的に示している。

つまり二つの対立した世界を同時に見ることのできる空間で、二つの世界を体現する黒人を通して死と再生の可能性が、同時に提示されているのだ。Faulknerは物語の構図を最後まで見事に生かし切っているのである。

## 注

\* 本稿は日本アメリカ文学会関西支部1月例会（1996年1月20日、於甲南大学）における発表草稿に加筆修正したものである。

- 1 Fredrick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University* (Virginia: UP of Virginia, 1995) 39. 物語の中で Faulkner はネイティブ・アメリカンを Indian と表している。本稿では物語中のネイティブ・アメリカンはそのままインディアンで表すこととする。
- 2 Lewis M. Dabney, *The Indians of Yoknapatawpha: A Study in Literature and History* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1974) 100-108.
- 3 William Faulkner, *Collected Stories of William Faulkner* (New York: Vintage, 1977) 313. なお作品からの引用はすべてこの版により、以下テキストの頁数は本文中の括弧内に記す。
- 4 文明の定義に関しては、フェルナン・ブローデルが定冠詞つきの単数形 (la civilisations) と、不定冠詞つきの複数形の文明 (des civilisations) に1819年頃移行したと述べている。単数形の文明とはあらゆる文明が分けあっている共同財産、人間がもはや忘れないもの、たとえば火や文字や植物栽培などをさすとしている。本稿ではこれを最低限必要な文明と考え、複数形の文明を必要不可欠ではない文明として扱うことにした。フェルナン・ブローデル、『文明の文法 I』松本雅弘訳（東京：みすず書房、1994）35-36.
- 5 Hans H. Skei, *William Faulkner: The Novelist as Short Story Writer* (Oslo: Universitetsforlaget, 1985) 194.
- 6 Carl Waldman, *Encyclopedia of Native American Tribes* (New York: Facts on File, 1988) 53.
- 7 Vine Deloria, Jr., *God Is Red* (Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 1994) 170-71.
- 8 アト・ド・フリース, "cypress", 『イメージ・シンボル事典』, 山下主一郎他訳, 6版, 1985.
- 9 世界中の葬式にしばしば太鼓はつきもので、「線や壁が空間を区分するのと同じく、打撃音は時間を中断し分割するように思われる。したがって、それは地位の一時的変化、特に死のような不可逆的な変化を有識化する自然的象徴である。さらに、太鼓の音は明らかに心臓の鼓動や生命のリズムと類似性がある。また同様に、死が中身のぬけた終局であることに、太鼓は共鳴しうる。」という興味深い指摘もある。ピーター・メトカーフ, リチャード・ハンティントン, 『死の儀礼』池上良正, 池上富美子訳（東京：未来社, 1996）98.

# 不毛な世界— “Mr. and Mrs. Elliot”

鷺 尾 順 子

## SYNOPSIS

*In Our Time* is Hemingway's early collection of short stories showing various ways of life and death observed from many points of view. It comprises sixteen stories and sixteen fragmentary sketches of war, bullfights, and so forth, that alternate throughout in the collection. “Mr. and Mrs. Elliot” is one of the longer pieces depicting the everyday life of a newly-married couple on their honeymoon. However, unlike the other stories, it does not seem to express the extremes of life and death. Moreover, the two short sketches, Chapters 9 and 10, which frame “Mr. and Mrs. Elliot” and appear to have no relation to the story, further confuse the matter. When the three pieces are read together, however, it is apparent that the world of the Elliots is strikingly sterile. The vivid and active tone of Chapters 9 and 10 constitutes a sharp contrast to the idle and empty atmosphere presented in “Mr. and Mrs. Elliot.” This contrast creates an emphatic effect and underlines the atmosphere of decay of the story in between. I would like to analyze “Mr. and Mrs. Elliot,” in conjunction with the sketches in order to explore the meaning it conveys in *In Our Time*.

## 序

“Mr. and Mrs. Elliot”は Hemingway の初期短篇集 *In Our Time* の中の一篇である。この作品はある実在の夫婦を諷刺し、いざこざを避けるために夫妻名を変更したとも、<sup>1</sup> 詩人 T. S. Eliot を揶揄しているとも言われている。事実、Hemingway は度々 “Eliot” を “Elliot” と誤って綴っていたらしい。また、かなり誇張された形ではあるが、Elliot 夫妻像に、当時作者自身の置かれていた状況が反映されているのも確かである。<sup>2</sup> いずれにせよ、一組の男女の日常生活を描いた短い文章である。ところが、この短篇の前後に置かれたスケッチにおいて、一見、彼らとは無縁の、生と死の交錯する闘牛の世界が繰り広げられている。そして、そのスケッチの生き生きと躍動感にあふれる様は、Elliot 夫妻の活気のない生活と対照的である。その上、“Elliot” という名前自体にもこの

作品世界の非生産性が暗示されている。Comley と Scholes は次のように述べている。

We agree that the allusion is to T. S. Eliot, but we don't think it is intended to be a personal slur quite as much as it is meant to invoke a puritan wasteland of impotence and sterility in which lesbian sexuality flourishes.<sup>3</sup>

つまり、Hemingway はこの作品を主に諷刺や揶揄を目的として書いたのではなく、むしろ、生と死の隣り合っている闘牛のスケッチに挟み、この短篇において日常生活の中に潜む死を何も生み出すことなく衰退していく夫婦を通して描こうとしたのではないだろうか。*In Our Time* を様々な角度から生と死を扱う短篇集と考える中で、“Mr. and Mrs. Elliot” は死の影のとらえにくい作品の一つではあるが、前後のスケッチに見られる闘牛の、手に汗握る状況は、夫妻の不毛な世界の実態を、一層はっきりと浮かび上がらせる働きを成している。また、この作品には、“If two people love each other there can be no happy end to it.”<sup>4</sup> という Hemingway の考え方が表われており、ある男女の別れを扱った“The End of Something”と共に、後に続く二つの短篇における二組の夫婦のはっきりとした形では示されていない不和を暗示する、序章的な役割も持っている。この論文では、前後のスケッチとあわせて検討しながら“Mr. and Mrs. Elliot”に描かれている世界の意味を考えていきたい。

## 1. スケッチ

The only place where you could see life and death, i.e., violent death now that the wars were over, was in the bull ring. . . .<sup>5</sup>

これは、Hemingway の *Death in the Afternoon* において述べられている彼の闘牛観である。この考え方を *In Our Time* の第9、10章のスケッチは明らかに反映している。わずか16行の第9章では場面の移り変わりが激しく、緊迫した様子が見えがえる。状況は最悪で、すでに二人の闘牛士が倒され、“kid”と呼ばれていることから推察できるように、まだ若くおそらく不慣れであろう闘牛士が、五頭もの牛と闘わなくてはならなくなる。その上、最後の牛は立派な牛で、“violent death”を遂げるのは「彼か牛かどちらか」というところまで追い詰められる。若者は、腕を上げるのもおぼつかないほど疲れ切っていて、五度しと



めそこなう。そして、やっと牛を倒すとその場に座り込み、胃の中のものを吐き出してしまう。観客の方も、最初の闘牛士が剣を持った手を刺された時には彼をやじり倒し、その非情性をうかがわせている。しかし、第二の闘牛士の、腹を刺されながらも気絶するまで狂ったように剣を求める不屈の姿には沈黙し、最後の若者が牛を倒し終えた時には、“... the crowd hollered and threw things down into the bull ring...”<sup>6</sup>と一転して歓声を挙げており、観客の無責任な姿は責任を果たした若者と対照的である。生と死が隣り合っているからこそ闘牛士の不屈の精神が際立ち、生命感あふれる文章となっている。

第10章で繰り広げられる光景も凄惨である。牡牛に腹を突かれ内蔵を引き摺った馬が、それでもなお追い立てられ、牛への突進を余儀なくされる。牛の方もそんな馬の様子に未来の自分を重ね合わせたのか、再度馬に攻撃を仕掛けるのをためらう。その牛の姿に「死」の急ぐことのない姿を見る説もあるが、<sup>7</sup>「死」を表す牡牛そのものにも逃れられない死の影が迫っている。残酷な場面を淡々と描くスケッチである。

## 2. Elliot 夫妻の関係

“Mr. and Mrs. Elliot”においても、スケッチの場面転換に似て、作品の舞台は、船の上、Boston, Paris, Dijon, Touraine とわずか4ページの間をめまぐるしく移動している。しかし、前後のスケッチの状況と異なり、Elliot 夫妻の生活自体はたいして変わることなく、むしろ、徐々に活気を失っていくようにも見える。旅をしても、二人には見知らぬ土地を活発に見てまわる様子はなく閉塞感が漂っている。Elliot 氏はまだ25歳と若く、時にその言動に幼さを感じることもあるのだが、弱々しく若者らしさに欠けている。夫人の方とはというと、元々40歳と夫より15歳も年長ではあったにせよ、年齢を感じさせないくらい若々しかった人が、旅行に出発したとたん一気に老けこんでしまい、Elliot の母親と間違えられるくらいになってしまう。双方共に、不安を抱えたままの出だしであり、夫婦の関係にどこか思わしくないところが隠されているのではないかと感じられる。

実際、この夫婦には奇妙なところが多い。夫人が母親と誤解されるエピソードでも、二人の関係は夫婦というより母子の姿で表現されている。

Cornelia [Mrs. Elliot] had said, “You dear sweet boy,” and held him closer than ever when he had told her how he had kept himself clean for her. Cornelia was

pure too. "Kiss me again like that," she said. (86)

この文は、作品中唯一会話文の使われている箇所なのだが、まるで母親が子供をあやしている様相を呈している。夫人は、純潔を守ってきた過去を誇らしげに訴える夫を胸にかき抱き、「かわいい子」と呼び掛けているのである。しかも、Hemingway の作品において、母親とその子の関係は概して良好とは言えない。

同じ短篇集に収められている“Soldier's Home”では、戦争で受けた心の痛手を抱えたままのHarold Krebsとそんな彼の精神状態を理解しないまま自分の価値観を押しつける母親のすれちがう会話が描かれている。その中で、母親が“I'm your mother. . . I held you next to my heart when you were a tiny baby.” (76) と母としての自分を息子に訴えかけているが、その母に抱かれた姿は Krebs にとって「吐き気」をもよおさせる図でしかない。二人の意識のずれをはっきりと認識させる場面である。Elliot 夫妻は親子の関係を連想させる態度をとりながらも、表向き、仲の良い夫婦に見える。しかし、Elliot夫人の求めるキスの仕方は、Elliot が誰かの話を聞いて真似してみたものであって、いわば借りもののキスでしかない。夫が妻への愛情に駆られてしたキスではないのである。夜の営みの方も“*They were both disappointed. . .*” (86) という表現が示すとおり、うまくいっていない。自らの“purity”を強調する Elliot 氏には、その不自然なまでの“pure”であることへの固執が、かえって性的不能の影をつきまとわせる結果となっている。彼のこの観念は、プラトニックラブの高潔さを目指しているらしく見えるが、実際は「精神的恋愛を重んじるような時代遅れのピューリタンの伝統」に縛られ、「肉体的及び精神的」に萎縮してしまっているのである。<sup>8</sup> 事実、彼にとって極めて不潔だと判断される男性との結婚を承諾する女性にいらぬ忠告をして、様々な問題を引き起こしてもいる。その時の彼の行動はアイロニカルに表されており、彼の考え方がいかに時代にあっていないか良くわかる。その上、彼の望む“pure”というのは単に肉体的な問題であって、精神的清廉を目指すものではない。女性と関係しなかったというだけで“clean life” (85) を送ってきたと主張し、それによって彼が妻に望むのと同じ精神的及び肉体的な清らかさを妻に与えることができるという彼の思いは、かえって夫婦間の心のきずなを軽視する彼の姿勢を明らかにしている。夫人も“pure”だったと表現されているが、それは、結婚するまで男性経験のなかった彼女の人生を伝えるにとどまっており、後に描かれる彼女と彼女の女友達の様子は、婚前、肉体的快樂を彼女が享受していた事実を、暗に示している。

結婚初日の夜、早々に夫人の方は寝入ってしまい、初々しさを望むべくもな

い状態にある。同じ夜、夫は寝つけずにホテルの中をうろつくが、帰ってきて自分の見てきた光景を夫人に話すきっかけも、散歩で感じた興奮を共有するだけの積極性も持たないまま終わる。つまり、二人はうまくいかない肉体的結合をキスの真似事や、母子のようにふるまうことで埋め合わせようと試みながらも精神的なつながりを積極的に求めるわけでもなく、コミュニケーションが不足している。

夫妻の肉体的なつながりがあまりうまく行っていない様子は、二人の、繰り返し子供をつくろうとする表現が使われていることから読みとれる。まず、物語は夫妻の努力を強調する文章で始まっている。

Mr. and Mrs. Elliot tried very hard to have a baby. They tried as often as Mrs. Elliot could stand it. They tried in Boston after they were married and they tried coming over on the boat. They did not try very often on the boat because Mrs. Elliot was quite sick. (85)

ここではいきなり“tried”という表現が5回も続けて使われており、かえって二人の熱意を滑稽に見せる効果をもたらす。ところが、物語の後半になると“*He and Mrs. Elliot tried very hard to have a baby in the big hot bedroom on the big, hard bed.*” (88) とそっけない一文が挿入されているだけになり、しかもそれまで周りの環境にあまり注意を払っていなかった営みが、暑くかたいベッドの上の不快感下での試みに変わってしまっている。つまり、夫妻の努力は“alienated labor”になっており、“... the Elliots' honeymoon becomes a *vía dolorosa*, with a station of suffering for each new try in each new place.”<sup>10</sup>と説明できる、楽しみのない苦痛に満ちた状態に陥ってしまっているのである。

### 3. 衰退の予感

Hemingway は、しばしば、景色の描写によって登場人物の心の状態を表現している。“The End of Something”の舞台は、かつて栄えていた製材所の跡地である。Nickと Marjorie が釣りをしにやって来た時、そこは“... there was nothing of the mill left except the broken white limestone of its foundations showing through the swampy second growth. . . .” (31) というほとんど何も残っていない状態になっている。この風景は、鬱々として口もきかない Nick の姿と相まって、これから迎える二人の破局を予感させる。しかし、一方で生い茂る二番生

えが、その別れの痛手からやがて立ち直ることを暗示している。“Cat in the Rain”や“Out of Season”では、雨や不安定な天気が夫婦の間の重苦しい雰囲気をつのらせている。

“A Canary for One”は *Men Without Women* の中の一篇だが、やはり風景によってうまく夫婦の心理を表わす作品である。あるアメリカ人夫妻の別居するために汽車でパリに向かう旅が、乗り合わせたアメリカ人の婦人との会話を通して描かれている。車窓から灰色の岩、ほこりをかぶった木々、油まみれの道路といった荒廃の気配を色濃く示す景色が見え、また、日暮れ時になると線路脇での火事の様子が、目的地に近づく頃には列車の衝突事故といった不幸な出来事が次々と目に入ってくる。それらは、あるいは夫婦のそれまで経てきた困難の数々を表わし、大きな穴があいて使いものにならなくなった車両は、修復不可能なこの夫婦の関係をほのめかす働きをなしているのかもしれない。しかし、そこまで深くこれらの車窓風景を夫妻に結びつけて考えなくても、こうした無惨な光景はどこか寒々しい印象を与え、最後に夫婦の不仲を直接説明する“*We were returning to Paris to set up separate residences.*”<sup>11</sup> という簡潔な一行のもたらす効果を高めている。また、風景もさることながら、客室の快適とは言い難い状況にも夫妻の心境が表れている。

It was very hot in the train and it was very hot in the lit salon compartment. There was no breeze came through the open window. The American lady pulled the window-blind down. . . .<sup>12</sup>

この窓におろされるブラインドは、夫妻の閉ざされた心と共に乗り合わせた婦人の精神的盲目状態も写し出している。この夫人はアメリカ人の夫こそ最高の夫だと信じて疑わない人物で、その信念に基づいて娘と外国人の恋人との仲を裂き、かえって自分が娘を不幸にしていることにまったく気づかない独善的な母親である。自分の気に入ったものなら娘を慰めるだろうと思いつき、カナリヤを土産にしようとするその態度には、娘の心を本当に思いやろうとする気持ちが感じられない。ここでもまた、Krebsの母親と共通する無理解な母親像が示されている。

そして、この暑く不快な旅は Elliot 夫妻の苦しみの新婚旅行に通じている。夫妻が城を借りて長期滞在する Touraine は“a very flat hot country” (88) であり、夕方に木陰に吹く風さえ“hot”な土地なのである。そこには二番生えといった回復を思わせる景色はない。もはや、夫婦の間では肉体的なつながりを求める心すら薄れつつある。しかも、二人の結びつきは初めから Elliot 夫人の

“sickness” によって妨げられる場合も多く、何も生み出すことはない。“She was sick and when she was sick she was sick as Southern women are sick” (85) . こうした夫人の状態を表わす “sick” という言葉の反復によって、彼女の高齢という事実と共に、実際に子供を得る可能性の低さが暗示されている。ついには、二人はベッドを共にさえしなくなる。

肉体的な結びつきを求める以外、この夫婦の共同作業はほとんどない。詩人でもある Elliot 氏の原稿を夫人がタイプで打ち直すくらいである。やがてその作業も、夫人の女友達が彼女に代わって仕上げるようになってしまう。タイプライターの正式な打ち方を覚えるなど、夫人の方にも努力は見られるのだが、打つスピードが速くなるにつれミスタイプも多くなる。一文字でも間違いがあれば一ページ全部を打ち直しさせる Elliot 氏の厳しさにあっては、これもあまり役に立たない技術である。彼女の努力も、子供をつくろうとする試みと同じく実を結ばない。

こうして Elliot 夫妻の関係は、肉体的にも仕事の面から見ても稀薄になっていく。精神的なつながりについても、肉体上の純潔のみを重視し、“At first Hubert [Mr. Elliot] had no idea of marrying Cornelia. He had never thought of her that way.” (86) という表現の示すとおり、何かのはずみに結婚しようとも考えていなかった相手と結婚した夫妻の結びつきが強いとは言えない。彼らはつながりを深めていくよりも、むしろ、夫人の友人によってお互いの夫や妻としての立場さえ失っていく。

この友人は不思議な存在である。彼女は結婚前の Elliot 夫人と同じ店で働いていた人物で、夫人よりも何歳か年上、と設定されている。彼女は夫妻と暮らし始めると、まず、タイプ打ちの仕事をごなすことで彼らの間に自分の居場所をしっかりと確保している。Elliot が彼女をずうずうしいと感じている雰囲気はなく、“She was very neat and efficient and seemed to enjoy it [the typing].” (88) と描かれていて、むしろ好印象を持っているらしい。しかし、彼女は Elliot 夫人に “honey” と恋人に対して使う言葉で呼び掛けており、Elliot 氏の夫としての地位をおびやかす存在でもある。実際、最後には、夫婦の営みの場所であった「大きな中世風のベッド」で彼女が夫人と一緒に夜を過ごしている。今や夫人の「夫」たるのは事実上彼女であり、Elliot 氏からその妻を奪い取っているのである。

そうこうするうちに、Elliot 氏の方はますます詩作に励んでいる。この短篇において、詩はほとんど唯一生み出されているものと言ってよく、その生産性が向上している稀有な例に見える。彼は次々に長い詩を書いており、本一冊分ほどの詩がたまっている状態にある。出版社との契約も成立し、将来の見通し

も表向き明るい。ところが、Elliot 氏の詩作にのめりこんでいく状況は健全とは言いがたい。何故なら、「夫」の役割が彼の手から離れていくにつれて、妻の代わりとばかりに、ますます詩作に没頭していくからである。やがて、夫婦のベッドからも追い出された彼は、夜に詩を書き、翌朝には疲れ切つてへとへとで“very exhausted”な状態になってしまう。その有様は、まるで詩に生気を吸いとられてしまったかのようなのである。彼の詩作はいわば逃げの結果であり、彼の生命力を更に衰えさせていくものでしかなくなっている。

夫婦の関係が思わしくないために何かに没頭する人物を描いた作品は幾つかあるが、Steinbeck の“The Chrysanthemums”もその内の一つである。この短篇においては、夫ではなく、妻 Elisa の方が菊づくりに熱中し見事な花を咲かせるまでになっている。夫婦の間には子供はなく、二人の好みも合わない。花壇の手入れにいそむ彼女と対照的に、夫は平凡な農夫ではあるが、妻の気持ちに鈍感で、拳闘試合を見物に出掛けるような人物である。そのためか、ますます Elisa は菊づくりにのめり込んでいる。そして、彼女の菊への深い思い入れは、ある日、彼女の家を訪れたよそ者への警戒心をあっさり解く働きもしている。この旅人は馬車に乗って台所用具を手入れしてまわっている男で、その日はまだ仕事にありついていない。そのため、自分の顧客に菊をつくってみたいと願っている婦人がいるという話で巧みに Elisa の心をひきつけ、なんとか仕事をもらう。一方、Elisa にとってこの男は、彼女の菊づくりに興味と理解を示してくれる人であり、一種の愛情すら感じているのではないかと思わせる素振りを見せる。彼女は男が去っていくのを見送りながら、“That’s a bright direction. There’s a glowing there.”<sup>13</sup> とつぶやく。彼女にとって男と男の歩んでいる道は、輝いていて希望を表わす存在に見えているのである。その感情には、気ままに旅をする生活へのあこがれや現在の生活からの逃避願望も含まれているかもしれない。しかし、彼女の思いはその日の内に裏切られる。夕方、出掛ける途中の路上で Elisa は “a dark speck”<sup>14</sup> を見つける。彼女が男に細心の注意を与えながら分け与えた菊の苗が、無惨な姿を晒しているのである。加えて、その塊を見た瞬間に彼女は男の行為の理由を悟ってしまう。

She [Elisa] whispered to herself sadly, “He might have thrown them off the road. That wouldn’t have been much trouble, not very much. But he kept the pot,” she explained. “He had to keep the pot. That’s why he couldn’t get them off the road.”<sup>15</sup>

結局、男に本当に菊を貰っていく意志はなく、単に仕事を得るための方便にすぎなかったのである。彼にとって菊は、せめて通りがかりに踏みつぶされた

りしないよう、あるいは、もしかしたらうまく根づいて生き延びられるよう、道から外れたところに捨ててやる考えさえわからない、価値のないものでしかない。自分の役に立つ割合は、彼にしてみれば手間のかかる菊より苗の入っていたポットの方がはるかに大きい。そして、同じ感性を共有する喜びは彼女のもとから瞬く間に去り、彼女の思いは菊とともに打ち捨てられ干からびるがままにされてしまう。彼女の人生に変化が訪れるチャンスも消え、また夫との味気ない日々が続く予感をさせながら、「年老いた女のように」忍び泣く彼女の姿を描いて終わっている。

一方、Elliot 氏の方は詩作でかなりの収入を得ていたが、詩の出来栄についても、ただ “He wrote a great deal of poetry. . .” (88) と量についてしか言及されておらず、はなはだあやしい。その上、氏のとりまきとしてふるまっていた友人たちも「金持ちで若くまだ独身の詩人」を伴って去っていき、本を出版する前にすでに読者を失っている。その姿には、“The Chrysanthemums” の妻が丹精込めた菊の苗の枯れていく運命が重なる。詩作もまた、彼にとって生命力を浪費させるだけの行為となっている。ただ、Elisa と異なり、彼に自分の詩がこの先どうなるかはわかっていない。徐々に衰えていくだけの何も生み出さない世界に、Elliot 夫妻は不毛な状態に陥ったままとり残されている。スケッチで死闘の中から生を勝ちとって輝く闘牛士の様に比べ、最後に “quite happy” と表現される彼らの様子は、二人が疎遠になるにつれてそれぞれのファーストネーム、Hubert と Cornelia、で呼ばれなくなり、かえって “Mr. Elliot” あるいは “Mrs. Elliot” という夫婦だと強調しているかのような表現が使われていることと相まって、非常にアイロニカルである。

## 結び

In the evening . . . Elliot drank white wine and Mrs. Elliot and the girl friend made conversation and they were all quite happy. (88)

これは、この短篇の結末部分だが、夫婦の間ではもはや会話すら交わされていない。“A Canary for One” においても、夫婦間でまったく口をきかない様子が、それぞれ乗り合わせた婦人の相手をする事で強調されている。“Mr. and Mrs. Elliot” では、もっぱら女性の間での “conversation” が交わされているが、この言葉には古い用法として “intimate association”，現代用法としては “sexual intercourse” の意味があるらしく、<sup>16</sup> 一層皮肉がきいている。そしてそんな二人

を満足気に眺めている Elliot 氏の姿は、“The Sea Change”の男と重なって不気味にうつる。

“The Sea Change”は Elliot 夫妻の話と対照的にほとんどが会話文で成り立つ短篇である。ある男女の会話が突然耳に飛び込んでくる形で始まるため、二人が何について話し合っているのかしばらくは不明である。しかし、少しづつ二人の異様な関係が浮かび上がってくる。男は女に肉体関係を迫っている。ところが、女は別の女性のもとに行く許可を男に求めているのである。男の誘いを拒否しながら尚も許しを乞う女に、男は、“Vice is a monster of such fearful mien. . . .”<sup>17</sup>と言い、更にその同性愛の行為を“perversion”非難する。ところが、女に、“We're made up of all sorts of things. You've known that. You've used it well enough.”<sup>18</sup>と逆襲され、かえって自らの変態的性質を明らかにされてしまう。男も結局、同じ穴のムジナなのである。そうなると男も抗しきれなくなり、女に承諾を与える。もっとも、これは男の異常性が一層むき出しになった結果にすぎない。何故なら、男は彼女に後で何をしたか、すべて報告するよう望むからである。いわば、のぞき見の行為に、男は自分の欲望のはげ口を求めたのである。男と女、双方の利己心がむき出しになった場面である。一方、“Mr. and Mrs. Elliot”は行為中心につづられており、会話による心情吐露もなく、夫婦の関係や夫人の友人との関わりが更に歪んで見える。会話も交わさず、それぞれが実りのない行為に没頭しており、しかも Elliot 氏は目の前で夫人と友人の関係を見せつけられていながら、皆、不満を持たないと言われる世界。かつて、出版社から性的描写のカットを申し渡されたといういわくもあるのだが、そのためか、かえって秘められたグロテスクな印象を受ける。そして、退廃と無意味と非生産的の行為に満ちた状態を“quite happy”と表現することで、そのひずみを端的に示している。この中世の城に行き着いた夫妻の旅は滅びの旅なのである。後に続くスケッチ、第10章の牛に表わされる「死」は、あせることなくゆるやかに迫っている。

## 注

\* 本稿は甲南英文学会第12回研究発表会（於甲南大学、1996年6月29日）での発表原稿を加筆訂正したものである。

- 1 Carlos Baker, *Hemingway: the Writer as Artist*, 4th ed. (Princeton and New Jersey: Princeton UP, 1972) 27.
- 2 Hemingway の最初の妻 Hadley は、彼より7歳ほど年上である。また、*Hemingway's Genders* の著者は、pp.84-85 において次のように指摘している。“Hubert Elliot, whose initials are reversal of Ernest



Hemingway's, is indeed meant to be a reversed or inverted Hemingway figure. Hubert is a poet with an enormous income, Ernest a prose writer with small one. Hubert writes very long poems rapidly, Ernest wrote very short stories . . . very slowly. Hubert paid in advance to have his work published (a datum that Hemingway inserted as an afterthought in the manuscript) while Ernest was paid for the stories he wrote.”  
この書物の詳細については、注3を参照のこと。

- 3 Nancy R. Comley and Robert Scholes, *Hemingway's Genders: Rereading the Hemingway Text* (New Haven and London: Yale UP, 1994) 81.
- 4 Ernest Hemingway, *Death in the Afternoon* (1932; London: Jonathan Cape Ltd; London and Glasgow: Grafton Books, 1977) 110.
- 5 Hemingway, *Death* 8.
- 6 Ernest Hemingway, “Chapter 9.” *In Our Time* (1925, New York: Charles Scribner's Sons, 1958) 83.  
以下、テキストの頁数は本文の括弧内に記す。
- 7 瀧川元男『アーネスト・ヘミングウェイ再考』（東京：南雲堂, 1987）, 26.
- 8 日下洋右『ヘミングウェイ 愛と女性の世界』（東京：彩流社, 1994）, 137.
- 9 Comley and Scholes, 82.
- 10 Comley and Scholes, 83.
- 11 Ernest Hemingway, “A Canary for One.” *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*, The Finca Vigia Edition. (New York: Macmillan, 1987) 261.
- 12 Hemingway, *Complete* 258.
- 13 John Steinbeck, “The Chrysanthemums.” *The Long Valley* (1938, New York: The Viking Press, 1966) 22.
- 14 Steinbeck, 22.
- 15 Steinbeck, 22.
- 16 嶋忠正『ヘミングウェイの世界—概観と「われらの時代に」評論』（東京：北星堂書店, 1975）, 196.
- 17 Hemingway, *Complete* 304.
- 18 Hemingway, *Complete* 304.



# A Derivational Approach to Multiple Specifier Constructions: The Case of Scrambling

Minoru Fukuda

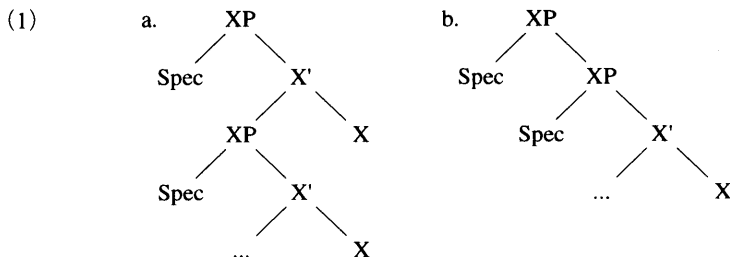
## SYNOPSIS

Assuming a recent analysis of scrambling proposed by Miyagawa (forthcoming) and a derivational approach proposed by Epstein (1995), Groat (1995), and Kawashima and Kitahara (1995), this paper argues that scrambling is not a single movement operation, but that it consists of two independent operations: head-raising and movement of a phrasal category. As a consequence of the proposed analysis, the syntactic relation called “multiple specifier” should be interpreted as “a multiple one-head-to-one-specifier relation” rather than as “a one-head-to-multiple-specifier relation,” and that this relation should be indicated in the course of derivation rather than in a single representation. This new analysis reconciles the apparently conflicting claims about multiple specifier constructions, and enhances Epstein's (1995) fundamental contention that syntactic relations are definable derivationally rather than representationally.

### 1. Introduction

Under the “conventional” X-bar theory or “pre-Bare Phrase-Structure” X-bar theory, multiple specifier constructions (MSCs) are assumed to have a structure in which each head of the same type has its own specifier, as shown in (1a), where the order of specifiers, heads, and complements is irrelevant (see Ura 1994, fn. 34). Under this theory, the multiple appearance of heads should be allowed since the number of the specifiers is determined by that of the heads. However, assuming Chomsky's (1994) Bare Phrase-Structure Theory, Ura (1994) argues for the structure shown in (1b) for

MSCs, where a single head can have multiple specifiers. Ura (1994) insists that a single head with multiple features can in principle have multiple specifiers.



In this paper, adopting Miyagawa's recent analysis, we will deal with scrambling constructions, which are analyzed as a typical case of MSCs. As a theoretical framework, we will assume a derivational or non-representational approach proposed by Epstein (1995), Groat (1995), and Kawashima and Kitahara (1995) (hereafter, Epstein et al. 1995).<sup>1</sup>

This paper has two goals. One is to reconcile the above two apparently conflicting syntactic analyses of MSCs. We will claim that MSCs are allowed by a single head with multiple features, as Ura (1994) argues, but that the derived structure is more like (1a) than (1b). Secondly, we will try to reconcile the discrepancy between Ura's (1994) claim and Fukui's (1986). Ura (1994) insists that a functional head with multiple features can have multiple specifiers, whereas Fukui (1986) claims that each functional category projection has a single specifier position. Maintaining Ura's (1994) fundamental claim, we will argue that Fukui's claim is satisfied at each stage of derivation. Consequently, the syntactic relation called "multiple specifier" should be interpreted as "a multiple one-head-to-one-specifier relation" rather than as "a one-head-to-multiple-specifier relation." As a result, our approach supports Epstein's (1995) fundamental claim that syntactic relations are definable derivationally rather than representationally.

This paper is organized as follows. In Section 2, we will review Miyagawa's (forthcoming) proposal about scrambling, and clarify some still unsettled issues. In Section 3, we will briefly sketch a derivational approach proposed by Epstein et al. (1995). In Section 4, we will present a new analysis of scrambling. More specifically, we will propose that scrambling is not a single movement operation, but that it involves two different operations: head-raising and movement of a phrasal category. The problems described in Section 2 will be solved under the proposed analysis of

scrambling. In Section 5, we will consider the theoretical and empirical implications of our proposal.

## 2. Miyagawa's Analysis of Scrambling

Since the mid-1980's, it has widely been assumed that the relatively free word order of languages like Japanese is due to a movement operation called "scrambling," which is analyzed as an adjunction operation (see Saito 1985). There are at least three instances of scrambling: (i) short-distance scrambling, which accounts for the alternation between the "Direct Object (DO) Indirect Object (IO)" order and the "IO DO" order; (ii) mid-distance scrambling, which is assumed to be an IP (or AGRsP) adjunction operation (see [2])<sup>2</sup>; (iii) long-distance scrambling, which moves a phrase out of a lower clause to a higher clause, crossing a clausal boundary, i.e. CP. In this paper we will concentrate on mid-distance scrambling, which has been regarded as a typical case of scrambling in Japanese.

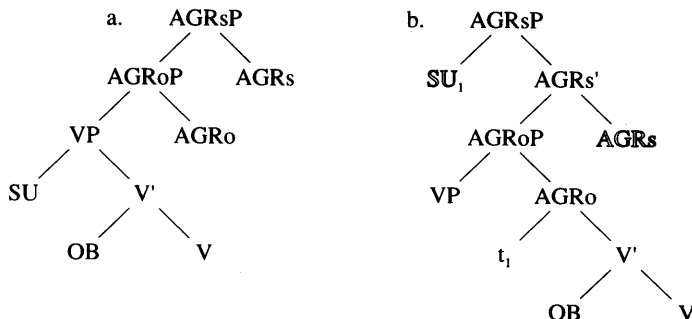
- (2) a. John-ga                      ano tegami-o        kaita  
        John-Nom                  that letter-Acc    wrote  
        'John wrote that letter'

- b. [<sub>IP</sub> *Ano tegami-o* [<sub>IP</sub> John-ga *t* kai [<sub>infi</sub> ta]]

Recently, Miyagawa (forthcoming) proposes that contrary to Fukui's (1993) claim, scrambling is not an optional operation but an obligatory operation driven by feature checking. Accordingly, the OSV word order, observed in (2b), is not attributable to an arbitrary application of scrambling. We will follow Miyagawa and assume that this type of scrambling is invoked by Case feature checking (see also Ura 1994: 96-97).

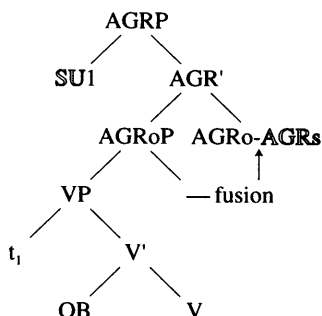
Let us demonstrate how Miyagawa's proposal explains the derivation of scrambling constructions like (2b). (3a) shows a derivational stage where AGRsP has been formed and scrambling is not yet applied.<sup>3</sup> Then, SU is overtly moved out of VP due to the strong feature of AGRs, and (3b) is derived.<sup>4</sup>

(3)



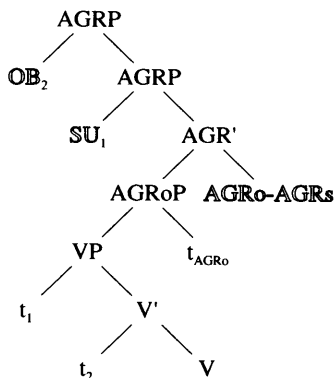
According to Miyagawa, there are two derivations that serve as candidates for the next step. In one derivation, no overt operation is applied to (3b) and OB is moved to the specifier of AGRo in LF to check the weak feature of AGRo. This derivation yields the surface word order SOV, illustrated in (2a). In the other derivation, where scrambling is relevant, AGRo incorporates with AGRs, or fuses into a unitary functional head AGRo-AGRs, as shown in (4).<sup>5,6,7</sup>

(4)



Although AGRs is strong and AGRo is weak in Japanese (see Lee 1995: 88-92 and Ura 1994), AGRo shares the strong nature with AGRs due to the fusion operation, and becomes strong enough to check the accusative Case overtly. Then, OB is moved overtly, as shown in (5), and the surface word order OSV is obtained.

(5)



As noted earlier, Ura (1994) argues that multiple specifiers are licensed by a head with multiple features. In the present case, i.e. (5), a single head AGRo-AGRs with two Case features is responsible for licensing multiple specifiers.

Let us now consider two important conditions, i.e., Rizzi's (1990) Relativized Minimality and Chomsky's (1992) Extension Condition, in connection with the above-mentioned analysis. First, since the landing sites of SU and OB are both Case checking positions, one might wonder whether the movement of OB over SU violates Relativized Minimality or not. Under the Minimalist Program, Relativized Minimality is interpreted as requiring a moving element not to skip the closest potential checking position (see Ferguson and Groat 1994). Since the movement of OB crosses another potential checking position occupied by SU, a violation of Relativized Minimality should be expected.

To explain the absence of Relativized Minimality effects in scrambling constructions, Ura (1994) argues that the specifier positions in scrambling constructions are equidistant from the sentential head with multiple strong features, which is AGRo-AGRs in (5).<sup>8</sup> Therefore, scrambling of OB over SU does not cause a Relativized Minimality violation. This argument clearly suggests that the distance from AGRo-AGRs to the SU position and the one from AGRo-AGRs to the OB position are the same in (5). We will point out below that this could possibly lead to problems.

Secondly, Chomsky's (1992) Extension Condition, which prohibits counter-cyclic operations, does not apply to scrambling constructions like (5). Despite appearances, the movement of OB does not extend the entire structure. This is due to the equidistance strategy discussed above.<sup>9</sup> To put it differently, under the assumption that scrambling operations are immune from Relativized Minimality because of the

equidistance strategy, Extension Condition effects are also expected to be nullified.<sup>10</sup>

With the above-mentioned background in mind, let us point out one unclear issue concerning the landing site of OB in (5). If the two specifier positions occupied by SU and OB are equidistant from AGRO-AGRs, OB does not necessarily move to the left of SU. It should also be possible for it to move to the right of SU. The Extension Condition can rule out such a movement only if we recognize a difference in distance between the specifier positions occupied by SU and OB. It follows that the SOV word order should be allowed as an output of scrambling in principle. Then, we will have to say that the OSV word order is a realization of an optional choice of the two possible landing sites of OB. To maintain Miyagawa's claim that the OSV order is not optionally derived, the movement of OB to the right of SU must be blocked in some principled way.

### 3. A Derivational Approach to Syntactic Relations

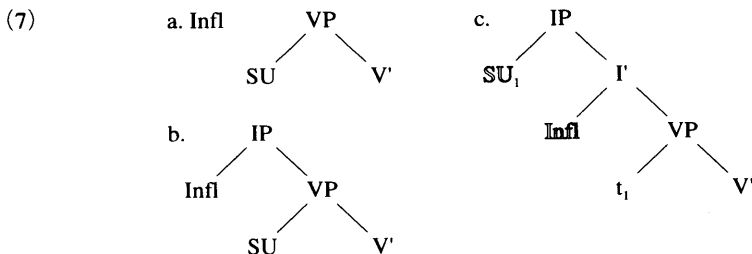
#### 3.1. Derivational C-Command

Epstein (1995) proposes that syntactic relations, in particular c-command relations, which play a central role in syntactic theory, should be defined derivationally rather than representationally. The new definition of c-command, proposed by Epstein (1995: 18), is given in (6).

(6) Derivational C-Command

X c-commands all and only the terms of the category Y with which X was Paired by Merge or by Move in the course of the derivation.<sup>11</sup>

For the purpose of illustration, let us consider how c-command relations are defined under Epstein's proposal, by means of the following derivation.



In (7a), it is trivial that there is no c-command relation between Infl and VP or SU,



because they are not Paired yet. It is at the stage of (7b), where Infl and VP are Paired by Merge, that a c-command relation between Infl and VP or SU is established. In (7b), Infl and VP c-command each other, since they are Paired by Merge. Infl c-commands SU, since it c-commands VP and SU is a term of VP. On the other hand, SU does not c-command Infl, since they are not Paired by Merge (or by Move). Thus, the asymmetrical c-command relation can be captured by derivational c-command. If SU and IP are Paired by Move and Merge, (7c) is derived. Note that IP becomes an “invisible” category I' at this point. SU and I' c-command each other in (7c). However, neither VP, Infl, nor the trace of SU c-commands SU, because they are not Paired by Merge or Move. On the other hand, SU c-commands them all.

Derivational c-command provides us with the answers to the (at least) five basic questions listed in (9), while “representational” c-command, as defined in (8) by Reinhart (1979), offers no insight into the questions (see Epstein 1995: 11, 19-20).

(8) A c-commands B iff:

- a. The first branching node dominating A dominates B, and
- b. A does not dominate B
- c. A does not equal B, and

- (9) a. Q: Why is it that A c-commands B iff the first branching node dominating A dominates B? A: It is the first (not, e.g., the fifth, sixth, nth (n = any positive integer)) node that appears relevant, since this is the projected node created by Pairing of A and B as performed by both Merge and by Move.
- b. Q: Why doesn't A c-command the first branching node dominating A, but instead only the categories dominated by the first branching node? A: A was not Paired with the first branching node dominating A, by Merge or by Move.
- c. Q: Why is branching relevant? A: Assuming Bare Phrase Structure (Chomsky 1994), no category is dominated by a non-branching node, i.e., Free Projection (see Chomsky 1992) is eliminated: Structure Building (Merge and Move) consists of Pairing, hence, it invariably generates binary branching.
- d. Q: Why must A not equal B, i.e., why doesn't A c-command itself? A: Because A is never Paired with itself by Merge or by Move.
- e. Q: Why is it that in order for A to c-command B, A must not dominate B? A: If A dominates B, A and B were not Paired by Merge or by Move.

### 3.2. Local Economy

Groat (1995) elaborates and develops the approach proposed by Epstein (1995) that incorporates derivational c-command. In particular, Groat proposes that the checking relation, one of the most significant syntactic relations within the Minimalist Pro-gram, can be defined in terms of derivational sisters, as shown below (Groat 1995: 13).<sup>12</sup>

(10) Checking Relation

X is in a checking relation with a head Y<sub>0</sub> in a derivation D iff

- a. X and Y<sub>0</sub> are derivational sisters, and
- b. X and Y<sub>0</sub> share at least one formal feature.

(11) Derivational Sisterhood

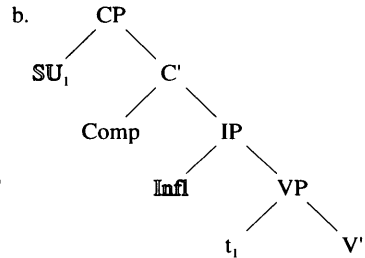
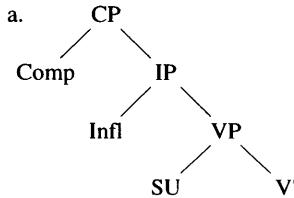
X and Y are derivational sisters in a derivation D iff

- a. X c-commands Y at some point P in D, and
- b. Y c-commands X at some point P' in D.<sup>13</sup>

Let us take another look at the derivation shown in (7) to illustrate how these notions explain nominative Case checking of SU. In (7b), Infl c-commands SU, and at the next step shown in (7c), where SU is moved up and Paired with IP, SU c-commands Infl. Since they bear relevant Case features, the Case checking relation is established at this stage.

However, another derivation could be suggested, which also seems to accomplish nominative Case checking. In this derivation, before the movement of SU, IP is Paired with Comp, and hence (12a) is derived from (7b). Then, SU is moved up and Paired with CP, and (12b) is derived.

(12)



Since Infl c-commands SU in (7b) and vice versa in (12b), the Case checking relation should also hold in (12b). It follows that we are in an undesirable situation, under which there are two (or more) possible derivations for nominative Case checking. In order to block derivations like (12), Groat (1995: 24) proposes Local

Economy, which is defined as follows.<sup>14</sup>

(13) Local Economy

Minimize the number of derivational sisters created by Merge/Move for necessity of convergence.

Let us calculate the number of derivational sisters created in the two derivations illustrated in (7) and (12). In (7c), T, Infl, and V' become derivational sisters of SU as a result of the movement of SU. In (12b), on the other hand, C', Comp, Infl, and V' become derivational sisters of SU as a result of the movement of SU. Since there are more derivational sisters in (12b) than in (7c), derivation (12) is blocked by derivation (7) due to Local Economy.<sup>15</sup>

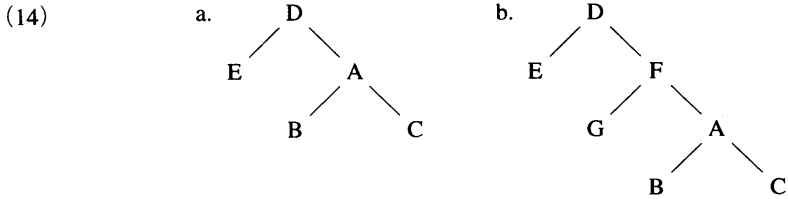
It should be noted that we do not have to wait until the whole structure is constructed in order to choose the most economical derivation in terms of Local Economy. As discussed above, at the stage where two or more derivations compete, the most economical one is picked by Local Economy, regardless of what will happen at later stages. Disregarded derivations crash or are canceled at that point. Local Economy checks each step of derivation. This means that Local Economy does not necessarily take care of all stages of derivation.

### 3.3. Counter Cyclicity and Linear Ordering

Groat (1995) and Kawashima and Kitahara (1995) argue that Extension Condition effects are deducible from Kayne's (1994: 6) Lexical Correspondence Axiom (LCA), if we incorporate Epstein's (1995) derivational c-command into the LCA. They argue that counter-cyclic operations result in a violation with the LCA. The main idea can be stated as follows: the syntactic relation asymmetrical c-command imposes a linear ordering of terminal elements bearing phonetic features; any phrase marker that violates it is barred (Kawashima and Kitahara 1995: 8).

Informally and simply put, the essence of the LCA is that the (derivational) c-command relations among sentential elements define the linear word order. The linear order must be established for the elements to be properly pronounced. Then, if c-command relations are not established among them, the word order is not fixed and such strings are not pronounceable. Thus, the violation of the LCA ultimately leads to a violation of Full Interpretation in PF.

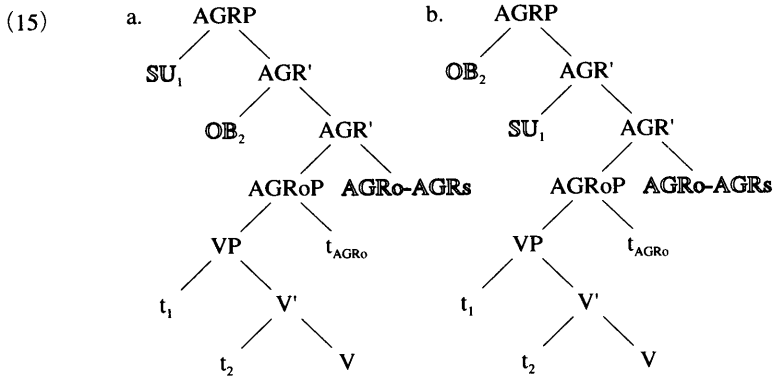
Let us now examine the following hypothesized derivation and consider how counter-cyclic operations are banned.



From (14a) to (14b), G is introduced to an intermediate position in the phrase structure. It is significant to note that there is no derivational c-command relation between E and G, since E and G are not Paired by Merge/Move. Since the c-command relation between E and G is not established, the word order relation between them is not established either. Therefore, the LCA is violated, and hence the string of elements, i.e., E G B C, is not pronounceable. Kawashima and Kitahara (1995: 16) conclude that non-cyclic introduction of an overt category necessarily yields a phrase structure violating the LCA, thereby inducing a violation of Full Interpretation at PF. It follows that the Extension Condition effects (Chomsky 1992) can be derived from derivational c-command and the LCA.

#### 4. A Head-Raising Approach to Scrambling<sup>16</sup>

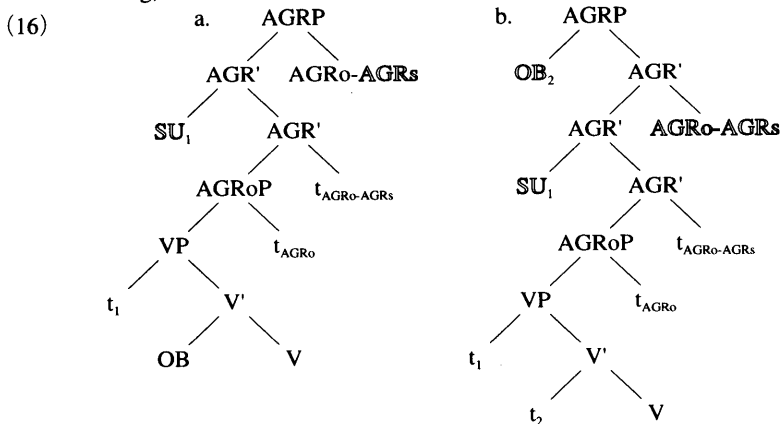
We would like to propose a new way of deriving scrambling constructions under Epstein et al.'s (1995) derivational approach. Let us reexamine constructions like (2a) and (2b). We basically assume Miyagawa's (forthcoming) AGRo-AGRs fusion approach. We should recall that (4) indicates a stage where SU is moved, and then AGRo fuses with AGRs. As noted in Section 2, in (4), due to the fusion operation, the strong accusative Case feature must somehow be checked overtly. There are two possible and in fact competing derivations that accomplish accusative Case checking: either scrambling of OB to the right of SU (see [15a]) or scrambling of OB to the left of SU (see [15b]).



Let us compare these two derivations in terms of Local Economy. The derivational sisters created in (15a) are AGR', AGRo-AGRs,  $t_{AGRo}$ ,  $t_1$ , and V, while those in (15b) are AGR',  $SU_1$ , AGRo-AGRs,  $t_{AGRo}$ ,  $t_1$ , and V. Thus, Local Economy forces us to pick the former derivation, since the derivational sisters created in (15a) are fewer than those in (15b).

However, the movement operation in (15a), being a counter-cyclic operation, ultimately fails to satisfy the principle of Full Interpretation in PF, as Groat (1995) and Kawashima and Kitahara (1995) argue. The construction as such will have no legitimate derivation.

We would like to propose that prior to the application of scrambling to OB, AGRo-AGRs raises and adjoins to AGRP, forming (16a) from (4).<sup>17</sup> Then, OB is scrambled for Case checking, and (16b) is derived.



We should note again that OB and AGRo-AGRs are in a checking relation, because AGRo c-commands OB when OB stays in VP, as in (16a), and OB c-commands AGRo-AGRs when it occupies the specifier position, as in (16b).

Let us finally consider why Relativized Minimality effects are not observed in scrambling constructions. Ura's (1994) claim that the effects are nullified in multiple specifier constructions can be captured under our proposal in a principled fashion without recourse to the equidistance strategy.

As noted earlier, within the framework of the Minimalist Program, Relativized Minimality is interpreted as requiring a moving element not to skip the closest potential checking position. With this in mind, let us reexamine the derivation shown in (4) and (16). Although the specifier position occupied by SU was also a potential checking position for OB at the stage (4), after AGRo-AGRs raises, it is no longer such a position, since AGRo-AGRs is no longer located in the head position of the specifier position occupied by SU, as shown in (16a). The specifier position of raised AGRo-AGRs is now available to accusative Case checking. Therefore, the movement of OB over SU does not skip a potential checking position and hence exhibits no Relativized Minimality effect.<sup>18</sup>

## 5. Implications

### 5.1. Conventional X-Bar Theory and Ura's Analysis

We should note that the proposed structure, illustrated in (16b), looks more like (1a) than (1b). While Ura (1994) interprets the syntactic relation "multiple specifiers" as a realization of "a one-head-to-multiple-specifiers relation," our proposal, given in Section 4, suggests that it should be interpreted as a realization of "multiple one-head-to-one-specifier relations," which conforms to the "conventional" X-bar theory. Therefore, our analysis and the "conventional" X-bar theory share a similar insight with respect to the structural configuration of MSCs.

However, we should note that our analysis has incorporated Ura's hypothesis that a single head with multiple features can have multiple specifiers, though our idea differs from his with respect to the structural configuration of MSCs. Therefore, our analysis of MSCs, which contains elements of both the "conventional" X-bar theoretic analysis and Ura's analysis, serves to reconcile these two conflicting approaches.

## 5.2. Fukui (1986) and Ura (1994)

Our proposal can strike a partial compromise between two conflicting proposals given by Fukui (1986) and Ura (1994).<sup>19</sup> One of Fukui's (1986) claims about phrase structure is that each functional category projection has one specifier position. By contrast, Ura (1994) insists that a single head with multiple features can in principle have multiple specifiers.

Our approach, proposed in Section 4, can capture in one model the two apparently inconsistent claims by Fukui and Ura. On the one hand, Fukui's claim is incorporated into our approach because each head has one specifier, as shown in derivational stages in (4) and (16); on the other hand, Ura's claim is also incorporated into our approach because multiple specifiers are created through multiple feature checking, which is triggered by a functional head that bears multiple features, i.e. AGRo-AGRs.

## 5.3. A Derivational Analysis of Multiple Specifiers

We should note that SU is located in the specifier position of AGRo-AGRs at one stage of derivation (see [4]), but it is no longer in such a position at the later stage of derivation (see [16]). This is so because AGRo-AGRs does not serve as a head for the projection whose specifier is occupied by SU after AGRo-AGRs raises (see [16a]). As indicated in (16b), after OB is moved upward, it is in a new specifier position. This amounts to saying that the syntactic relation called "multiple specifiers" is not immediately indicated in a single representation, but that it is rather indicated derivationally or in a series of derivational stages. It is in this sense that our analysis is different from the "conventional" X-bar theoretic analysis of MSCs. This also suggests that our derivational approach to MSCs is compatible with Epstein et al.'s (1995) hypothesis that syntactic relations are definable derivationally, and indeed supports their claim.

## 5.4. Scrambling as a Structure Building Operation

The basic intuition behind our analysis is that scrambling is a structure building operation and hence it shares important properties with operations like Merge and Move. This leads to the argument that scrambling as well as ordinary movement operations obeys economy conditions like Local Economy. In particular, we have argued that if scrambling is applied counter-cyclically, the construction in question will be excluded as a violation of Full Interpretation at the interface level. This claim is compatible with Murasugi's (1993) analysis.

Murasugi (1993) arrives at the conclusion that scrambling must apply before relative clause formation. In other words, the derivation shown in (18) is blocked by the one shown in (17) by the economy condition.

- (17) Scrambling:  $[_{IP} OB_i [_{IP} SU e e_i V]]$   
 Relative Clause Formation:  $[_{NP} [_{IP} OB_i [_{IP} SU e_j e_i V]] NP_j]$
- (18) Relative Clause Formation:  $[_{NP} [_{IP} SU e_j OB V] NP_j]$   
 Scrambling:  $[_{NP} [_{IP} OB_i [_{IP} SU e_j e_i V]] NP_j]$

Murasugi's conclusion naturally follows from our analysis of scrambling. The application of scrambling after relative clause formation inevitably results in a counter-cyclic operation, and hence ultimately violates the principle of Full Interpretation in PF. Thus, only the derivation, in which scrambling applies before relative clause formation, survives as a legitimate derivation.

### 5.5. MSCs in English and Japanese

It is interesting to compare our head-raising approach with Watanabe's (1993: Appendix to Chapter 2) approach to topicalization (and factive predicate) constructions in English in terms of complementizer raising. Let us take a case of embedded topicalization as an example here. Simply stated, Watanabe argues that the complementizer that moves up after the movement of a topic phrase.

- (19) a. ...  $[_{CP} \text{Topic } [_C \text{that } [_{AGR_{RP}} \dots ]]]$   
 b. ...  $[_{CP} [_C \text{that } [_{CP} \text{Topic } [_C t [_{AGR_{RP}} \dots ]]]]]$

Our approach and Watanabe's share the same insight into comparable constructions in the two languages. Although this is still a speculative statement, it may be that English and Japanese are similar with respect to availability of head-raising for creating a new projection of the same type, but that they are different with respect to which functional category is available to such an operation.

### 5.6. The Non-Scramblability of the Subject

Within the GB framework, Saito (1985, Chapter 3) argues that in Japanese, the subject is not sensitive to scrambling for a Case theoretic reason. Our analysis explains the non-scramblability of the subject in terms of economy considerations. Let us recall the derivational stage shown in (4), where the Case feature of SU is checked by AGRs. Since feature checking is already established at this stage, no further movement of SU is required. In addition, if SU is moved further upward, more derivational sisters will be created. Local Economy, requiring a checking relation to be established with the



minimum number of derivational sisters, blocks such an “extra” movement of SU. Thus, the impossibility of SU scrambling can naturally be explained in line with these economy considerations.

### 5.7. Multiple Subject Constructions

Our approach to scrambling constructions is also applicable to multiple subject constructions in Japanese if we assume the movement analysis of the constructions (Fukuda 1991 and Kuno 1983). Under the movement approach, it is assumed that (20b) is derived from a construction like (20a).

- (20) a. [<sub>IP</sub> [[[Bunmeikoku-ga] dansei-ga] zyumyo-ga] mizikai]  
 civilized countries-Nom male-Nom life span-Nom short-is
- b. [<sub>IP</sub> [Bunmeikoku-ga]<sub>2</sub> [<sub>IP</sub> [ t<sub>2</sub> dansei-ga]<sub>1</sub> [<sub>IP</sub> [ t<sub>1</sub> zyumyo-ga] mizikai]]]  
 ‘The life span of males in civilized countries is short’

Since (20b) is derived in terms of overt movement operations equivalent to scrambling, our approach to scrambling is directly applicable to this case. Although we may need minor modifications, we believe that our approach can also derive these constructions under the base-generation approach. However, we leave the detailed analysis to future research.

## 6. Summary

To recapitulate what we have argued, assuming Miyagawa's (forthcoming) proposal and Epstein et al.'s (1995) derivational approach, we claimed that an operation called “scrambling” is made up of two operations: head-raising and movement of phrasal categories. Our proposal implies that the syntactic relation called “multiple specifier” should be interpreted as “a multiple one-head-to-single-specifier relation” and that it should be indicated in the course of derivation. This is compatible with Epstein et al.'s (1995) fundamental contention that syntactic relations should be defined derivationally. Our approach can reconcile apparently conflicting claims about MSCs and phrasal structures.

## Notes

I would like to express thanks to Sam Epstein, Erich Groat, Jeffrey Gross, Toshitaka Kodoh, Shigeru Miyagawa, Kentaro Nakatani, and Makoto Yamada for comments, discussions, and suggestions. This paper was written while I was a visiting scholar at the Department of Linguistics, Harvard University, 1995-1996.

1. The papers by Epstein (1995), Groat (1995), and Kawashima and Kitahara (1995) are to be collected and published by Oxford University Press under the title *Non-representational syntax: a derivational approach to syntactic relations*.
2. For ease of exposition, we will adopt Chomsky's (1986) Barriers type sentential structure when the detailed mechanism of scrambling is not important to the discussion.
3. In the tree structures in this paper, the subject DP and the object DP are indicated as SU and OB, respectively. Irrelevant parts including the T projection are omitted for ease of exposition. Outlined forms indicate checking relations between phrases and heads.
4. Note that AGRsP becomes an "invisible" category AGRs' at this stage.
5. According to Shigeru Miyagawa (personal communication), the fusion operation applies optionally. Shigeru Miyagawa (personal communication) also suggests to me that the fusion operation takes place in lexicon rather than in syntax.
6. Following a suggestion by Sam Epstein (personal communication), the intermediate projection and the maximal projection of AGRo-AGRs are indicated as AGR' and AGRP, respectively.
7. There seems to be another option, i.e., the fusion operation takes place before the movement of SU. The analysis proposed in section 4 can account for this derivation.
8. Miyagawa does not refer to Relativized Minimality effects in his forthcoming paper. However, in his class lecture at MIT, Spring 1996, he briefly mentioned that he adopts Ura's (1994) equidistance strategy. It can also be argued that thanks to Chomsky's (1992) definition of minimal domains, when AGRo fuses with AGRs, the checking domain of AGRo expands to the projection of AGRs, i.e. the AGR projection in (5).
9. In fact, Chomsky (1992: 33) suggests that the Extension Condition does not necessarily apply to adjunction structures like (5).
10. The intuition behind this kind of approach as well as Chomsky's (see fn.9) may be that scrambling is not a structure-building operation, to which the Extension Condition is expected to apply. Our basic idea runs counter to this view, as we will discuss in section 5.
11. Informally, "terms" of Y are Y and all the categories dominated by Y. For the purposes of discussion, it is sufficient to interpret "Pair" literally. For more detailed discussion, see Epstein 1995.
12. An immediate consequence of the definition of (10) is that Proper Binding Condition effects can be derived from a violation of Greed. See Groat 1995 for discussion.
13. We follow Sam Epstein's (personal communication) suggestion and assume that P' does not necessarily equal P.
14. Following Sam Epstein's (personal communication) suggestion, we add the underlined phrase to Groat's original definition here.
15. The effects of an economy principle called "the Shortest Movement Condition," which prefers the shortest movement operation (Chomsky 1992, 1995), are also derivable from Local Economy. Therefore, it may be possible to argue that this principle is subsumed under Local Economy. See Groat 1995: 27-31.
16. At a preparatory stage, I greatly benefited from discussions with Erich Groat.
17. Raising of an AGRo-AGRs complex does not seem to conform to Greed in the sense of Chomsky 1992. In addition, it conflicts with Chomsky's (1995: Chapter 4) claim that the target of movement must always

project. We will not discuss these matters here.

18. Sam Epstein (personal communication) points out to me that the so-called "Holmberg's generalization" is explicable in terms of the same analysis.
19. Fukui (1986) does not assume the existence of functional categories in Japanese. It may be that, as Ura (1994) argues, Fukui's claim about the phrase structure of Japanese can not, as they stand, be incorporated into the present approach.

## References

- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1992. The minimalist program for linguistic theory. MIT Occasional Papers in Linguistics 1. Reprinted in Chomsky 1995.
- Chomsky, Noam. 1994. Bare phrase structure. MIT Occasional Papers in Linguistics 5.
- Chomsky, Noam. 1995. *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Epstein, Samuel David. 1995. Un-principled syntax and the derivation of syntactic relations. Unpublished ms., Harvard University.
- Ferguson, Scott K. and Erich M. Groat. 1994. Defining "shortest move." Unpublished ms., Harvard University.
- Fukuda, Minoru. 1991. A movement approach to multiple subject constructions in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 13: 21-52.
- Fukui, Naoki. 1986. A theory of category projection and its applications. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Fukui, Naoki. 1993. Parameters and optionality. *Linguistic Inquiry* 24: 399-420.
- Groat, Erich. 1995. On the redundancy of syntactic representations. Excerpt of paper presented at GLOW, Tromsø, Norway.
- Kawashima, Ruriko and Hisatsugu Kitahara. 1995. Strict cyclicity, linear ordering, and derivational c-command. Unpublished ms., University of British Columbia.
- Kayne, Richard. 1994. *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuno, Susumu. 1983. *Shin nihon bunpoo kenkyuu (New study on Japanese grammar)*. Tokyo, Japan: Taishukan.
- Lee, Rhanghyeyun K. 1995. Economy of representation. Ph.D. dissertation, University of Connecticut, Storrs, CT.
- Miyagawa, Shigeru. Forthcoming in *Linguistic Inquiry*. Against Optional Scrambling.
- Murasugi, Keiko. 1993. The generalized transformation analysis of relative clauses and island effects in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 15: 113-123.
- Reinhart, Tanya. 1979. The syntactic domain for semantic rules. In *Formal semantics and pragmatics*, ed. F.

Guenther and S. Schmidt. Dordrecht, The Netherlands: Reidel.

Rizzi, Luigi. 1990. *Relativized minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.

Saito, Mamoru. 1985. *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications*. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, MA.

Ura, Hiroyuki. 1994. *Varieties of raising and the feature-based bare phrase structure theory*. MIT Occasional Papers in Linguistics 7.

Watanabe, Akira. 1993. *AGR-based Case theory and its interactions with A-bar system*. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, MA.

# 日本語における数量詞作用域に関する一考察

南條 健助 ・ 中野 景介

## SYNOPSIS

Aoun and Li (1993: Ch. 7) discuss the relative scope involving the interaction of quantifier phrases (QPs) with wh-operators in Japanese and argue that it can be determined by the two universal interpretive principles: the Minimal Binding Requirement (MBR) and the Scope Principle.

We reexamine their analysis and point out that the formal principles they propose are insufficient to account for our Japanese data. We then propose a slight revision of Aoun and Li's analysis and argue for the necessity of the functional principle originally proposed for English in Kuno (1991) as well as of the formal principles of the LF component.

## 序

本稿では、次のような例文において見られる日本語の数量詞句 (quantifier phrase; QP) と wh 演算子 (wh-operator) の相互作用について考察する。

- (1) a. 何が3人を待ち受けていたのか (知っていますか)。' (非曖昧)
- b. 3人を何が待ち受けていたのか (知っていますか)。 (曖昧)
- c. 2人が何を食べたのか (知っていますか)。 (曖昧)
- d. 何を2人が食べたのか (知っていますか)。 (非曖昧)

日本語の母語話者である筆者達の直観では、(1a, d) の解釈は非曖昧であるのに対し、(1b, c) は曖昧であると判断される。このような日本語の数量詞句と wh 演算子の相互作用に関しては、Aoun and Li (1993: Ch. 7) が、日本語も英語や中国語と同様に、最小束縛要求 (Minimal Binding Requirement; MBR) と作用域原理 (Scope Principle) という2つの形式的な解釈原理によって説明できると論じている。

本稿では、まず、英語の例文によって、Aoun and Li (1993) の提案する2つ

の解釈原理を概観した後、これらの原理に基づいて (1) の例文における日本語の数量詞の相対的作用域の説明を試み、彼らの解釈原理だけでは (1) のデータを的確に説明することができないことを指摘する。そして、その解決策の一つとして、形式的な解釈原理に加えて、Kuno (1991) が提案する機能的な解釈原理を援用し、日本語の数量詞の相対的作用域は形式的原理と機能的原理の相互作用によって説明できることを論じる。

### 1. Aoun and Li (1993) による英語の分析

まず、Aoun and Li (1993) が提案する英語の数量詞の相対的作用域に関する分析を見ておこう。

- (2) a. What did everyone buy (for Max) ? (ambiguous)  
 b. Who bought everything (for Max) ? (unambiguous)

Aoun and Li (1993: 86) は数量詞が関与する (2a) と (2b) の解釈に関して、前者は曖昧であるが、後者は非曖昧であるとしている。すなわち、(2a) では what の方が everyone よりも広い作用域を持つ読み (単一的 (single) な読み) も、everyone の方が what よりも広い作用域を持つ読み (配分的 (distributive) な読み) も両方可能であるが、(2b) では everything の方が who よりも広い作用域を持つ読み (配分的な読み) は不可能であり、who の方が everything よりも広い作用域を持つ読み (単一的な読み) しか許されないという。

Aoun and Li (1993: 86) はこの解釈の違いを説明するために、両文に対して、それぞれ (3a, b) のような LF 表示を与えている。

- (3) a.  $[_{CP} \text{ what } t_{IP} \text{ everyone } x_i [_{VP} t' [_{VP} \text{ buy } x_j]]]]$   
 b.  $[_{CP} \text{ who } t_{IP} x_i [_{VP} \text{ everything } t' [_{VP} \text{ bought } x_j]]]]$

これらの表示を解釈するために、Aoun and Li (1993: 8) は次の2つの解釈原理を提案している。

- (4) The Minimal Binding Requirement (MBR)  
 Variables must be bound by the most local potential A' - binder.

## (5) The Scope Principle

An operator A may have scope over an operator B iff A c-commands B or an A'-element in the chain headed by the operator.

(4) は最小束縛要求と呼ばれる原理で、「変項は、それに最も近い非項束縛子 (A'-binder) によって束縛されなければならない」というものである。この原理は実質的に、例えば、(3b) のように変項が2つあり、その演算子が2つある場合には、文の階層構造において、上から演算子<sub>i</sub>, 変項<sub>i</sub>, 演算子<sub>j</sub>, 変項<sub>j</sub> という順に並ばなければならないという帰結をもたらす。

一方、(3a) のように主語の位置に数量詞句の変項<sub>i</sub>があり、動詞の目的語の位置に wh 演算子の変項<sub>j</sub>がある場合には、wh 演算子<sub>j</sub>, 数量詞句演算子<sub>i</sub>, 変項<sub>i</sub>, 変項<sub>j</sub> の順に並ぶことが要求される。これは、「Wh 演算子と同一指標を付与された変項は指示表現 (R-expression) であり、束縛原理 C に従う」という Chomsky (1981) の想定による (Aoun and Li (1993: 56-57) を参照)。すなわち、(3a) において、もし buy の目的語の位置にある変項 ( $x_j$ ) の先行詞が everyone であったとすると、everyone の指標<sub>i</sub> がその変項に付与されることになり、この変項は主語の位置にある変項 ( $x_i$ ) によって項束縛 (A-bind) される。これは、「指示表現は自由でなければならない」という束縛原理 C の違反になる。したがって、everyone<sub>i</sub> は  $x_j$  の可能な非項束縛子にはなれないことから、次に近い what が  $x_j$  の非項束縛子としての資格を持つことになり、これで最小束縛要求は満たされる。

(5) の作用域原理は数量詞の相対的作用域を決定する原理で、「演算子 A が演算子 B または演算子 B を先頭要素とする連鎖 (chain) における非項要素を構成素統御 (c-command) する場合にのみ、A が B よりも広い作用域を持つ」というものである。具体的に、この原理を用いて (3) のそれぞれの表示を解釈すると次のようになる。まず、(3b) は演算子 who が演算子 everything を構成素統御しており、whoの方が広い作用域を持つ解釈が得られる。しかし、everything は who を構成素統御しておらず、everythingの方が広い作用域を持つ解釈は得られない。したがって、この文は非曖昧である。

一方、(3a) では演算子 what が演算子 everyone を構成素統御しており、whatの方が広い作用域を持つ解釈がまず得られる。また、Chomsky (1986) に従い、what が CP の指定部に移動する際、一旦 VP に付加 (adjoin) されると想定するため、what はその位置に中間痕跡を残すことになる (Aoun and Li (1993: 86) を参照)。この中間痕跡は演算子 what を先頭要素とする連鎖における非項要素

であり、数量詞作用域の決定に関わってくる。すなわち、中間痕跡  $t_j$  は演算子 *everyone* によって構成素統御されるため、今度は *everyone* の方が広い作用域を持つ読みが得られ、したがって、(3a) は曖昧であると予測される。

このように、Aoun and Li (1993) は、英語の数量詞作用域は、最小束縛要求と作用域原理の2つの解釈原理によって決定できると論じている。

## 2. Aoun and Li (1993) による日本語の分析

Aoun and Li (1993: Ch. 7) は日本語の数量詞の相対的作用域も、中国語や今上で見た英語と同様に、最小束縛要求と作用域原理の2つの解釈原理によって決定できると主張する。そこで、これらの原理を用いて (1) の例文における日本語の数量詞の相対的作用域を説明してみよう。便宜上、次に (1) の例文を繰り返しておく。

- (1) a. 何が3人を待ち受けていたのか (知っていますか)。 (非曖昧)  
 b. 3人を何が待ち受けていたのか (知っていますか)。 (曖昧)  
 c. 2人が何を食べたのか (知っていますか)。 (曖昧)?  
 d. 何を2人が食べたのか (知っていますか)。 (非曖昧)

(1a-d) の例文は、それぞれ (6a-d) のようなパターンとして捉えることができる。

- (6) a. wh-ga ... QP-o  
 b. QP-o ... wh-ga  
 c. QP-ga ... wh-o  
 d. wh-o ... QP-ga

一般に、直観によって数量詞作用域を決定することは非常に難しいと言われている。また、言語学者を含む複数の母語話者にその判断を求めても、話者によって、また同じパターンであっても例文によって、その判断にかなりの揺れがある。しかしながら、次の (7) に示すように、筆者達が独自に行なった複数の日本語の母語話者を対象にした調査の結果も、筆者達の直観に一致する判断を示しており、我々の判断の正しさを裏付けている (紙幅の都合上、本稿で



は調査の詳細について述べる余裕がないので、調査に用いた設問や個々の解答結果については別の機会に報告したい。<sup>3</sup>

- (7) a. [wa-ga . . . Qp-o] のパターンでは、wh 演算子の方が広い作用域を持つという解釈が圧倒的に優勢である。
- b. [QP-o . . . wh-ga] のパターンでは、wh 演算子の方が広い作用域を持つという解釈と数量詞句の方が広い作用域を持つという解釈の間にさ程大きな優位差は認められない（ただし、wh 演算子の方が広い作用域を持つという解釈の方がやや多い）。<sup>4</sup>
- c. [QP-ga . . . wh-o] のパターンでは、wh 演算子の方が広い作用域を持つという解釈と数量詞句の方が広い作用域を持つという解釈の間に優位差は認められない。
- d. [wh-o . . . QP-ga] のパターンでは、wh 演算子の方が広い作用域を持つという解釈が圧倒的に優勢である。

この調査結果から次の2つの一般化が得られる。

- (8) a. wh 演算子の方が広い作用域を持つという解釈は常に得られる。
- b. 表層の語順において、数量詞句が wh 演算子よりも左にある場合、数量詞句の方が広い作用域を持つという解釈も得られる。

(8a) の一般化は、Aoun and Li (1993: 195) のそれと一致するが、(8b) のように表層の語順に言及される一般化は、LF 表示の階層構造に基づく彼らの形式的な理論とは相容れないものである。(8b) の一般化に関しては次節で論じることにして、まず、(8a) の一般化を説明するために、(6a-d) のパターンに相当する LF 表示を次に示す。<sup>5</sup>

- (9) a. [<sub>CP</sub> ka<sub>IP</sub> wh-ga<sub>IP</sub> [<sub>VP1</sub> x<sub>i</sub> [<sub>VP2</sub> QP-o<sub>j</sub> [<sub>VP2</sub> x<sub>j</sub> V]]]]]
- b. [<sub>CP</sub> ka<sub>IP</sub> wh-ga<sub>IP</sub> QP-o<sub>j</sub> [<sub>VP1</sub> x<sub>i</sub> [<sub>VP2</sub> t<sub>j</sub> V]]]]]
- c. [<sub>CP</sub> ka<sub>IP</sub> wh-o<sub>j</sub> [<sub>VP1</sub> QP-ga<sub>j</sub> [<sub>VP1</sub> x<sub>i</sub> [<sub>VP2</sub> x<sub>j</sub> V]]]]]]<sup>6</sup>
- d. [<sub>CP</sub> ka<sub>IP</sub> wh-o<sub>j</sub> [<sub>IP</sub> x<sub>i</sub> [<sub>VP1</sub> QP-ga<sub>j</sub> [<sub>VP1</sub> x<sub>i</sub> [<sub>VP2</sub> t<sub>j</sub> V]]]]]]]

(Aoun and Li 1993: 196-97)

(9a-d) の表示において数量詞作用域がどのように決定されるかを順に見ていこう。まず、(9a) では、英語と同様、wh 演算子が数量詞句を構成素統御し

ているが、その逆は成り立たないため、作用域原理によって wh 演算子の方が広い作用域を持つ解釈のみが得られる。

次に (9b) では、数量詞句は、かき混ぜ規則 (scrambling) により S 構造において IP の指定部に移動されている。この位置は非  $\theta$  位置 ( $\theta$ '-position) であり、この数量詞句はこれ以上移動する必要はなく、wh 演算子のみが IP に付加されている。したがって、(9b) の表示では、wh 演算子が数量詞句を構成素統御しているが、その逆は成り立たないため、(9a) と同様、作用域原理によって wh 演算子の方が広い作用域を持つ解釈しか得られないということになる。この判断は、しかし、筆者達の直観に反する。

(9c) の表示に関しては、Aoun and Li (1993: 197) は、変項  $x_i$  と  $x_j$  の最も近い可能な非項束縛子がいずれも数量詞句 QP-ga になってしまい、最小束縛要求に違反するとして排除している。しかしながら、彼らが英語 (及び中国語) について論じる際に援用した束縛原理 C の働きは、ここではなぜか考慮されておらず、(9c) を不適格とするのは彼らの不注意による誤りであると思われる。本稿では、(9c) の表示そのものは適格であるということ認めの上で、(1c) に対する LF 表示として、次の (10) を提案する。

$$(10) [_{CP} ka[_{IP} wh-o[_{IP} [_{VP_1} QP-ga[_{VP_1} x_i[_{VP_2} t_j[_{VP_2} x_j V]]]]]]]]$$

(10) は、wh-o を IP に付加する前に  $VP_2$  に一旦付加するという点以外は、(9c) と同じである。したがって、(9c) も (10) も共に適格な LF 表示である。今仮に  $x_j$  の先行詞が QP-ga であったとすると、QP-ga の指標  $i$  が  $x_j$  に付与されることになり、 $x_j$  は主語の位置にある  $x_i$  に項束縛される。これは束縛原理 C の違反であり、故に QP-ga は  $x_j$  の可能な非項束縛子になれない。そこで、次に近い wh-o が  $x_j$  の非項束縛子となることから、この表示は適格である。この表示において、wh-o が QP-ga を構成素統御しており、作用域原理によって、wh-o の方が広い作用域を持つという解釈が得られる。それに加えて、(10) では、新たに QP-ga が wh-o の中間痕跡  $t_j$  を構成素統御しており、数量詞句の方が広い作用域を持つという解釈も得られることになる。このように、Aoun and Li (1993: 197) の提案する LF 表示を一部修正することで、(1c) の解釈が曖昧であることは説明できる。

最後に (9d) の表示では、wh 演算子は、かき混ぜ規則により S 構造において IP の指定部へと移動されている。この位置は非  $\theta$  位置ではあるが、wh 演算子は疑問標示語 (question marker) ka によって統率されなければならない、LF 表示において IP に付加されている (Aoun and Li (1993: 195-96) を参照)。一方、

数量詞句は  $VP_2$  に付加されている。したがって、この表示では、wh 演算子が数量詞句を構成素統御しているが、その逆は成り立たないため、作用域原理によって wh 演算子の方が広い作用域を持つという解釈しか得られないことになる。

以上見てきたように、Aoun and Li (1993) の提案する2つの形式的な解釈原理によって (1) のデータの大部分は説明することができるが、(1b) の曖昧性は彼らの理論では説明できない。次節ではこの問題に対する1つの解決策を提案する。

### 3. 形式的原理と機能的原理

すでに述べたように、(1b, c) のように表層の語順において数量詞句が wh 演算子よりも左にある場合、wh 演算子の方が広い作用域を持つという解釈に加えて、数量詞句の方が広い作用域を持つという解釈も得られ、曖昧になる。このうち、(1c) の曖昧性は Aoun and Li (1993) が提案する LF 表示を一部修正し、形式的な解釈原理を正しく援用することで得られることを論じた。しかしながら、(1b) に関しては、彼らの形式的原理では、wh 演算子の方が広い作用域を持つという解釈しか得られず、非曖昧な解釈になると予測される。この解釈は筆者達をはじめ多くの言語学者の直感に反する。(1b) の曖昧性を説明するためには、Aoun and Li (1993) の理論をさらに修正するという解決策も当然あり得るが、本稿では、もう一つの可能性として機能的解釈原理との相互作用による解決策を追求してみたい。

(1b) の LF 表示である (9b) では、wh 演算子が数量詞句を構成素統御しているが、その逆は成り立たないため、作用域原理によって wh 演算子の方が広い作用域を持つ解釈しか得られないはずであるが、実際には数量詞句の方が広い作用域を持つ解釈も得られる。このことから、日本語の数量詞作用域の決定には明らかに表層の語順が影響を及ぼしていると考えられる。

Chomsky (1995: 413) が述べるように、今日の極小主義プログラム (Minimalist Program) では、文の表層の語順は PF 部門において決定されるため、語順は LF 部門における文の解釈には影響を及ぼさないと想定されている。しかし、この想定に反し、少なくとも (1b) に見られるように、我々の直観では、語順によって数量詞作用域が異なる。もし極小主義プログラムの想定を維持するならば、語順による影響は LF 部門において関与しているのではないとする解釈をしなければならない。そうすると、表層の語順に基づく一般化は、LF

部門ではなく、表層の語順を反映した語用論レベルにおける何らかの原理によるものであると考えられる。そこで、本稿では、Kuno (1991: 269-70) が英語の数量詞作用域の決定を論じるために提案している次の (11) の機能的原理を援用する。本稿ではこの原理が語用論レベルで働いていると想定しておきたい。

### (11) Lefthand Q > righthand Q

この原理は、「(表層の語順において) 左側の数量詞の方が右側の数量詞よりも広い作用域を持つ」というものである (この場合の数量詞とは wh 演算子も含んでいる)。<sup>7</sup> この原理によって、「表層の語順において、数量詞句が wh 演算子よりも左にある場合、数量詞句の方が広い作用域を持つという解釈も得られる」という (8b) の一般化が説明できる。同時に、この機能的原理が英語にも日本語にも有効であることから、この原理が普遍的なものである可能性が強まるであろう。

ところで、このように形式的原理と機能的原理の両方を認めて、その相互作用で説明する解決策に対して、さらにもう一つの可能性として、逆に形式的原理を全て排除し、機能的原理のみによって説明することはできないのであろうか。そこで、前節において形式的原理によって説明を試みた「wh 演算子の方が広い作用域を持つという解釈は常に得られる」という (8a) の一般化を機能的に説明するために、次のような原理を想定してみよう。

### (12) Wh-operator > QP

この原理は、確かに (8a) に挙げた一般化を説明することができるが、Aoun and Li (1993) が提案する最小束縛要求と作用域原理が普遍的な解釈原理であり、日本語のほかになんとも英語・中国語においてその有効性が実証されているのに対し、(12) の原理は、英語の場合、(2a) において右側の数量詞句の方が左側の wh 演算子よりも広い作用域を持つという解釈がある (むしろ、その解釈の方が優勢である) という事実を説明できない。<sup>8</sup> つまり、(12) は日本語の言語事実だけを説明するためだけの極めてアド・ホックな原理であると言わざるを得ない。<sup>9</sup> したがって、全てを機能的原理で説明するのではなく、多言語間にわたって有効性が実証されている Aoun and Li (1993) の LF 部門における形式的原理を生かし、それを補う形で、英語に関してすでに提案されている語用論レベルの機能的原理を援用して (1b) の数量詞作用域を説明する方が、より妥当であると言える。そのような説明を与えることで、数量詞の相対的作

用域を決定するメカニズムの普遍性を捉えることができよう。

#### 4. 結語

本稿では、日本語の数量詞の相対的作用域の決定に関する問題を取り上げ、(1)の例文における日本語の数量詞句と wh 演算子の相互作用を説明するためには、Aoun and Li (1993) が提案する最小束縛要求と作用域原理という2つの形式的解釈原理だけでは不十分であることを指摘した。そこで、本稿では、Aoun and Li (1993: Ch. 7) の形式的解釈原理に加えて、(1b)を説明するためには Kuno (1991) が提案する機能的原理が必要であることを主張し、日本語の数量詞の相対的作用域は LF 部門における形式的原理と語用論レベルの機能的原理の相互作用によって決定されることを論じた。

#### 注

\* 本稿は第12回甲南英文学会研究発表会（1996年6月29日、於甲南大学）において口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。

- 1 (1)の例文は情報構造の問題を避けるため埋め込み文で提示してある。
- 2 Aoun and Li (1993: 195) は、次の例文を挙げ、QP-ga... wh-o という (1c)の例文のパターンは日本語として容認不可能であるという判断を下している。
  - (i) a. ??誰もが何を買いましたか。
  - b. \*ジョンカビルが何を飲みましたか。

これらの例文が容認不可能であるという判断に筆者達も異論はない。しかし、同じパターンでありながら、(1c)の例文は全く自然な日本語であり、適格な文である。数量詞句の違いによってこのような容認度の差異が生じるのは、(1c)における「2人」が、先行する文脈においてすでに登場している特定の2人と解釈され、いわゆる談話連結 (D-linking) という概念が深く関わっているためと考えられる (有村兼彬氏のご指摘による)。これは非常に興味深い問題ではあるが、紙幅の都合上、稿を改めてさらに論じたい。
- 3 筆者達の調査にご協力頂いたインフォーマントの方々の中には匿名を希望される方がおられたため、本稿ではご協力頂いた方々のお名前は一切公表しないことにした。関係者の方々にはご了承頂ければ幸いである。
- 4 Wh 演算子の方が広い作用域を持つ解釈の方がやや多いという事実から、次節で取り上げる機能的原理よりも前節で概観した Aoun and Li (1993) の主張する形式的原理の方が、数量詞作用域の決定により強く影響していると言えるかもしれない。
- 5 Aoun and Li (1993: Ch. 7) の分析では、顕在的統語部門 (overt syntax) でかき混ぜ規則が適用さ

れるか否かによって LF 表示が異なるとされているが, Saito (1992: 86) は, かき混ぜ規則が適用されてもされなくても LF 表示は同一であると主張している (詳しくは福田 (1994: 157-60) を参照)。

- 6 Aoun and Li (1993: 197) は, (1c) の例文に相当する LF 表示として, (9c) のほかに (i) の可能性も示している。

(i) [<sub>CP</sub> ka [<sub>IP</sub> [<sub>VP1</sub> QP-ga [<sub>VP1</sub> x<sub>i</sub> [<sub>VP2</sub> wh-o<sub>j</sub> [<sub>VP2</sub> x<sub>j</sub> V]]]]]]

しかし, この表示は最小束縛要求は満たしているものの, wh 演算子が疑問標示語 ka によって統率される位置にないため, (9c) と同様, 不適格として排除している。

- 7 Kuno (1991: 270) は, この原理が言及する語順は表層の語順のみであると暫定的に想定しているが, 本稿もそのような立場を取る。
- 8 Kuno (1991: 275-76) は, (1a) において主語の everyone の方がより広い作用域を持つという解釈の方が優勢であるという事実を「主語である数量詞の方が非主語の数量詞よりも広い作用域を持つ」という原理 (Subject Q > nonsubject Q) と「人間性がより高い数量詞の方が人間性がより低い数量詞よりも広い作用域を持つ」という原理 (More human Q > less human Q) によって機能的に説明している。
- 9 しかしながら, ある原理や制約が別の言語に当て嵌まらないからといって, 即座にその原理や制約の普遍性が否定されるとは限らない。Prince and Smolensky (1993) らが提唱する最適性理論 (Optimality Theory) においては, すべての制約は普遍的であると想定されているが, それぞれの制約は個別言語ごとに優先順位が決められており, より上位の制約が満たされていれば, 下位の制約に違反しても構わないとされているからである。このような立場に立った分析の可能性に関しては, 稿を改めて論じたい。

## 参考文献

- Aoun, J. and Y.-h. A. Li. 1993. *Syntax of scope*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. 1981. *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. 1986. *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. 1995. Bare phrase structure. In *Government and binding theory and the minimalist program: Principles and parameters in syntactic theory*, ed. G. Webelhuth, 383-439. Oxford: Blackwell.
- 福田稔. 1994. 「かき混ぜ規則と論理形式」 榎矢好弘教授還暦記念論文集刊行会編『ことばの音と形』 榎矢好弘教授還暦記念論文集, pp.157-68. 東京: こびあん書房.
- Kuno, S. 1991. Remarks on quantifier scope. In *Current English linguistics in Japan*, ed. H. Nakajima, 261-87. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Prince, A. S. and P. Smolensky. 1993. *Optimality theory: Constraint interaction in generative grammar*. Ms., Rutgers University, New Brunswick, N. J., and University of Colorado, Boulder. [To appear, MIT Press., Cambridge, Mass.]
- Saito, M. 1992. Long distance scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1: 69-118.

## 甲南英文学会規約

- 第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。
- 第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を計ることをその目的とする。
- 第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 研究発表会および講演会
  2. 機関誌「甲南英文学」の発行
  3. 役員会が必要としたその他の事業
- 第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する。
1. 一般会員
    - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
    - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
    - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
  2. 名誉会員 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻、英語英米文学専攻）を担当して、退職した者
  3. 賛助会員
- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、編集委員長1名、幹事2名
2. 役員の任期は、それぞれ2年とし、重任は妨げない。
  3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
  4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
  5. 会計、会計監査、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
  6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
  7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代

行する。

8. 評議員は、会員の意志を代表する。
9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
12. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員について年間6,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 編集委員会 第3条に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学各2名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第10条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。

この規約は、昭和62年5月31日に改訂。

この規約は、平成7年7月1日に改訂。



## 『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は3部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出し、和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスはA4判タイプ用紙65ストローク×15行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
  - イ. 和文：ワードプロセッサ（40字×20行）でA4判15枚程度
  - ロ. 英文：ワードプロセッサ（65ストローク×25行、ダブルスペース）でA4判20枚程度
4. 書式上の注意
  - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
  - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
  - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
  - ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook*, 3rd ed. (New York: MLA, 1989)（『MLA新英語論文の手引き』第3版 北星堂, 1990）または *The MLA Style Manual* (New York: MLA, 1985) に、英語学の場合 *Linguistic Inquiry style sheet* (*Linguistic Inquiry* vol.24) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は11月30日とする。

## 甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨をA4判400字詰め原稿用紙3枚（英文の場合は、A4判タイプ用紙ダブルスペースで2枚）程度にまとめて、3部（コピー可）提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割りふりは、『甲南英文学』編集委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、一人30分以内（質疑応答は10分）とする。

---

甲 南 英 学 会

No. 12

平成9年6月20日 印刷

— 非 売 品 —

平成9年6月28日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 学 会

〒658 神戸市東灘区岡本8-9-1

甲南大学文学部英語英米文学科気付

---